して居つた。

役者たちは、出場であるものは、衣裳も顔も、その儘で、取り散らされて居る小道具や何かを打ちすてて、座長の椅子の廻りに集つて、額を寄せて切りに案じ顔である。

「だから請元さん。私が昨日もあれ程に申しあげたではありませんか。」と、座長の張奎培は、側に立つて、苦り切つた顔をして居る請元の劉順徳を顧みた。

「全くなア。俺もまさか軍隊から手が廻らうとは思はなかつた。警察の方は、ちやんと行き渡つて、居つたから……」

「今更、そんな事を繰返して見ても仕方がありません。それよりは貴方と、此の一座の代表者である私とに、將軍府へ出頭しろと云ふのですが、その結果はどうなりませうかねえ。」と、訊ねても甲斐ない事とは知りながらも、心元なさに訊いて見る。

「さア、俺も初めての事であるし、どんな事になるか……」と、昨日とは打つて變つた、怯れ方である。

「座長さん。」と、その時、後から聲をかけたのは、洋裝の扮裝をしたまま、舞臺に出て居る時と變らない王克琴である。

「そんなに心配する事はないぢやありませんか。私どもは役者で、芝居をするだけでありますもの。その芝居が悪ければ止めさしたら、それで濟む事です。」

「所が。」と、座長は氣重く、言葉を切つて「貴女は、まだ張勳將軍の事を、ようお知りでないから、そんな呑氣な事が、云へるのですよ。氣に喰はないと、隨分と思ひ切つた所爲をする方ですからなア。」と、彼は一層に怯氣づいて了つた。

「ようございます。私が一人で、將軍府へまゐりませうよ。」と、王克琴は、事もなげに言つて退けた。

「まさか、貴女に！」張奎培も頼みたい心は、口元に出て來てるのであるが、外の役者の手前もあるので、差し控へて居る。

「さう願へれば、結構ぢやよ。」請元は悪狡さうに眼を光らして、ホッとした。

「何でもありませんわ。何も座長さんの請元さんのと、揃つて行く程の事でもありません。私一人で澤山ですわ。」

かの女は、怎うして易々と、此の難題を引きうけたのであるが、果して胸に何等かの考へがあつての事であらうか?!

銃劍をつけた兵士の衛る馬車に乘せられ、王克琴は、まるで外眼には、屠所へ牽かれる羊のやうに悲れに、將軍府へと引つ立てられたのであるが、かの女は反つて、平然としたものであつた。

意氣を賣つた女

「閣下！　えらい女がまゐりました。」と、張勳の所へ來た先刻の幕僚は、さも驚異な事でも報告をするやうに「寶永劇場から女優を拘引してまゐりました、韓營長が早速、訊問所で嚴重に取調べますと、まるで營長を馬鹿にしたやうな事ばかり申しまして、十七や八の娘とは思はれない、大膽な、喰へない奴なので、一時刑房へ叩き込んで置きました。」

「何か？　それはその革命劇の者か。」と、張勳は、彼を振返つて訊ねた。

「はい。」

「何で女役者などを拘引して來るのぢや。一座の代表者か座主を召喚せんのだ？」と、不興をあり〳〵と面に現して呶鳴つた。

「そ……それが代表者ださうでございます。そして刑房へ叩き込んでも、一向平氣なものでして

足拍子を取りながら時調を唄つて居る仕末です。」

「さうか。」と、張勳は氣色を直して「兎に角、もう一度、訊問所へ喚び出して置け、儂が行つて見やう。」彼は阿婆摺れた女役者の態度を想像して、牽かれるやうな興味を覺えた。

「閣下が、あの訊問所へ？」幕僚は意外な事に眼を見張つた。

「うむ。直ぐにその手配をせえ。」と、無造作に云つて、幕僚へクルリと後を見せて了つた。これは、何と云ふ風の吹き廻しか。將軍自身で、訊問所へ足を運ぶとはと、幕僚も妙な面をして、そこを去つて行つた。

やがて、法廷のやうな訊問所は、南京都督である張勳將軍が出ると云ふので多くの幕僚を始め、配下の將校たちは、威儀を正して詰めて居り、家に這入り切らないで、外にまで溢れて控へて居る有樣である。

張勳は、一段と高い、法務官席に、祕書の幕僚の三人を從へて、問題の女優である王克琴を前に、訊問の幕は切つて落された。

「お前は清皇室に怨でもある者かネ。」と、張勳は、前から連續しての詰問を始めた。

「いいえ。別に怨なんかありませんわ。」王克琴の答へは、サツパリとしたものだ。そして此の澤

山な、嚴めしい男たちの中に、ただ一人の女として、何と云ふ自若とした、泰然とした物言ひであらうか。

「すると、革命黨の成功を救ける爲めにあんな芝居を演つて歩くのだナ。」

「いえ、それも違ひます。私たちは役者ですから、お客の澤山に來る芝居を演るのですが、演つて惡ければ演らないまでです。」

「ふふむ。」と、彼は鼻で嗤つて「もう那麼革命の芝居などは止めて了ひ、これからは清皇室の爲めに、多くの人を善導するやうな芝居を演つて歩いたら什麼ぢや。」

「それは駄目です。」かの女は一言の下に將軍の言葉を蹴飛して了ひ「今頃、清朝に都合のいい芝居なんか、誰が見に來るものですか。」傍若無人、本統に少しの怖氣もなく言つてのけた。

これを聞いて居つた幕僚や將校たちはハッとして、將軍の面を仰いだ。彼が日頃の短氣を知つて居るだけに、怎麼に激怒を買ふことであらうかと、相手が若い女優だけに、幾分の同情も手傳つて居つたのであるが、案に相違して、何時もの張勳とは思へない程に、仕方なささうに苦笑して居るのを見て、また吃驚したのである。

張勳は、古い記憶と云つても、二年程前に微行して見た上海の演劇。その一座に居つた王克琴

と云ふ可憐な女優の面影が、燒きつくやうに、腦底に印されて居つた。

それは、死んだ第二夫人に面影が似て居るばかりでなく、觀客を魅する藝の力に、深く打たれたのである。が彼として、その場合、かの女優をどうする事も出來ない立場に居つた。と云ふのは、その一座は、彼としては、大嫌ひな革命劇を賣物にして居るし、もしも將來、自分の管轄下である南京へ、あんな一座が來たらば、二度と再び芝居の打てぬやうに嚴しい打擊と制裁を加へて遣らうと、腹で考へ、憎んで居つた、その一座に居る女優であつたからである。

そして其が思ひがけなく、二年後の今日。それもたつた今。幕僚の口から、王克琴と云ふ女優を拘引して、來たと、聞くに及んで、以前に見た革命劇と關聯して、もしかしたならば、あの女優ではなからうかと云ふ、その當時に見た王克琴の姿が、まさ〳〵と眼前に浮んで來たのだ。

そこで、今までに曾つて無かつた、幕僚たちや將軍府の人たちを驚かした、張勳自らその訊問と云ふ所にまで來た。

彼の胸に、老いた將軍の肚に、潜める二年越しの戀があらうとは、流石に誰も氣づく者はない。

王克琴が、殆ど將軍を何とも思はない程、云ひたい事を云つて退けるのを、彼は一々頷きなが

ら、苦笑し、微笑し、一層に優しい聲で、調子を落しながら訊ねて居る。

今では、他の連中が、齒がゆくつて見て居られない程に、何時もの將軍の姿——猛虎が風に嘯くやうな、蠻勇な、頑固な、一徹な氣性は、微塵も見えない。

「什麼したのだ？　閣下は！」

「さうさ。今日は餘程どうかしとるぞ。」

と、將校たちがコソ〳〵と囁き、耳打ちをする程、彼は本當に什麼かして居つたのだ。

「王克琴」と張勳は急に、四邊へ響く大聲で「お前は女役者などさしとくのは、惜しいものと思ふが、什麼ぢや。儂の下に居つて、舞臺のやうな狹い所を捨てて、天下を舞臺とする所で、思ひ切り立派な役の實演をやつて見ては？」

「ほゝゝゝゝ」と、かの女も、高い聲をあげて笑ひ出した。

「どう思ふナ。」張勳は頗る眞面目で、熱心である。

これはまた、他の將校たちを驚かした、

何と云ふ事だ？　假りにも裁判官でありながら、被告の女優に、妾になれと云ふ事を、大勢の前で、體裁よく、正々堂々と相談をして居ると、同じではないか。

そこに居る人たちが、開いた口が塞がらない程、呆れ返つたのに無理はない。

「さうですネ。私も役者を廢業して、今日からでも、貴方の所へ置いて頂きますわ。」と、王克琴も、將軍に負けぬ、あつさりとしたものである。

これもまた、そこに居る人たちを吃驚させた。

何と云ふ女優？　何と云ふ將軍だ?!

× × ×

年齡こそ違へ、胸に一脈の通ずる所のあつた張勳と王克琴。速座に話は纏まつて、この時は、將軍府の人たちを煙に捲いたのであるが、後年あの復辟の壯擧。それは例令失敗に終つたけれども、彼から意氣を買はれた王克琴が、預つて力があつたのだ。

戀の皇帝

一

淸の京都、西山の玉泉寺の尼、董小苑と云ふ、美しい女を慕ひ、その寺の燒け落ちた夜、

時の皇帝、一天萬乘の君たる順治帝は、行方不明になつて了つた。

帝の母君である太后や皇太子(後の康熙帝)が、あらゆる方面を隈なく捜索したが、遂に今日まで、愛する尼、董小苑と共に、その消息は分らないのである。

尼と皇帝の転落！

この言葉自らに、奇しき彼等の運命を物語るではないか。

人世最高の權威と榮譽である皇帝の位置を、塵埃の如くにかなぐり捨てて、美しい尼と戀に生きた彼の前半生、そこには痛ましい幾波亂があるのだ。

それは順治十一年の春のことである。

さしもに麻糸の如く、亂れに亂れた世も、太平の曙光が見え、江南地方も漸くに落ちついて、穩からしくなつた。

蘇の廓。美人の産地であるだけ、戰雲が收まると共に、當時名妓として聞えて居る冠白門、馬湘蘭、李香君、顧横波たちの四公子と云ふ美姫を始め左右教坊司院、二千餘の解語の花が、この艶を競つて居つた。殊に一際勝れた容色の董小苑が、土地の俠客である冒大勇に身請けされたので、廓雀の噂は一層に騒がしいものであつた。

「御免。」と、ある日の午さがり、冒邸の門へ訪れた總督府の役人らしい男數人。中で頭立つたのが、一際聲を張りあげて、「冒大勇は在宅かな。」いかにも横柄な物云ひである。

「へい。」と子分の一人は、そこへ出迎へて、

「何れからお越しでございますか？」

「總督府からまゐつた者ぢや。」

「はア、左様でございますか。さアどうぞ此方へ。」と、彼は先に立つて、正廳へと、彼等五六人の一行を案内した。

「暫く、どうぞお待ちを願ひます。主人は直にまゐりますから……」

子分はペコ〳〵と頭を下げて、その居間を出て行くと中庭を越した彼等の溜室の方へ戻つて來た。

「よう！　韓！　誰だッ？」と、一人が氣にして訊ねかけた。

「狗だ。狗だよ！」吐き捨てる調子。

「幾らか握して、追ひ返して了やア好いに、又何で客間へなど案内したのだ？」

「それが何時も遣つてくる地廻りの狗と、今日のは少し様子が違ふのだ。」

「へん。様子がどう違はうと、狗は狗ぢやねえか！　追ひ返して了へよ。」
「いや、今日の野郎は、最初から冒大勇に遇ひたいと恁う吐すのだ？」
「幾ら何と吐さうと、そんな事を親分に取次がうものなら、頭から怒鳴りつけられるぞ。」
「五百文宛も包んで、追ひ返して了ふか。」
「さうだ、それが一番だ。彼奴等が俺たちの家を廻るのは、それが目的なのだから。幾らかの役得になりや、いざこざはねえ。」
「親分に遇ひてえと來たのに、俺たちで扱つていいかなア。」と、案内した子分は、未だに煮え切らない態度である。
「やい、韓！　手前も隨分氣の利かねえ野郎だな。あんな奴を一々客間へ通す奴があるか？　門前で幾らか包んで呉れてさ。御役目御苦勞で追ひ拂へばいいのだ！」と、外の子分が口を挾んだ。
「さうかい。後で文句が出たら、お前たちに引きうけて貰ふぜ。」
愚圖韓と云はれるその子分は、のつそりとその溜室を出て行つた。跡ではどッと笑聲が、天井を突きぬく程にあがつた。
間もなく、彼の姿は正廳に現れて、威容を繕つて、いかめしく構へて居る役人の前。ぺこ〳〵

と安ッぽい叩頭を三四遍繰返してから、
「へい、どうも大分お待たせを致しやして、相濟みません。實は親分がお眼に掛らねばならぬのですが、その……つい手の拔けねえ要事がございやして。へい、これは甚だ失禮でございますがどうもお役目御苦勞さまで。」と、包んだ紙の内、金と分る役人の數だけを盆に乘せて、恐る〳〵彼等の前へ差し出したのだ。と見ると、一人の役人は急に立ち上り、顏色變へて怒り出した。
「無……無禮な所爲を致すと容赦はせんぞ。こ……これは何だ？」ポンとその盆を手で拂ふ拍子、金の紙包はポタリと床へ。
「へい、お怒りでは、全く恐れ入ります。どうぞ御勘辨を。」またぺこ〳〵と叩頭する。
「こらッ。某を何と心得居る？　總督府秘書劉榮祿であるぞ。冒大勇に要事あつて罷り越したのだ。本來ならば、衞門へ呼びよす可きではあるが、密々の相談もあり、洪總督閣下の御旨を受けて參つたのぢや。それを手が拔けぬ要事があつて、面會が出來ぬとは何事ぢや！　強いても遇はねばならぬが、どうしても遇はねば某にも考へがある。」
威猛高に怒鳴りつけた。
「へい、どう……どうぞお許しを！　そんな譯でしたら、決して一存で……。ですから手前も最

前、仲間にも話して相談致しやしたのでして。へい全くどうも申し譯がございません。どうぞ暫くお待ちを！」

彼はしどろもどろの返辭もそこ〳〵に、横飛びに、溜室へと引返し、

「だから、俺……俺が云はねえ事ぢやねえ。」

眼の色を變へた愚圖韓。呼吸忙しく「無禮を致すと容赦はせんぞと來たぢやねえか。」

情ない聲音である。

「はゝゝゝゝ。」溜室をゆるがす笑聲が、またどッとあがつて、

「韓！　手前も本當に眼先が利かねえな。土地廻りの役人か、總督府の秘書官か、その位の見當はつきさうなものぢやねえか。早く親分に取次いだがいいぜ。」

「へッ！　先刻は先刻で。あんな事を云やアがるし、此度は此度で御都合のいゝ事を吐しやがる。全く賴りにならねえ仲間だ。」ぶつ〳〵と溢しながら愚圖韓。更に親分の冒大勇から叱責されるのを覺悟で、彼の室へと遣つて來て、その次第を話した。

「さうかい！　劉秘書が俺に遇いてえと言ひなさるのか？」

でつぷりと肥えた三十四五の年頃、童眼に瞳ばかりが鋭い光を湛えて居る。

「では直に行くから、さう話して置いてくれ。」

ホッとして、彼は親分の前を退つた。包金の扱ひなど、氣振にも見せないのだ。

「おう！　よう訪ねて下さいました。儂が冒大勇です。」と、それから直に、彼は正廳に、劉秘書一行の役人と向ひ合つて、腰を下した。

「どう云ふ御用件か存じませんが、お呼び出しを頂けば、早速出頭致しますに。わざ〳〵お越しでは痛みいります。」と、流石に千餘人の子分を養ふ男だけ。如才なく、寛い心で、口を利いた。

「本日、某が參つたのは、兩江總督洪漢疇閣下の思召しを傳へ、其所許へ賴みにまゐつたのぢや。外のことではないが、近頃其方許が廓から請け出した董小苑な、あれは閣下がお心に掛けられて居つた女である。それで其所許が、この際、思ひ切つて、あの女を閣下お手元に差上げて呉れまいか、取りも直さず出世の道が開ける許りでなく、閣下も大變にお喜び遊ばすわけだ。」

「へい。」冒大勇はぐつと癪に觸つたらしい言葉附で「外ならぬ總督さまのお仰せ、從ひてえのは山々でございますが、あの董小苑の事ばかりは御免を蒙りやせう。」

「えッ、それは又什麼してだ？」

「どうも恁うもありませんや。俺が生命をかけて惚れた女ですからね。」

「しかし其所許が出世の……」

「さッ、その出世の緒が氣に入らねえのでさア。好いた女を總督さまに差しあげて、俺は出世なんかしたくありませんや。近頃豪い方たちの間には、美しい女を献上して、御出世なさるのも多いとは、聞いてますが、冒大勇は幾らケチな野郎でも、まだそれ程までに下りません、どうか平に御免を頂きませう。」

ポンと取りつく端のないやうに跳ねた。

「これッ、そんな事を申して、反つて身の爲めになるまいがな。」威嚇する積りである。

「へッへへへへ。」と、笑ひながらヂロリと役人たちを見遣り「腕づくや力づくなら、いさ知らず俺の生きて居る內、董小苑は手離しませんよ。どうぞ總督さまに宜しくお傳へ下せえまし。ではこれで失禮！」

傍若無人な振舞。人の怖ち恐れる總督府の役人を、鼻で扱ひながら、その居間を先へ出て行つて了つた。劉秘書官の一行も、互に何事をか眼で囁き、首肯き合ひながら、冒邸を立ち去つた。

がそれから三日目の夜。

總督府の兵士と巡警の數千は大擧して一度に彼の邸を襲ひ「法を侵し、匪徒を匿ひ、良家の婦

女を强姦し、徒黨を組む」と云ふ罪狀の數々をあげて、彼とその子分たちを召し捕ふと、不意に踏み込んだ。

「何ッ！　總督府の奴等が來たッ？」

冒大勇は豫て覺悟をして居つたと見え、その夜、少しも慌てる所がなく、

「無駄な血の雨は降らせたくねえ。もう恁うなつちや仕方がねえ。だがお前たちも、無理に死ぬことアねえぞ。逃げるだけは逃げたがいい。」と、子分たちに言ひ渡し、闇にむらがる捕手の圍みへと斬り込んだ。

冒大勇の本邸のある綠楊村では、時ならぬ血しぶき。あちこち到る所、暗にきらめく刄の光が飛んで、斬り合ひ斬り結ぶ劍戟の音物凄く、夜半近くまで慘劇が繰返された。

二

肝心の冒大勇始め子分の大多數は、捕手の圍みを脫出して行方を失つたが、彼の愛妾董小苑は恁うした譯から、兩江總督洪漢疇の手に移り、更に時の皇帝、順治帝の後宮へ嬪御として、洪總督から獻じられる事になつた。

洪總督は、三十七臺の轎車にこの地方の珍奇な産物を山と積み込み、その中に、順治帝へ獻ずる董小苑や外の美姫たちを乘せ、途中を警戒しながら、北京へ向け出發をした。

かの女は、旅の門出、總督から順々と、陛下の後宮へ送り込まれる因果を含められたので、すべてを諦めて轎車の人となつたが、日數を重ねて、山東の境にある淋しい宿驛にかかつた時、かの女の轎車の中へ、垂帳の隙間から、何人かが一封の密書を擲げ込んで行つたのだ、

これは意外にも、綠楊村のあの晩、別れた切り消息の知れなかつた冒大勇からの書面であるが認められた文面を讀んで行く内に、俠客肌の男と云はれた彼。もう昔ほどの熱も愛情も失つたがただ男としての體面から、洪總督の鼻をあかし、あの夜の怨を報ゆる手段として、今夜かの女を掠奪し、もう一遍おのれの手に取り戻さうとする、意地づくからであることが、明かに見てとられた。

しかし此の嚴重な警戒裡に、一番に守護の役人の多いかの女へ、密書をつけるには、屹度從者の内で、誰か内通して居るに違ひないが、この書面から推して、耐らなく、情ない、淋しい氣にさへなつた。冒大勇の許へ戻ると云ふことが、今は一向に嬉しく思はれないのである。

殊にこの數日來、山峽の細い道の上り下り、滿足な客棧一つない、不自由な夜を過し、邊僻な

村ばかりを通つた。そしてその夜も亦、前の日のやうに小さな客棧をぐるりと環り、轎車を列べて、嚴重な警戒裡にかの女たちは、假の睡りをむさぼらねばならぬことは、分つて居つた。

それを知つた冒大勇は、今夜、幾番目の轎車を襲つたらよいか、そしてかの女を掠奪するに都合のよい時刻とを、紙片に書き認め、道端へそれとなく捨て置て呉れと云ふのである。若しこの擧が失敗に終つたなら男としての俺の意地も廢つて了ふのだ。今更重ねての掠奪は思ひも寄らないから、後宮へ這入つて陛下の寵を得て呉れ、お互の緣はそれまでのものと諦めて貰ひたいと云ふことも、附け加へてあつた。

「あの人は今もう、私を愛しては居らないのだ。綠楊村で、總督の部下が邸を圍んだ際でさへ、暗に紛れて遁れて了ひ、私を顧みなかつた。あの時でさへ、既に私から離れた心を持つて居られたのに、今更掠奪するも、本當は男の意地づくからなのだ。」と、書面を繰返し讀みながら、かの女は何事か、深く思ひ決するところがあつた。

董小苑は、轎車が小さい宿場に着くと、紙片や筆を借り受け、何やらをすら〳〵と認めてくるりと丸めて紙屑のやう、車が宿を出はづれ、ゆれて行く途中、何氣なく道傍へと投げ捨てたのである。

「これで……これで、あの人とも……」と、低く漏した言葉の末、眼に怪しい露が光つて居つた。

その夜のことである。

山峡の部落、劉家保子の村で、見すぼらしい、たつた一軒の旅宿へ、この一行は宿泊することになつた。

董小苑をはじめ、多くの美姫たちは、轎車の中にそのまゝ睡る方が、遙に綺麗で、心安くあるので、その旅宿をめぐつて轎車の列を作つたのだ。

夜が更けて行くに從ひ、警護の士が、あちこちに焚火をしながら寢ずの番。京都に近くなつた喜びを、互に語り合つて居る。

「もう半ケ月もしたならば、京都の前門を望むことが出來やう。」

「さうさ。これからは道も下りが多く、坦々として居るから、餘程樂になるわけだ。」

「何にしても大切な方たちの御警護で、鳥渡も氣がゆるせぬのが心辛いが……」

「しかしもう大事もあるまいよ。今までが山から山と難儀な道ばかり、例の冒大勇の輩が襲撃には持つて來いの土地であつたが、別に影さへ見せぬ所を見ると、さしもの彼も、噂ほどでなく、

氣おくれしたと見える。」

「何しても、そんな者は出て呉れぬ方が、儂等も餘計な手數がかからぬと云ふものだ。」

この時、部落の暗を掠め、街道を縫ふやうに、この客棧の前、轎車の列に近づく怪しい黒い人影一團、蹄の音さへ低く亂れて數十騎。徒者の者に混つて現れた。

「よいか。第九車を襲ふのだ。外のものへは眼を呉れるな。旅宿をめぐる轎車。右から數へて九番目に、董小苑が居る筈ぢや。」

中で首領らしい男が、馬上から力の籠つた聲で云ひ渡した。

さツ〳〵と響く蹄の音、枯草を踏みしだく跫音が、海の底のやうな靜寂な夜、山の大氣を顫して、風が傳へて來たのだ。

「やツ！　あの蹄の音は何だツ？」

警護の士の一人は愕然として耳を立てた。

「北の街道から入り亂れてくるぞ。」

もう一人の士は、顫え聲で暗の彼方を透して見た。

「どうも可怪しい！　ただ事でない。直ぐと皆を起したらよいぞ。」

「おう！　合圖の太鼓を打たうか！」

「さうだ。急いで行け。」

焚火の側を離れた一人の士、急いで旅宿の方へ走り去ると間もなく、急を知らせる太鼓の音はとう〳〵と山から山へこだまして、物凄くも響き渡つた。

「何事だッ？　太鼓が鳴るぞ。」

ここかしこに屯して、野營に冷い夢を結んで居つた衞士たちは、跳ね起きるや、枕元にある太刀を握んで外へ出た。

彼等の鼻先、暗から吹き出す魔風のやう、どッと雪崩の素迅さで、轎車を目がけて一團の黑影。防げする彼等を蹴散しながら、わあッと喚聲高く押し寄せた。

「それッ、董小苑を圍め！」

警護の士は云ひ合はさぬが、第十七番目の轎車。それに睡つて居る筈のかの女の廻りへ、ばら〳〵と走り寄つた。

意外にも、その怪しい一團は、第九車を襲ひ、そこに死守して居つた警護の士、三四人を見て居る間に、ばた〳〵と斬り伏せ、轎車の中から一人の美姫を引き出した。

「あれッえ。」と、女の帛を裂く悲鳴。

「心配するでないぞ。お前を迎へに來たものだ。」と、女の耳元で、黑い影は强く囁いた。

「いえ、どうぞ……どうぞ……」と、悶え泣く女の烈しい叫び。闇を突き刺して、悲しげに聞えてきた。

「これ〳〵、そのやうに心配する者でない。」

同じ言葉を繰返す低い聲がして、第九車の女は、黑い一團の人影の中へ捲き込まれ、浪の引くやう、すさまじい勢で、さッと引きあげて了つた。

この騷ぎ、流石に眠つた劉家堡子の村も、上を下への大騷動。警護の士は武裝を整へると、一部は直ぐ、第九車の美姫、掠奪された金氏を取り戻さうと、その跡を追ひ、殘りは嚴重に警戒して、更に來襲に備へた。

「什麼も可怪しい！　何で金氏を掠奪して行つたのだらうか？」

「さア、あの方はやはり漢人の娘ではあるが、滿兵が戰爭で捕虜にし、洪總督へ獻じた一人である。別に武家出と云ふのでなし、あんな大騷ぎをしてまで、陛下へ獻納する途中を襲ふ程のことはない筈だ。」

「此度陛下へ、献ずる美女三十人の内、何と云つても董小苑、あれを置て、こんな事件を惹き起す女は居らないのだが……」

「何しても妙なことである。」

警護の士は、寄ると觸ると、この不可解な掠奪事件の噂ばかり、この金氏を奪つた彼等の行爲を怪しんだ。

第十七の輪車の内、この騒動を前から知つて、待ち構へて居つた女、それは董小苑で、先刻道端へ落した手紙から、冒大勇と巧に手を切つて了ひ、ざわつく衞士の話に、チツと耳を傾けて居つた。

蘇の廓の女郎を振出しに、賭博打ちの俠客と云はれる冒大勇に請け出され、更に一躍して、兩江總督洪漢疇に思はれ、三度轉じて、皇帝への献姫として、送られる途中、かの女は始めて、自分の道を切り開いたのだ。

刀を借りて人を殺さうとした洪總督の企劃は、反つてかの女の爲め、自分を殺すやうになるかも知れなかつた。

三

「陛下！」と、或る日のこと、董小苑は、愁はしげな樣子をして、順治帝の御前に出で、沈んだ調子で話しかけた。

その頃は、もうかの女は後宮千餘の嬪御夫人を蹴落とし、一躍して妃の位にのぼされ、董妃と云はれ、帝の寵愛を一身にあつめて居たのである。

「陛下に折入つてお願ひがございますが、どうぞお聽き屆け願しう存じます。」何時になく改まつた口調である。

「何か知らぬが、改まつたその言葉、其方のことゆゑ、遠慮せずに云ふたがよいぞ。」

「はい、實は後宮の嬪御宦官、妾が陛下の御寵愛を蒙り居りますを、快く覺召されず、皇太后陛下へ有ること無いこと、いろ〳〵と申しあげて居るさうでございます。陛下御一人のお情を頂き居ります妾の身は、千の宮女たちを向ふへ廻しても、少しも恐れる所でございませんが、ただ皇太后陛下のお氣に逆くやうになりました節、どう致したらよからうかと、末のことを思ひ心を苦しめて居ります。」

「うむ。それは朕の耳に入らぬことでもない。其方の言葉がある上は、厳く取調べ、そのやうな不都合な宮女宦官たち一人残らず西山寺へ送り、宮中から追放するであらう。」

「いえ、どうぞ夫ばかりはお思ひ止り下さりませ！　さうでなくとも、怨は妾の身に注れ居りますのに、またしても陛下の御手に縋り、左様の事を致しましたならば、屹度どんな事にならうも計られません。」

「いや、心遣ひすな！　よい、朕にも思ふ仔細があるのぢや、皇太后陛下の御寵愛をよい事にして、近頃宮女に仕へる宦官の専横、眼に餘る事ばかりぢや。其方も随分、面白うない事が多からう。朕とても苦々しく思ひ居るのぢや。」

順治帝は、董小苑の云ふことなので、一も二もなく受け容れて、後宮に根を張り、權勢を振つて居る宦官たちの改革を思ひ立つた。そして一番に權力のある宦官十餘人の馘首を突如に申し渡し、嬪御の内で、董妃に反感を抱くもの數人を、西山寺に送り尼になるやう命じて了つた。

董妃が、帝の御前に出て、その事を申しあげてから三日目、もう此のやう斷乎とした處分を行つたのである。

後宮の恐怖と不安、その騒ぎは一通りでないが、事の成行を氣遣つたかの女は、再び帝の御前

に出た酒宴の席上、多くの侍女たちの手前、喜びを包んで訊ねかけた。

「陛下！　此度のことにつきまして、皇太后陛下のお怒りに觸れるやうな事はございますまいか？　もしもさうなりました曉、妾はどうなりますのでありませう。やはり西山寺へ入り、尼とならねば……」

「いや、此度のことは、朕が一存に出た議ぢや。其方の知つたことでない。太后陛下のお咎めがあれば、朕が身に引きうける。」

「左様ではございますが、妾は何となう氣がかりでなりません。」と、態と打ち悄れた態で、帝の膝にもたれ悲しい眼を伏せた。

「これッ、小苑！　其方はまだ後宮に氣づまりな宦官宮女でも居るのか。其方が好かぬ者は、朕も好まぬ。誰なと名を申して見よ。」

美しい小苑の伏した姿を、膝に抱くやうに、白い頸からすんなりとした肩へ眼を落した時、耐らない愛着に胸を締めつけられる思ひで、優しく低い聲で囁いた。

「はい、恐れ多い儀にございます。ただ陛下の御推察にお任せいたします。」聲を忍んで、刻むやうに身を顫せながら、帝の膝へ泣き伏した。

「うむ。するとまだ其方に辛く當る者があるのぢやな――誰だ？　云ふて見よ。」
「一年足らずの間に、陛下からとのやうお厚いお情を頂き居ります妾の身、後宮の誰とて憎み、そねまぬ者はございません。」
「それでは其方一人の外、後宮の宮女たちを解放しろとでも申すのか？」
「……」董小苑は返へはしないが帝の心をおのれ一人で握んで居るのを希むだ。
「それは朕とても、其方一人居れば、もう今となつて千餘の嬪御夫人に用はない。が太后の覺召しも如何？　そのことばかりは急には取り計らひ難い。」
帝も持て餘すやうに云つた。
「是非がございません。どうぞ妾を西山寺へお遣し下され、尼にして頂きたうございます。」と、帝の側を離れ、跪いて、他所々々しくすねる風に云つた。
「小苑！　それはまた什麼したわけぢや？」
「妾は死ぬまで、恐れ多うございますが、陛下の御胸に生きたうございます。さうでないならば尼となつて、ただ今のお情を思ひ、淋しく活してまゐります。」
「もうよいぞ。小苑！　そのやうな事は申すな。朕は其方を死ぬまで愛さう！　玄宗が貴妃の愛

にも、よも劣るまいと思ふ程、朕は海誓山盟、仇には契はぬ筈ぢや。」
順治帝は、廓で練えた董小苑の腕にかかつては、年こそ四十を越したれ、初心な男も變りがなかつた。かの女の思ふさまに綾なされて居るのだ。
帝の母君である皇太后の耳に、何時か、近頃後宮に於ける董妃の事が、下樣のやうに亂れ行く風儀の噂と共に聞えて行つた。
太后からは、順治帝へ急使が立つた。そして漢人の娘である董小苑を、妃にのぼすさへ滿室の宗規を破り穩かでないのに、近頃殊に不都合の數々を列記し、宮女が罪を得た時に移される、西山寺へ董妃を送り、尼とするやう嚴命が申し渡された。
「小苑！」と、帝は太后の仰せに逆くことも許されない今の境遇。悲痛の面に涙さへ湛えて、「朕が力でも及ばぬことぢや。再三再四、太后陛下へお願ひいたしたが、其方のことを痛くお憎しみぢや。寺の生活も長ふはあるまい。屹度朕が身に引きうけても、其方を再び後宮へ呼び迎へる程に、暫くの辛棒をして貰ひたい。朕も忍んで、時折は西山寺へまゐるであらうから、今は表面、一先づ寺へまゐり、尼となつて呉れ！」と、董小苑を呼んで、優しく諭されたのだ。
「はい、お仰せはよく分りました。何時かは尼になることと、覺悟いたして居りましたが、餘り

に早い今日の日をお情なく存じます。」小苑も、本當に涙に暮れて居つた。

後宮に眼ざはりな、宦官宮女を退けて間もなく、此度は自分が退けられる事になつた。

帝と小苑は、飽かぬ別れをしたが、それから毎日のやう、帝はこつそりと西山寺へ行幸し、かの女の下に時を消して居つた。

この事は、直ぐと、皇太后の耳に入つた。

「帝を呼べ！　一天萬乘の君たる身で、女々しくも罪を得た尼の下を訪れ、日夜快樂に現身をぬかすとは、飽れ果てた事ぢや。」と、烈しい怒りから、順治帝を叱責され、その夜の内に、西山寺を燒き拂ひ、一人殘らず尼たちを燒き殺したなら、帝の呆氣も夢もさめやうと嚴命を下した。

西山の尼寺、夜の内に燒け落ちたが、翌る朝になつた時、帝の姿は宮中に見出だされず、董小苑の燒屍體の不明と共に、その消息は未だに分らないのである。帝位を捨てた彼が、愛する董小苑と、何處かで戀に生きて居つたことは慥である。

女優金翠花

女優の轎夫に變裝

支那の武昌、革命の火の手があがる一ケ月程前の事であつた。

楊子江の堤、洋々たる水面の遙か遠く、向ふ岸も眺め得られやうと云ふ程に、小氣味よく空の晴れた午後の日射しを浴びて、一挺の美しい轎が轎夫二人にかかれて、後からはその侍女であらう、小綺麗な若い女が錦の袋に玉笛か胡弓かを入れたのを抱へて、ゆつたりとした歩きつきで、黄ばんだ楊柳の間を縫ふやうに話しながら行く。

「ねえ、お師匠さん。」と、轎の中の女を呼び掛けた侍女は「今日の宴會ぐらゐ嫌らしい男の多いつたら、妾を何度か變な室へ連れ込みましたのよ。」

「まあ。」と、飽きれた風に言つたが、轎の女は語調を變へて「でもお前は先刻、大變に面白かつたと言つたぢやないの。」

「えゝ、そりア面白いには面白うございましたが……」と、言ひ澁つて「隨分氣味も惡うございましたわ。」

「對し向ひで口說かれたのかい。」

「いいえ、那麼な事位は平氣なのですが、あの警察署長と云ふ方が、誰も人の居ない、狹い室へ妾を連れ込みまして、私がお前に折り入つて賴みがあると言ふのですもの。六十近い好い年をして、眞統にいけ好かない爺だと思つて居りますと……」

「おほゝゝゝ。」と、輪の女は笑つた。

「それがネ、お師匠さん、貴女のお身の上の事なのです。終ひには、妾が好い加減に扱つて居りましたものですから、大層腹を立てて了ひまして、お前が眞統の事を申し立てぬならば爲めにならぬが好いかと、睨めつけるのです。それから妾は怖くなりまして、訊かれる事だけは答へました。」

「まあ、何を話したの。」と、氣になる樣子で訊ねた。

「お前の師匠は女優をして居ても、餘り舞臺にも立たぬさうだが、何で那麼な贅澤な活しが出きるのかと云ふ事を訊きまして、財產でもあるのか、それとも誰か金でも寄越すのかなどと、それは〳〵面倒臭いことを執拗く云ふので、妾もほと〳〵嫌になつて了ひましたから、那麼な詳しいことは妾には分らないから、貴方がお師匠さんに訊いたら好いでせうと言つた遣りました。すると、お前の師匠も何れ取調べはするが、師匠は毎日如何な生活をして居るか話して呉れと云ふのです、如何な生活つて、ねえお師匠さん、妾も眞統に困つて了つたわ。」

「何とお答へしたの。」

「それは定つては居りませんと言つて遣りました。お芝居へ出ない日は御贔屓のお客さまがお見えになるか、お座敷へお呼ばれして行く日が多いので、家には滅多に居らつしやいませんと云ふと、その一番親密な、最贔にする客は誰々かと訊くのです。」

「それで、誰方だと言つて？」

「總督の唐震川さまが、お師匠さんを一番御最贔にして下さるお客さまですと申しますと、ねえお師匠さん、その時のあの署長の顏たら無かつたわ。うむ噂の通り唐總督閣下も御最贔か。困つた事だと、いかにも落膽した面付で、暫く默つてゐましたが、お前はもう向ふへ行つて好いと言ふのです。這麼な事なら早く唐さんのお名前を言へば好かつたと思ひましたわ。それから又一時ばかり置いて妾をその室へ呼び込んでから、先刻お前に訊ねた事は師匠には內密にして居れと、威張つた口をきくのですもの、それも何卒內密にしてゐて貰ひたいとでも賴むのなら、妾だつて女ですもの默つて居ますが、唐さんのお名前を聞いては閉口垂れる辭に餘り豪さうな風をします

から、みんなお師匠さんにお話して了つたのですわ。」

「さうかい。たつた其れ丈の事を訊くのに、お前を別の室へなど呼び込んだのかね。妾も今日の宴會へ呼ばれる事は何だか氣が進まなかつたのだが、日頃御贔屓下さる皆さまがお見えになると言ふものだから出掛けたのだが、嫌な署長だね。」

「それからお師匠さん。まだ這麼な事を鎌をかけて訊きましたよ。お前の家にはよく革命黨の人たちが遊びに行くな、あの内で近頃日本から歸つて來た宋學仁と云ふ年頃三十五六位の人が居るだらうと言ふのです。だから妾は那麼な人は知りませんと言つて遣りました。」

轎の女は什麼したのか、何とも返辭をしなかつた。

前と後の轎夫、二人は互に面を見合してニタリと笑つた。それは美しい轎に似ず、汚れた紺色の袷、猫毛の帽子を眞深に、砂と埃で黑い顏をして居た。

それから轎が餘程來てからである。

堤の下や樹立の蔭からばら〳〵〳〵と、立ち現れた十數人の巡警や私服の刑事、轎の行く手に立ち塞つて、ぐるりとその廻りを取り圍んで了つた。

ハツとしたのは轎夫二人よりも、轎の中の女である。後の弟子は樂器の入れてある錦袋を取り

落して了ひ、ぺたりと腰を落してがた〳〵と震え出した。

「待てツ。その轎の中には叛逆を企てた宋學仁が居らう。」と、先に立つた一人が叫んだ。

四人の巡警が少し離れた所から、ぴつたりと轎を目がけて銃口を向け、いざツと言はば打ち放さうと、引金に手を掛けて居る。

「轎を置けツ。」と、又一人が叫んだ。

「は、はい。」と、轎夫二人はいかにもおど〳〵した風を裝ふて、轎を下した。

「宋學仁、出ろ！」

「兎れぬ所だ、神妙に繩につけツ。」と、巡警は口々に叫んでは居るが、相手の宋學仁は捕つたが最後、銃殺される代物である。眞前に飛び出して轎の帷や簾に手を掛けて引きずり出すのはいいが、まかり間違へば、先方は死に物狂ひ、生命を投げ出して居るのであるから、冥途の道伴れ位の考へから、ピストルの一發や二發のお見舞を受けないとも限らない。だから各自に叫び聲はあげて居るが、誰もずツと轎に近よつて中の人を引き出さうとする者もない。轎の中は人が居るやら居らぬやら、呼吸の音もせぬ位に靜かだ。尙のこと巡警や刑事は怖氣をふるつた。

「こらツ、轎を出ろツ。」などと遠く人の後の方から怒鳴つてゐる巡警なども居る。

「もし皆さん。」と、轎夫に似ぬ嫌に落ちついて居る一人は「この轎には貴方がたがお仰るやうな宋……宋學仁などと言ふ方はお居ではございません。」

「だ……默れ。」と、巡警は突然、ぴしやりと頬をはり倒して「おのれ等の知つた事か、ひつ込んで居れ。」

「は……はい」と、紅くなつた頬の痛さを押へながら「金翠花と云ふ女優さんです。」

「ま……まだ吐語すか。吾々の方はすつかりと調べがついて居るのだ。署長の宴會の歸りに金翠花が宋學仁の潜伏をして居ると目星をつけて居た家へ寄道をしたでないか。この轎の出たあと入れ違ひに、あの家を捜索をして、一足違ひで、おのれ達に逃げられた事を知つたので、船で先廻りして、待つて居たのだ。もう免れぬ所であるから、穩やかに縛についたがよからう。」と、轎の中に向つて言つた。

轎の簾がサツとはね退けられた。

巡警たちはたち〳〵と二三歩、後へ退つて、見ると驚いた。てつきり宋學仁――清朝の天下を轉覆を計つて居る怖ろしい叛逆人と思ひの外、花も恥らう美しい女であつた。

轎からすつと、輕く身を露して、すつくと立つた花の織模様を散した水色の衣物に、薄桃色の

ズボン、細面の小さい輪廓に凉しい眼が澄んで、後に垂れて結んだ髪、少女のお下髪のやゝにうひ〳〵しい姿である。

「貴方たちのお名前をお聞かせ下さい。妾は今夜、唐總督のお宅へお伺ひ致しますから、此の事をすつかりとお話を申し上げたうございます……」

「いや、貴女が金翠花さんであれば、何に……別に何もお留め申すには當りませんが……」と、一人の刑事は籤つついて蛇の具合で、飛んでもない事が出態をしたと考へて居つた。吾々の名前を云々でしたと、此の女の口から唐總督に謂れたが最後、金翠花の云ふ事であれば眼鼻の區別さへつかぬと謂れてる位であるから、中々馘られる所では濟みさうもない。矢釜しく革命黨員を取締り、見つけ次第に捕縛しろと云ひながら、己の愛する女が革命黨員とちよい〳〵往復する形跡が見えるのに、少しも構はないのだから、總督にも弱つて了ふが、何とか此の場を取繕うて逃げなくてはと、腹の中で思案をした。これは一人、この刑事許りではない、外の巡警も同じ考へである。

「いや、これは眞統に御無禮をいたしまして。」と、腹の中のいま〳〵しさを押しかくして、顏では笑ひながら「部下の失態で、豪い御迷惑をかけました。何分これは總督へは御内聞にお願ひし

ます。」

「さう、それでは妾は行つても差支へない。」

「はア。」と、三四人の巡警が聲を揃へた。

「では。」と、言ひながら、後を振り返つて「あらッ、鳳蓮！　お前は腰をぬかしたの？　おほほほほ。」と、笑ひながら「意氣地がないねえ。さア行くからお立ち。」

金翠花は再び轎の人となつた。

巡警たちは如何にも殘念さうに、その影を見えなくなるまで見送つて居つた。

「學仁さま。」と、轎の女――金翠花は低い聲で「それでもあの巡警の中に、貴方を見知りの者がなくて幸福でしたネ。」

「はゝゝゝゝ。」と、前の轎夫は元氣よく笑つて、「まさか宋學仁が女優の轎夫とは氣がつくまいさ。」

「全く、學仁先生が此のお妾とは。」と、後の轎夫が相槌を打つた。

さうだ。この宋學仁は革命が成功をして、土臺の腐つた清皇室の大殿堂がもろくも崩れ落ちた時、共和の政府に一躍して司法大臣の職に就いた人であつた。

それは後の事であるが……

刺客を送る宴會

「皆も知つての通り、御皇室の衰運は恐れ多い次第であるが、上が御四歳の御幼年に渡らせられるにつけ込んで、攝政の宮を始め、親王貝勒の各皇族が、何れも女人にも劣る情ない仕儀ぢや、されば譜代恩顧を辱うして居る旗人はどうかと云ふに、これも骨のある者は一人もなく、なげかはしい事を見聞する。儂は此の老年に及んで、清朝の亡滅を見るに忍びないのだ。」と、涙を呑んで語る一人の老人、白髯長く胸に垂れて、眼に露が光つた。

そこは輝く電燈の大廣間、二十人の壯丁を前に、卓を圍んだ宴會の席上であつた。

「今夜幸ひにも、儂の門下から皆の如き、清朝の末期」と言つてから暫く撫然として「儂は末期とは言ひたくないが、四圍の狀況がそのやうに思せるのぢや、此の末を飾る、勝れたる二十人の壯士、歴史に華と殘る二十人の刺客を出だした事を譽とする、先帝も草葉の蔭から定めし儂の不甲斐ないをお笑ひなさらうが、皆が殊勝なる決心には、屹度涙を流して喜ばれて居らう。儂は清朝に生をうけた人間ぢや。皆も清皇室の粟を戴き、御先祖は滿洲以來の旗下の士ぢや。よいか

御先祖の名を辱しめぬやうに、清朝の爲めに一働きを願ひたい。」

「言ふまでも御座いませぬ。」と、酒に血の湧く壯者は、「神明に契ひ、必ず革命黨の首領共は片端しから刺し殺して見せます。一死を以て一死を購ふ、孫文でも、黄興でも何の事があらう。」

「さうぢや。俺は革命黨でも急進派である宋學仁を覗うて呉れる。何でもよいから、彼等の頭をなくす事だ。頭がなくては革命などと云ふつまらぬ眞似も出き得ない。」

そこで各自は暗殺を目さす革命黨の首領の名を言つて、老人に告げた。

「だが決して死を逸まる事はないぞ。身を逃れるだけは逃れねばならぬ。」と、その老人は戒むるやうに言つた。

どん／／／／と、烈しく扉を叩く音がする。

「誰ぢや。入つてよい。」

扉口から從者が入つて來て、老人の側へ倚て袁惠凱が見えた事を告げた。

「袁惠凱さんなれば差支へない。此所へお通し申せ。」

やがて鼻下に半白の鬚のある同じ年配位の老人が其所に案内されて、一座を見廻しながら、

「張洪どの、此の席は……」と訊ねた。

張洪と呼ばれた老人は、己が食客の内から二十人の壯士を選んで、革命黨の首領を暗殺の爲めに各地へ放つ事を詳細に話した。

二老人共に清朝に取つては、頼もしい忠勤の臣であ。

「おゝ勇ましい門出。聞くさへ心の躍る勇士の面々と、思ひがけなく一座する事の出來たのは、儂が一生の榮譽ぢや。先づ清皇室の萬歳を唱へて、皆が門出の祝盃をあげやう。」と、袁惠凱は立ち上つて、右手に高く盃をあげた。

「乾盃」の聲が、皆の口から出て、三度盃は高くあげられては、乾された。

紹興酒の香り、強烈なる黄酒の匂ひが、室に滿ちて、人々の面はまるで清朝を思ふ血に燃えて居る如く思はれた。

この刺客を送る宴會が、北京の張洪の屋敷に開かれて間もなく、革命黨の首領の面々が續々と南に北に、外國から歸り、治外法權の居留地から出て、各處に出沒をした。機は來れりと刺客の多くが、姿を變へては其の跡を追つたのである。

その刺客の内の二人であらう。見るから汚い饅頭賣と、苦力の山東邊りからの出働ぎ風に變裝をして、一人は首から木箱を紐でつり、もう一人は膝のぬけたぼろ／／のズボンを穿いて居る男

が居る。

二人は暗の上海の街頭を幸ひ、軒燈の光を避けながら、前に話しながら行く三人の跡を見えがくれに追ひかけて行つた。

「あの三人の中に居る男が慥に宋學仁だ。見覺えがあるから間違ひない。」と、苦力風の男が低くささやくやうに言つた。

「然し連れの奴等が邪魔ぢやないか。加之に此の闇のことだから、ピストルでは一寸當を落すことは難しいぞ。矢張りどんとこれで。」と、とんと腰の邊りを輕く叩いて「ぐさりと刺すより外はないナ。」

「俺がヤツつけやう。」と、苦力風の男は力を籠めた調子で「張先生へ宜しくお話をして呉れ。大抵は仕遂げて呉れる考へだが、萬が一に仕損じても、後から餘計な手出しなどをして呉れるなよ。」と念を押した。

「うむ、それは心得て居る。未だ誰も殺つたのを聞かぬやうだが、最初の血祭りだ。正確やつて呉れ！」と、饅頭賣の男は更に聲を低め「奴等は又、金翠花の家へ行くのだらうが、彼處に入られたが最後、もう手出しは出來ぬから其の積りで居らぬと不可ぬぞ。俺も五日程あの怪しい女優

の門前近くを覗つたが、好い手懸りもなかつた。それに可笑いのはあの女優の室だ。革命黨のやうな男が入つたかと思ふと、淸朝第一の味方と思ふ此所の唐總督の秘書官などが入り込むのだ。唐總督が金翠花の色香に溺れてゐると云ふ噂もあるが、それにしても眼と鼻の間を、革命黨員臭い男たちが大手を振つて、出入りをするのを大目に見る事もなからうし。何方にしても怪しいのは女優の室だ。敵と味方がごた〳〵と集つて話してるやうに思はれる時があつた。此所の警察でもあの女優には手を燒いて居る樣子だから、あの女の室へ飛び込まれない內に片づけて了はなくてはなるまい。それから……」と、何かひそ〳〵と耳打をした。

「よしッ、分つとる。」と、苦力風の男は頷いた。が其の言葉は跡へ、姿はすうつと、燕のやうに暗を切つて、迅く走つて行つた。前に行く三人が足音にハツとして振回つた時、苦力風の男の黑い姿は、中の人にどんと突き當つて、暗に鋭い刄が光つた。

「あッ」と云ふ悲鳴。その男は二三歩走つて路上に打ち倒れた。

「どうした。」と、一人の男が抱へ起すと、胸からべつとりと流れ出す血潮、聲も出ずに苦しいうめき聲を漏した。もう一人の男が、

「待てッ。」と叫んで苦力風の男の跡を追つた。がバツタリ、態とでも打つかつたやうな饅頭賣の

爲めに仰向けに打ち倒された。

「馬……馬鹿奴。」と、男が叫ぶと一緒に、

「な……何だ。」と、饅頭賣の聲は怖ろしく大きかつた。

其の男は暫く起き上る事も出きない程に石疊路でしたたかに腰を打つて居つた。首に釣つた籠から跳ね飛んだ饅頭であらうが、夜眼にも白く路上の彼方此方に飛び散つて居る。

秘密の謎は解けた

「儂の秘書見たいな仕事をして居つた牛周山が刺し殺されたのぢや。」と、言ふたのは刺客を送る張洪の宴會の席に居つた袁惠凱であつた。更に語を繼いで、

「餘程、手の冴えて居るものと見えて、ただ一突き、見事に心臟を貫いて居つた。」

「それはお氣の毒な事をしましたナ」と、卓子を中に向ふへ腰かけてゐる男——楊子河畔で輪夫に變裝をして居つた宋學仁が、言葉を挾んだ。まだ其の席には二人の男と、女優の金翠花が隈の所の枕に、足を揃へて腰かけながら、人々の話を聞いて居つた。

其所は舞臺に立たぬ、怪しい女優と謂はれて居る金翠花の家の一室であつた。

袁惠凱は清朝に取つて、先帝以來無二の忠勤をぬきんずる者と世間から信じられてる人でありその向ふの宋學仁は清朝の天下を覆へさうとする、革命黨も急進派の第一人者、お互に敵と敵が此の親しい話し振りは什麼した事であらうか。

「それもな。」と、袁惠凱は調子を改めて「牛周山が貴方に面影がよう似とるもんぢやから、つまり貴方と感違ひをして暗殺をしたものだ。」

「さうですか。それは尙更お氣の毒です。僕の身替りとなつた、周山さんの追悼會でも竊に催す事にいたしませう。」

「だからナ、學仁さん、貴方は北京邊りの頑固黨から餘程つけ覗れて居るのぢやから、氣を注けんと不可んぜ。」

「はゝゝゝ、御心づけは忝じけないですが、學仁は革命の成就せぬ內は、暗々と打たれる事などはありません。」

「まあ、その意氣ならば大丈夫ぢやらう。あはゝゝゝゝゝ。」と、袁惠凱も聲高く笑つた。

つい十日程前には、張洪の屋敷で、革命黨の領袖連を暗殺する刺客を鼓舞し、激勵する言辭を吐いた袁惠凱が、今夜は反對に革命黨の領袖も領袖、一番に清皇室派から危險視されて居る宋學

仁に、刺客が出てゐる事を注意をして居る。

「ねえ、皆さん。」と、炕の所から金翠花が、「今夜は妾が作りました二黄の新曲をお聽きに入れませうか。」と、男同志の話の斷切れたのを待ち兼ねた風で言つた。

「翠花の新曲か。」と、袁惠凱は笑ひながら、「今夜は儂は餘りゆつくりはして居られんのぢやから、學仁さんや皆へお聽きに入れたらよからう。」

「さうです、是非聽かして戴きませう。」と、學仁は眞面目切つた面で附け足した。

「あらッ、那麼な立派なのではないのですよ。でも旦那さんがお歸りになつては……」と、張合がなささうに袁惠凱の方を見て「折角久し振りに學仁さんとお遇ひしたのではありませんか。御ゆつくりなすつては如何ですか。お好きな、二十年から經つた古い紹興酒を見つけて、取り寄せてございますから。」

「さうか、其は珍しい味ぢやらう。」と、袁惠凱は「では少し腰を落ちつけて、學仁さんと紹興の古酒を汲まうか。」

「ええ、どうぞ然う遊ばして。」と、翠花は急にいそ〳〵として「鳳蓮々々。」と、次の室へ二聲許り、侍女を呼んだ。

扉口が左右にギーと開いて、若い侍女が、

「何ぞ御召しですか。」

「ああ、あの新しい曲をお客さまにお聽きに入れるから、お前、弦子を持つて來て彈いてお呉れ。それから過日の古い紹興酒ネ、あれを旦那さんにおあげするのだから溫めて、直ぐに仕度をするやうに、お勝手の方へ話して下さい。」

「はい、承りました。」と、鳳蓮はその室を出て暫くすると、次の室で弦子の調子でも合せてでも居るやうに、微妙な細い、太い糸の音が亂れて響いて來た。

「お師匠さん、調子を合して參りました。」と、鳳蓮が再びその室へ現れて、手に弦子を持つて居つた。

「ああ、さう。それから紹興酒のことはお話して下すつて？」

「えゝ、申しておきました。」

「それではお前、この炕の側へ來て腰をお掛け。」

その間、袁惠凱や宋學仁との間にはいろ〳〵の話がそれからそれとはづんで居つた。

弦子の音が、地から漏れ出づるやうに低い聲を立てて、次第に高く、又細く、二黄調の序曲を

奏する前の調べをつづけた。

と此の時である。

室の外に當つて、ばた〳〵と云ふ人の組み合ふ烈しい音が聞えて、袁惠凱の從者の聲。

「だ……誰か來て下さい。」

「それッ。」と許りに、室に居る人々はすつくと立ち上つて、窓の障子をサッと上に開ける。電燈の光はすッと、水の流れる如くに外の暗を明くした。とその庭に上を下へと、取り組み合つて居る二人の男、ばた〳〵〳〵と翠花が家の男や學仁の從者、袁の從者などが皆、その廻りに集つて來て、忍び込んで樣子を伺つて居つた其の男を取り押へて了つた。

「まだ一人居つたのですが、其奴は向ふへ逃げ去りました。」と、從者はせい〳〵云ふ呼吸の下から言つた。

「さうか。」と、二三人が其の跡を追はうとしたのを、室の內から袁惠凱が、

「待て〳〵。追ふには當らぬ。其奴を調べれば分る事ぢや。」と叫んで、「兎に角、其奴を此室へ連れて來い。」

その內に扉口が開いて、嚴重に縛められた、汚い身裝の男が引立てられて來た。

「やッ、此奴は牛周山さんが暗殺された時に私にやつと云ふ程、打つかつた饅頭賣です。」と、室に居つた袁の從者の一人は意外と云ふ顏で、後からむら〳〵と起つた其の當時の怒りを思ひ出して「あの時も什麼も怪しい奴だと考へたのでした。此奴の爲めに暗殺した男の姿を見失つて了つたのです。どうも可怪しいなと感づきましたが、矢張案の狀……」

「ええ全く此の男は。」と、翠花の家の下男が相槌を打つて「可怪しな奴です。もう彼此一週間位前から、家の前を往つたり來たり、饅頭を賣つて居る振をしては、門內の樣子を伺つて居るのです。」

その縛められた男は既に觀念したと見え、床の上に胡座を組んで、ヂッと眼を閉ぢて居つた。何を訊いても一語も發しない。

「今も窓からヂッと內の樣子に耳を立てて居るのです。何所をどう忍び込んだか、全く油斷のならぬ奴ですよ。」と、此の男と組み合つて居つた袁の從者は言つた。

袁惠凱はつか〳〵と、此の男の側へよつて、穴のあく程にその男の面に眼を注いだ。

「うむ。」と、何か心で頷いてから、男を見下しながら、

「儂は袁惠凱だよ。」

「えッ。」と、その男はハッと吃驚した態で、下から袁惠凱を見上げて「おお、あ……貴方は……」

「……」は、袁惠凱は何もかも分つて居るから、口に出すなと、一人で頷いて見せてから、廻りの者に向ひ、

「儂は此の男に少し訊ねたい事があるのぢや。門前に待たしてある儂の馬車まで連れて行つて呉れ。それから此の縛めなどは解いてやつて差支へない。では學仁さん。少し要事が出きたで此でお暇をする。それでは儂のお話をした事をよく黄氏へお話をしてな。」

「はい、此所一月を出ません内に……」と、宋學仁は革命の旗あげをする日を、それとなく眼で知らせた。

× × ×

それから間もなく武昌の革命。

清朝三百年の天下は、僅かの内に覆されて革命の勝利、共和の國家となつて、第一の大總統には袁惠凱が擧げられた。

此所で、始めて怪しい、舞臺に立つた事の少い女優の室の秘密の謎は解けた。

袁惠凱が清皇室の有力なる忠勤の士と思はれて、革命黨との調訂に立つた時には、既に其の前に

革命黨の領袖との間に默契があつた。

金翠花は袁惠凱が愛妾の一人であつたと言ふが、袁の部下たる唐震川總督に旨を含めて、此の女優金翠花の保護をさせた。それとは知らない、總督配下の警察署の連中で、總督が清皇室の手前、表を飾る、革命黨員捕縛の嚴命を眞に受けて、一生懸命に奔走して糞骨を折る馬鹿を見た譯だ。

袁惠凱が清皇室に寢返りを打つた、意外なる秘密を藏する怪女優の室、革命の大芝居は一可憐なる女に依つて仕組まれて居つたのである。

金翠花は其の後、袁が洪憲皇帝の夢を實現をした時、後宮に擁する二十何人かの愛妾の内に面影の似た女が居たとも謂はれて居る。

切腹の元祖

汚れた出世

切腹と云ふと、大和魂と共に武士道につきもののやうに、日本の名物になつてしまつて居るが

今から三千年餘りの昔時、支那にはあつたのだ。

この頃の支那人に、切腹などのことを話して見た所が、吃驚して眼をみはる位が落で、自殺の方法としては首つりに身なげ、阿片かモヒで死ぬより外には方法は無い、と考へて居て、餘程、膽ツ玉の据つた豪傑、韓奇のやうな男で、義理のために自ら劍で喉を突いたのが、素晴しい死に方として傳へられて居る位であるから、他は推して知る可し、死後のことはどうあらうと、恥を曝さうが、見惡い姿を殘さうが、同じ死ぬならなる可く痛くないやう、苦みが少いやうにしやうと云ふ女々しい所から出發して居る。

ところが昔の支那人はさうでなかつた。

國のため、君のために一命をなげ捨てるのを、鴻毛よりも輕く考へて居つたのであるが、思想の惡化、餘りに文弱に流れて行つた結果は、だん〳〵と今日の支那のやうな衰態を招くに至つたのである。

國の亡ぶるのも、國の興るのも一朝一夕のことではない。その原因は遠い〳〵所に發するのだ。

昔、殷の紂王は八百餘國、大小諸侯を征服して、その威武天下にかく〳〵として輝いて居つ

た。

彼は九五の位を踐む天子に似氣なく、飽くまで大力無雙で、一擊ちに猛虎をさへ打ち倒し、九牛を曳き倒して了ふと云はれるほどな豪快の男子であつたのだが、天下におのれより上の者はなく、思ふこととして成らざるなしと云ふ境遇に居ると、自然と奢華に流れ、色を貪るより外に道はなかつた。

「陛下！」と、紂王の前へ出て、先刻から頻りに御氣嫌をとり結んで居つた南伯侯梟侯虎、急に意味ありげな眼をあげて「陛下はまだ冀州侯の手元へ引き取られ、養はれて居る美人の噂はお聞き及びではございませんか。」

「いや、その事は始めてぢやが、して女は何れの者だ？」

「さらば、冀州は元來美人の產地とは聞いて居りましたが、某の見た所で、今まであれ程に綺麗な女は始めてでございます。月宮殿の嫦娥の再來などと噂するも無理ならぬ儀で、本當に傾城傾國の美人とは、あの女の如きを云ふのでありませうか。さても冀州侯蘇護は幸福な身の上と、陰ながら羨ましく存じて居ります。」と、火に油を瀧ぐと同じ調子で、紂王の心をつき動かさうとして、あらゆる言葉で、蘇護の膝下に居る女について、わざと讃美の聲を惜しまなかつた。と云ふ

のはその實、彼は蘇護と仲が惡いので、彼が寵愛する女を奪ひ取ると共に、紂王にうまく取り入らうと考へたのである。

昔から今日まで、主君に女を取持たうなんとして、立身出世をする奴に碌な人間は居らぬに定つて居るが、崇侯虎もその一人である。

「ふむ、それ程、美しい女が居つたのか。しかし冀州の手元に居らうとは、全く意外なことちや。」彼の心がそろ〳〵と、その方へひき寄せられて來た。

「占めたツ。」とは、南伯侯が胸の內で……。表面は何處までも冷い色に微笑を浮べ「陛下が後宮に百千の嬪御夫人を集め、その女と艶を競ふても、恐らく及ぶことではなからうと思ひます。全く人の世のものとは考へられぬ美しさ。」

「崇侯虎！」と、紂王は言葉をさへ切つて「どうぢや？　その女を朕が後宮に入れる事は出來まいか?!」

「はツ、恐れ多い儀にございます。」と、うや〳〵しく跪づいた彼は、奸惡の徒の常として、辯舌はいかにも爽かに惡丁寧、わざとらしく業々しい拜を繰返して「天下は陛下のものにござります。八百餘國の何物でも、陛下のお心のままに遊ばしても、誰一人として異存を申さうやうもありません。まして一女性の如き、しかも冀州侯の膝下に居る女など、入朝の御旨命を傳へましたならば、喜んで後宮へ差し出だすでありませう。」

「さうであらう。」と、紂王は滿足したらしい笑を滿面に「直ぐと蘇護に使者を立てて、朕の旨を傳へしめよ。」

「はい。」と、うまく思ふ壺に這入つたのを悅んだ南伯侯崇侯虎。かうして支那古今を通じての妖妃、妲己は殿の後宮へと迎へられることになつた。

國の亂れ

「陛下！」

と、紂王の前に跪づいて居る老臣、熱のある聲で涙さへ浮べて、何事をか思ひ決する風で「暫くお人拂ひを願はしう存じます。」

「何か？　竊に話したい儀があると申すのか。妲己は朕が身と同體ぢや。何も遠慮する所はない、思ふ通り話してみよ。」

「いや、その妃殿下のお身につきまして……」と、王の側に控えて居る妲己の方へチラと視線を

移し、眼を伏せた。

瑤星殿の酒宴酣に、老臣の來たのさへ、少し氣に喰はなく思つて居る紂王、醉に怒も手傳つたとみえ、聲荒く、

「王嚴之！　その方は朕が興をさまたげに參つたのか？」

「いえ、全く以て！」と、右手で狼狽てて打ち消し「一大事があつて、陛下のお耳を汚したく參じました。」

「それが妲己に關する何事をか、忠義顏して朕へ諫立てしやうとするのか？」聲は一層に鋭く嗾鳴ると同じだ。

「されば！」と、老臣、王嚴之は先刻より熱誠溢れた面、キツと紂王を仰ぎながら「お興半に、某の參ることは、屹度お怒りを購ふことと覺悟は致して居りましたが、殷の國家の興亡にも係はりますこと、一偏に妃殿下の暫時御退座を煩はし、曲げて陛下お一人の御清聽を願はしう存じます。」

「ならぬ、そのやうな儀は聞くことならぬぞ。」破裂した憤怒の餘聲を浴びせるやうに「先刻、人を遠ざけてくれとの賴み、外ならぬ老臣の事ぢやから其の方の申す通り、嬪御から侍女まで一人

殘らずに退座致させたではないか。然るに尙も酒上にも朕が身と同じである妲己を除けよと申す。憎い奴ぢや。これが王嚴之でなければ、一刀の下に斬り捨てて呉れべき奴であるが、今日の所は許して取らする。匆々に退出致せ！　これからもある事ぢやが、妲己は朕と同じに思ひ、今の如き無禮を申さぬやう心せよ。」

女に心を奪はれて了ふと、幾ら猛虎を打ち殺した豪傑でも凡夫に劣ること、云ふまでもない。まして凡夫が女に現を拔かしたならば人間として風上にも置けぬわけである。

紂王は、不氣嫌な面を和げて、側の妲己に向ひ、

「面白くないことを耳にしたであらうが、譯の分らぬ老臣どものことぢや、氣にせぬがよいぞよ。」

「いえ〳〵。」と、妲己はわざと悄れ返つて、言葉を落し、「幾人も、妾のことで、陛下へお諫め申しあげますが、其言葉は皆一つでございます。妾一人が陛下のお側へ仕へて居りますと、殷の國が今にも亡びるやうなこと許り申されます。それもこれも皆、妾の到らぬ爲めと、餘りに御寵愛を頂きます爲めに、外の嬪御たちの嫉みから出るのでございます。妾一人さへお側に居りませねば、こんな情ない言葉をお耳に入れる方もございませぬ筈、どうぞ妾を蘇護の下へお戻し下さい

まし、そして妾は昔と同じ郷里の山河を相手に、陛下の御寵愛を思ひ出とし、淋しく活したうございます。」

愛する女からこんな憐れつぽい話を切り出されると、大抵の男は意地になつて、逆上せ返るものである。

妲己は紂王の心を掴んで、づる〳〵と深味へと彼を引きずり込んで行くのだ。

「妲己！　そちはなぜそんな事を申すのぢや。」感傷的な聲を出して、眼尻に皺を寄せながら「百の老臣、千の嬪御にも換へ難い其方の身である。朕が遇ふてからまだ半年の月日は過して居らぬが、そちと瑤臺に山誓海盟のちぎり、よもや忘れては居るまい。殷の國家がどうならうと、朕の國家はそちの國家ぢや。朕の天下はそちの天下も同じであるぞ。」

「そのお言葉だけで、餘りな勿體なさ。お嬉しう存じます。」とばかり、紂王の膝へ面を伏せて、よよと泣き入つた。

「これ、妲己！　もうよいではないか！　これ位なことでそのやうに泣くことがあらうか！」

天下に王たる方の言葉であらうか？　その一句の內、國の亂れは見えて居つた。この時、紂王は女の靴の紐を結ぶことも辭さなかつたであらうと思はれる。

切腹の始め

王嚴之は今まで、チツと身動きもしないで、紂王と妲己の話を聞いて居つたが、ハラ〳〵と床へ落涙して「陛下！　もう何と申しあげやうもございませぬ。天魔か！　怪異か！　陛下に魅入る一匹婦にそのお言葉、嚴之もこの先、生きる力もなくなりました。陛下！　某が死を覺悟して申し殘すこと、どうぞ一通りお聞きを願ひたうございます。」

「無……無禮者！　妲己を匹婦と申したな。」

「いかにも、申しあげました。」嚴之は泰然自若、王を仰いだ。

「退れ！　その方には追て沙汰致すが、再び出仕するな。」

「はツ、お目通り適はぬことも、御不興を蒙りますことも、豫じめ覺悟して出仕いたしました某、陛下！　日夜酒色に溺れさせられ、政事をみそなはせられざる爲め、臺閣には奸臣朝綱を亂して、社稷の亡びる日、目前に迫つて居ります。象箸を作り、犀玉の杯を得たならば、その國の衰への原因であると申しますに、陛下は恐れげもなく、天竺から象牙の箸を取りよせ、犀角の杯を得られました。しかも萬民の苦役を考へずして、長い七年の間、美玉を飾る瓊臺御殿を作

らうとして、その工事を起しなさりますさうな。高さ千丈の摘星樓、三里に渡る大宮殿百軒、小宮殿七十三軒、九市を設けて、奢侈を極めやうとの計畫は、話をきくだに、本當に情ないことと存じます、どうぞそのやうに萬民の力を無駄に費す、空しい工事は思ひ止りを願はしうございます。」

「默れ！　先刻より重なる無禮雜言。朕が壯擧の血祭りにあげてくれる。」怒に燃えた眼を睨み据ゑながら、スックと立ち上つた。

佩刀の束を掴んで、づか〳〵と王嚴之の側に近より、默然と眼を閉ぢ、俯首れて觀念して居るらしい彼を見下しながら、キラリと鞘を拂ひ、サッと秋水、空に流れると見る間に「うむ」と云ふ苦悶の後、嚴之の身は前へバッタリと、首は落された。

「陛下！」妲己は妖艶な眼元に媚をみせて、ニッコリと笑んだ。

「其方のことを兎や角と申す奴は、皆この通りぢや。」激しい呼吸づかひの下から、殘忍な瞳を光らして血の滴る刄をバッタリと床へなげ捨てた。

「陛下！　清華宮へお伴いたすでございませう。」と、不快な印象の跡が殘る此所から、次の酒宴の席へと誘つた。

「おう！　そちと新しい愉悅にしたるため、汲めども盡きぬ芳醇な醉を得やうぞ。」

紂王はよろ〳〵と魂の拔けた人のやう、妲己に寄りかかりながら歩いて行つた。

「陛下！」と、紂王の前に立ち塞がるやうにして跪づいた少師比干、ぴたりと劍を前に置いて「陛下！　國のため、この劍を以て、妃殿下を御成敗願はしう存じまする。」

臆する色なく、妲己が曲事、順々と述べ立てた。

「何ッ？　妲己を殺せ？　うむ。」と、紂王は憤怒に身を顫はせながら劍を床に叩きつけ「お前は世間で聖人と云つて居る。聖人の心には七竅、七つの穴があるさうぢや。肚を割いて見せてくれ。もし七つの穴があつたなら、いかにも妲己は朕の手にかけやうぞ。」

比干は、この難題、色も變へないで、從容として劍を握り、

「お仰せまでもござらぬ。無道な王を戴いて、生を共にするは願はぬところだ。」

見事に割腹、紂王めがけて腸を叩きつけ、

「いざ……いざ御覽下されたい。」大地へがばっと打伏して死んで行つた。

これが切腹の始めだと云はれて居る。

苦肉の計

北原の戦

支那の孔明、日本の楠と云つたならば、小供でさへ知つて居らうと云ふ一代の智恵者、唐と大和で双び稱される名軍師である。

その諸葛孔明が臥龍崗と云ふ田舎に隠れ棲んでゐる時、先帝が三度もむさぐるしい彼の茅屋に龍駕を枉げ、是非とも下山して任官してくれと頼んだ殊遇を思ふと、殘された幼帝と詔勅のことは片時でも忘れなかつた。

先帝は、自分のやうな者を、あれ程までに頼りになされ、漢家の國事一切をあげて任して逝かれたのである。

あれを思ひ、これを偲び、孔明は年老いて病みがちな今の身の細り行くのをさへ忘れ、ひたすらに國のため、君のために心を千々に碎いて居つた。

丁度、その時は孔明の仕へる漢國に逆いた司馬懿と戰爭最中で、日夜更に敵を亡す計略を廻す

に苦しんだ。

北原の大戰、兩軍が雌雄を決する關ケ原である大衝突も目捷の間に迫つて、山を蔽ひ、丘をかくす旗指物のはためき、陽光に輝く劍戟の林のゆらめくのさへ、山雨まさに到らんとして風樓に充つと云ふさま、戰機の熟して居るのが、それと感じられたのである。

孔明が陣中で一人、帷幕の隙間から吹き込む初秋の風のさわやかさを胸に覺えながら、チツと眼を閉ぢ、何事をか深く考へ沈んで居る時であつた。

「申し上げます。」と、帷幕の外、跪いた一人の兵士が重ねて、

「唯今、敵方である司馬營中から一人の將軍が投降してまゐりました。」

「何ッ？　司馬營中から將軍が降服して參つたと云ふか?!」

いかいかと兩眼を見開いて、動ぜぬ態で、

「して名は何と申すのぢや。」

「はい、鄭文と申して居ります。」

「鄭文?!」と、孔明は鸚鵡返しに意外さう、暫く打ち案ずる風であつたが、キツとした調子で、

「各將軍を進帳させ！　急いでこれへ參るやうに申し傳へてくれ。」

「はッ。」と、兵士は急ぎ足に引き返して行つた。

漢軍で名ある將軍たちは、急のお召しは何事であらうかと、西から東から丞相孔明の陣中さして、一人二人づつ何時か集つて來た。

「丞相！　某たちを喚ばれし軍議は……！」

「外でもない。」と、孔明はそこへ集つた一同を見廻しながら、「實は唯今、司馬營中から鄭文と申す一將軍が投降して參つたのぢや。」

「何ッ？　鄭文と申さるるか？」と、一人の將軍は詰問でもするやうに、丞相を見つめた。

「いかにも！」

「さては噂に聞き及ぶが、此度新に敵方たる司馬營中へ召し抱へられた武藝すぐれし鄭將軍のことであらうよ。しかしとんと合點がまゐらぬのは、今更わが軍へ投降して參る事だ。」

孔明は、不審さうに呟語く將軍を見やりながら、何事をもすつかりと裏まで見ぬく鋭い一瞥をチラリ、帷幕の外へなげて、輕く首肯いては微笑を漏して居る。

「丞相！　如何お取計ひなさいますか？」

「わが軍へ投降して參つた鄭文將軍、屹度異心ある者と存じまする。御所置伺ひたうございます。」

中には、チリ〳〵と丞相へ詰めよる將軍も居つた。

「誰かある？　降將鄭文をここへ喚んでまゐれ。」

呆氣に取られる各將軍の言葉など、耳にも借さず、何か思ひ決する所がある風で、幕外へ嚴とした命令を傳へた。

間もなく、軍議の堂に昇る太鼓の音はどう〳〵と、漢陣營の内外、晴れた初秋の大氣を振はして鳴り響いた。

孔明丞相を首座に、左右に佇立して居流れる各將軍の前、一人の兵士に導かれた降將鄭文はいかにも戰々兢々の態を裝ひ、頭を低く垂れ、俯きがちにしづ〳〵と、その席へと連れてこられた。

案前から遙か離れて、うや〳〵しく跪いた彼の姿へ、一齊に鋭い視線の矢が射かけられた。

愁ひに鎖された眉、涙にぬれた面、見るさへ憐れなほどに悄れ返つて居るのだ。

孔明は穴のあくほどに茂々と、彼の態を凝視したが、

「どうした譯で、その方は司馬に背き、わが漢軍に降つたのぢや。何と云ふ苗字、何れの者であ

るか？」

「丞相！」と、その時、面をあげた鄭文は耐りかねた風で唯一語、涙に光る眼を据えて、腕の苦悶を訴へるに言葉ないさまである。

「その理由、聞かう！」と、再び促された。

「某は山西の太角山下に住居する鄭文と申する者、先つ頃、司馬懿が陣軍に參り、彼が漢國に逆つた不徳を責め、切りに降服を勸めましたが、反つて某を逆怨み、一命を失はんとさへ致すのでございます。もう恁うなつては致し方がございません。道を以て說いても非道を以て仇するわけで、憎いは司馬懿が振舞、竊に彼が營をぬけ出し、かくは漢軍に投降するに至りました。」

眞實を面に見せて、一心に說き立てた。

「うむ、司馬懿は豫てから才の高い、志の大なる、敵ながら天晴な者と聞き及んでゐるが、そんな差誤を致すかな。」

孔明はさう云ひながら、鄭文の肚の底まで讀むやうにチッと見つめた。ハッとして眼を反した彼は、亂れかけた顏色を察知られじとつくらうてる樣子で、無理から押しつぶす聲。

「なか〳〵に、左樣な立派な大將ではございませぬ。」

「さうか?! その方がそれ程に見限るやうでは、噂が事實でないと見える。よい、その方は幼主に奏聞し、追つて沙汰致すであらうぞ。」

その時、一兵士が走つて來て、

「申し上げます。敵方たる司馬營中から自ら奏朗と名乘りを上げて唯今ただ一騎にて營中めがけて切り入つてまゐりました。」

「この大軍の內へ、奏朗と申す男がただ一騎で討ち入つて參るとは、近頃異な事ぢや。」

孔明は口にこそ、かう云ふが全くは手に取るやう、敵將司馬懿が苦肉の計を見て取つて居つたが、各將軍と同じに、異なことのやうな顏付をして、

「鄭文將軍！ 今も聞かるる通り、敵營から參りし奏朗と申す者、定めし存じて居らうな。」

「はい、奏朗と申せば、敵方でも名ある勇士、一方の旗頭にございます。」

「その者がまた何で、ただ一騎で漢軍へ切り入つて參つたのぢや。異な事が重なる日であるな。」

「しかし敵將が一騎打ちを希んで、漢營へ參つたとすれば、武士の道、誰か相手となる將軍を差し向け、勝負を爭はねばなるまい。」と、將軍の一人は最もらしい口を切つた。

「いかにも！」と、降將鄭文はわが意を得たと云はぬ許り、

「丞相！　この相手、某をお遣はし下されまいか？」と、切なる心を籠めて申し出でた。

「何ッ？　その方が奏朗と一騎打の勝負を希むと申すのか。あの先刻まで味方であつた敵方の勇士と……？」

孔明は態とらしく大袈裟に訊ねかけた。

「はい、某は漢草に降つてもまだ寸功もございませぬ。丁度よい折柄、是非とも奏朗を生擒の手功を立て、始めて丞相へ御見參の功勳ともし、手土産とも致したう存じます。」

「成程！　その方はよい思ひつきを廻したものぢや。」

孔明は意味ありげにニヤリと笑んだ。

苦肉の計

「やア、そこへ參りしは奏朗であるな。豫ての懇意、冥途の土産に引導渡してくれるから覺悟を致せ！　某は司馬懿が不德を憎み、孔明丞相の下、漢軍へつきし鄭文なるぞ。山西太角山下の住人、幼名を鄭四郎、字名を英傑、號を三山と申すは某のことである。さア尋常な勝負を致せ。」

孔明から一騎打ちの許しを得た降將鄭文は、陣頭にただ一騎たう〳〵と馬を乘り進め、あぶみ

の上に突立ちあがり、漢軍營に聞えるやうに割鐘聲を振絞り、大音に名乘りをあげた。

「うむ、よくこそ見參！　主人に双をひく不忠不義な臆病武士、鄭文を相手とは片腹痛いが、門出の血祭り、先づおのれから斬り捨ててくれるわ。某は山東の住人、いかにも奏朗に相違ない。幼名を奏七郎、字名を敬國、號を飛龍と申す者だ。さア、おのれから切つてまゐれ。」

奏朗も型のやうな名乘りを揚げると、右手に掴む手綱をぐつと締めて、パッ〳〵と低く蹄であげる砂煙り、双方からヂリ〳〵と馬を寄せ進めた。

ここで鳥渡お話をして置くが、今も兩人が名乘りを揚げた文句のやうにある通り、支那人は昔から今日まで、一人で幾つもの名を持つて居るのが普通である。

姓を劉、名を漢英、號を三傑、字名が士堂、幼名は劉三郎などと云ふ男の御稼業はと云ふと大道の饅頭賣り。

冗しごとは、さて置き、鄭文と奏朗は双方からぢり〳〵と寄り進んだが、手綱を左手に持ち變へた兩人、双尖の太い長刀を振り冠つて、さつと斬り下す一閃二閃、空に火花が散つては陽光の下、電光が流れる。

馬首を寄せ合ひ、斬り結んではパッと離れる。馬上の勇士と勇士とが必死の劍闘既に十數合を

斬り結んで居るが、まだ何れとも勝負は見えなかつた。

遠く離れた所からは、漢軍の兵士たちが十重二十重に群つてこのさまを眺めて居る。

「さア、鄭文どの、鄭將軍どの！　某の頭を刎ねられえ！」

低いが、力の籠つた聲で、奏朗が囁いた。

鄭文は聞えぬさまで、太刀を振冠つたまま、いかにも物凄い形相で睨み据えて居るのだ。

「愚圖々々致して居つて、邪魔が這入つては、折角の苦心も水の泡ぢや。さアどうぞ某の素首、その一打ちで打ち落して下され！」

奏朗も太刀を振冠りながら、油斷ないさまを見せて、再びヂリ〳〵と馬首を寄せ合ひ、賴むやうに低い聲を漏した。

「御免！」

鄭文が聲も口の内、眞向から振り下す太刀、あツと云ふ裂帛の悲鳴と共に、奏朗の肩尖から乳へかけて深く斬り下げられ、紅に染んで黄砂の上へどつと落馬した。

ひらりと鞍から飛びおりた鄭文は、電光の素迅さで、奏朗の頭をただ一打ちに叩き落した。

頭髪を掴んで、たつた今、自分が打ち落したその首を手にした鄭文は蒼白な面でヂツと見つめ

て居る。

「無念だらう、殘念であらうな。許せよ。」

彼は泣くまいとしても、何時か熱い涙が眼から溢れて、ハラ〳〵と頰を流れ落した。

低い、祈念する聲で、鄭文は、

「主君の爲めとは云へ、あたら一命を黄砂に染めてしまつた。賊と罵り、不忠不義と嘲つたその方の心根を思ふと、某が腸は斷ち切られるより辛い。長の年月、某のやうな不德な者を主人として、まめ〳〵しく仕へて呉れたその方の志、決して疎略に思つては居らぬ。それ許りか、此度はそちの生命まで投げ出して、某の出世のため、君主のためを計つてくれた。某は……某は……」

鄭文は、肚の内で繰返す言葉にさへ、むせ返る涙が胸にこみあげて、手に掴む奏朗の首が霞んで見えなかつた。

「許せよ。無情な主人と怨んでくれるな。屹度々々孔明丞相を欺き、その方が志は決して空しうは致さぬぞ。」

こんなことを察知られては一大事と、鄭文は思ひ直すと、涙を收め、何氣ない風で馬上、意氣

揚々と孔明の陣屋へと戻つて行つた。そしてその首級を彼の前、一伍一什を詳しく物語つたのである。

孔明は暫く、奏朗の首級と、鄭文の面とを見合して居つたが、意味ありげな言葉で、

「この度の戰ひには將軍が一番槍をつけたわけぢや。しかし司馬營中には幾人の奏朗が居るのぢや？」

「えッ、何とお仰せられます？」ぎよつとした思ひで、訊き返した。

「いや、奏朗と申す勇士は幾人、居るかと云ふのぢや。」

「二人とは居りませぬ。」

「さうではあるまい。」と、孔明はキツとした調子で「鄭將軍！ 何でその方は獨り苦しむのぢや。某は原來から臥龍崗の道家、陰陽の術によつて八卦を算し、このやうに漢國を保扶して參つた。今、その方が面を見るに、眉間の曇り、眼底の濁り、某に異心をさし挾むことは火を見るより明かである。このやうに奏朗を斬つたのも徒勞とならうぞ。何もかも隱さずに打ち開けたら什麼ぢや。諸葛亮（孔明）は人馬を動し、兵を用ふるに、このやうな詐り降るやうな、卑劣な計略を以て敵方を瞞着はせぬぞ。」

「そのやうに仰せなれど、首級は奏朗に相違ございませぬ。なほよく仔細をお調べ下されたい。」

「まだ飽くまでも云ひ張らうと致すのか？ 最早遁れぬ所ぢや。司馬懿のやうな小人物を捨てて心から漢國に歸順したらよい。眞實なことを申したならば、某も幼主へ奏し、更に功を加へるやうに取計らつて得させるが、再び口から出任せな亂詐を云ふに於ては、猶豫なく直ぐに將軍の素首を叩き落す許りぢや。某は決して誇るわけでないが、一度人馬を興し、戰場に臨めば、敵方の狀勢は手に取るやう、まるで明鏡に映ると同じに心に映じ來たるのぢや。まして司馬懿如き男の廻す詐降計、某に見破られいで何とせうぞ。虎口にあるのを知りながら、その方はなほも牙を拔かうと致すのかな。」

孔明の一句は一句、鄭文の肺腑をえぐるやうに力强く、云つてのけた。

彼はその間、唇を嚙んでヂツと俯むいたままであつたが、何やら心に決したと見え、急に改まつた調子、今までと打つて變り、言葉さへ元氣なく、

「恐れ入りました。さすがは聞えた漢國の丞相孔明どのと、某の心から司馬懿將軍の肚の內まで見ぬかれた御明察、ただ〳〵恐れ入つてございます。」

鄭文は眞から敬服して居る態度で、跪拜を繰返した。

「いかにも。」と、彼は更に語を繼いで「先刻丞相の下、漢國へ投降して參りました奏朗、某が彼を斬り捨てたのも全て僞りでございました。小さな計を廻して、丞相を欺かうと致しましたことは、今更に申し譯がございませぬ。」

さう云ふ鄭文の面、ハラ〳〵と止め度なく涙が流れ落ちる。無駄に犬死させた、彼の臣のことを痛んでのことであらうか？　それとても目さす丞相、孔明を前にしながら、これまで計つた企劃も水泡となり、双一つ加へられぬ殘念さを漏すに由ない口惜し涙であらうか？　孔明はその ことをよく看て取つて居つたのだ。

「針のやうな小才を以て、刀のやうな大智に齒向はんと致した某の罪を何卒お許し下されたい。」

鄭文は、すべての誠心を投げ出して、大地へ平伏した。

「鄭將軍！　さツ、その手をあげられえ。既に何もかも眞實をお話し下された上からは、今迄に某を欺く罪は萬死に當るなれど、前非を悔いての唯今の物語り。これからは心を入れ替へ幼帝へお任へ下さるであらう心根に免じ、すべて許し遣すであらう。何れ都へ引きあげの上、重ねて恩賞のことは取計つて得さするが、それに就て、この度わざ〳〵と將軍をわが陣營へ寄越し、詐り降る計を授け、剩さへ某の信を深うせんために奏朗とやら申す男の一命までも捨てさせたことなか〳〵淺い計略あつてとは思はれぬ。何れは司馬懿のことぢや、思慮を廻らしてのことであらうが、どのやうな謀事であつたか。之も眞直ぐに僞らずに話して貰ひたいものぢや。」

ギクリと胸に釘打たる思ひを押し隱した鄭文は、

「その事でございまするか？　それならば……！」

「それならば……？」と、孔明は片唾を呑んだ。

「實は苦肉の計でございました。何を今更にお隱し申しませう！　實は今宵二更時を計り、某が丞相の軍中に在つて、手引を仕り、司馬全營は大擧して、漢軍營へ夜襲を仕掛け、一氣に打ち破る手筈を定めて居りました。」

「うむ、さうであらう！　さうなくては適はぬ仕儀ぢや。然らば鄭將軍！　一封の密書を認めくれぬか。漢營を襲ふ時刻は今宵三更時にすべしとな。」

「して、そ……その敵方たる司馬營中へは、何人を……誰をお遣しになりますぞ。」

キツとなつて、氣色を變へた鄭文。孔明の面を睨みすえたがヂリ〳〵と詰め寄つた。

「誰を？」と、さも意外さうに空惚けた聲を落し「誰も彼もない舌ぢや。將軍を差し遣すのぢや。」

「えッ、某……某をあのお遣し下されますか？」

鄭文は肚の内で、孔明がおのれを信服せしめやう爲めの大雅量を示し、司馬營中へ使者に出すの愚さを笑つた居つたが、云はれるままに一封の密書を書き終へた。

「來れ！」

嚴とした調子で、孔明は帷幕の外へ向ひ、突如に叫んだ。

「はッ。」と云ふ大勢の聲と一緒に、バラ〳〵とそこへ現れた數十の兵士、武裝姿もいかめしく、思ひ〳〵に槍や刀を閃して、鄭將軍の廻りをおつとり圍んだ。

「何……何を致す？」

ハッとした鄭文の隙を伺ひ、右から左から打つてかかり、不意のこととて、さすがの將軍も高手小手に縛められてしまつた。

計る〳〵と考へて反つて孔明に計られた殘念さ。憤怒の面眼尻も裂けん許り、嚙みしめた唇頭に血がにじみ、

「さ……さては諸葛亮、汝は某を欺きしよな。」

「いかにも！　苦肉な計に報ゐた許りぢや。司馬懿を捕へた上で、何れその方は放し呉れるわ。

ハハハハハ。」

と、孔明はさも愉快さうに哄然と大笑した。

馬謖を斬る

「馬將軍！　死んで呉れるか？　勝敗は時の運、街亭に破れたのはいかにも將軍が不運ぢやが、今更繰返したとて仕方がない。朝に夕に國事を論じ、漢家のため、幼主の御爲めに忠義を契つた身を。その將軍を手にかけて殺さねばならぬとは、孔明が一生を通じて、情ないことぢや。」

孔明は、敗軍の將、馬謖の悄然と首垂れた姿を見遣りながら、巴々と流れ落つる涙さへ拭ぐい得なかつた。

「もう何事も云ふて下さるな。軍律は曲げられぬ。某の一命の如き、さんとして輝く漢國不朽の軍律の犧牲となる事を得ましたならば、敗れて反つて餘光ある次第でございます。さア直ぐと法場へお引き下され。御處刑を願はしう存じます。」

死を覺悟した馬謖は、すべてを觀念して男らしく、落ちついた態度で云つてのけた。

「皆の將軍たちを呼べ！」と、孔明は從卒を顧みた。

間もなく刑場の露と消える馬謖を主として、そこには幕下の諸將軍との間に別れの淋しい宴が催された。

杯は孔明から順に各將軍へ、酒か涙か云ひ合さねど、武士の義理の切なさに滾々と咽ぶ老將軍なども居つた。午時の太鼓はとう〳〵と鳴り響いた。

「法場の用意萬端整ひました。」と、一小校がその席へ、刑の執行準備の出來たことを知らせて來た。

「さらば、これで……」と、馬謖はよう〳〵と立ち上つた。

「さらばぢや。」と、孔明は沈んだ聲で別れの言葉を吐いた。

一座は寂として、水を打つた如く肅然として居る。

刑場へしほ〳〵と引かれ行く馬謖の後姿を見送りながら「馬將軍！　將軍は死んでも名は屹度四海に揚らうよ。」

孔明の浴びせかける聲が凛として響いた。將軍たちの面には止め度なく涙が流れ落ちる。

乾隆帝の廓ぞめき

道樂者が師匠

「おい、甘鳳池、今度は蘇杭方面へ忍びの旅をいたさうではないか。」と、或る日のこと、乾隆皇帝は、御機嫌伺ひに上殿した甘鳳池將軍を見ると、恁う聲をかけた。

金は思ふままに使へるし、年は若し、加之に天下に俺より上の豪いものがないと云ふ清朝の天子、以前に一度、餘りよくない侍從からそそのかされて、忍びの旅に出た面白さと、自由さと、呑氣な味が到底忘れられない。

宮中に居れば、爲すこと、聞くことが型に入つて居る窮屈な、固くるしい事許りだ。そこへ行くと、旅は氣樂である。

甘將軍が、もぢ〳〵として、贊成とも不贊成とも云ひかねて、皇帝の前に遙下つて跪づきながら、見上げる面を、愉快さうにニコ〳〵と見詰めて、

「什麼ぢや？　此度は其の方へ供を命ずるぞ。否も應もない。朕が命令と思へ！」

「はッ。」と、將軍は更に平伏して「恐れながら申しあげます。一天萬乘の君ともあらう方が、左

様に輕々しく、卑しき町人同様に單身にての御旅をなされる事。苦々しき儀と存じあげます。殊に政機をみそなわせられずして、何の必要があつて、蘇杭などの土地へ御旅をなされまする？」

頑固は通り者の上に、七難しい昔氣質の老人。孔孟の教で固められた頭腦は子曰くが、一杯に積つてゐやうと云ふ位に堅人だ。その上に、武藝は當代並ぶ者が少いと云ふ程で、長槍ごされ單刀ごされ、双刀から棍棒までも自由自在に使ふ妙手である。そして孫子の兵法は、米の飯より好きで、孫法通としても、一代の軍學者である。

こんな風に甘將軍は、文武兩道に通じて居る豪い人だが、民間の事情や粹事に就ては、一向に眞闇である。

「いや、さう固苦しい事を申すな。」と、苦蟲を嚙みつぶしたやうな、將軍の面を見て、相變らず微笑みながら、

「世の中の事は、なか〳〵お前のやうに忠義一圖でも通らぬものだ。少しは民間の事情にも通じなくつてはならない。それにはコツソリと身を町人に變裝をし、地方官の施政の狀況や事情を自ら調べて歩くに限る。宮殿の奥深く閉ぢ籠つて居つては、本當の政治を行ふことは出きない。どんな卑しい百姓のことまでも、すつかりと心得て居らないでは、全く同情のある政治を行ひ、

天下の人心を心服させる事が出きないのだ。朕は本當に民百姓を安んじ、治世を謳歌する實際政治を行ひたいと思ふのである。」

乾隆帝はうまい事を云つたものだ。人によつて法を說け。甘將軍を自分の用心棒に引つ張り出さうとするには、こんなやうに浮れ旅に重大な意味をもたせて、說き始めた。

「成程、陛下にそのやうな深い思召しがあらうとは、某不敏、少しも存じませんでした。尊い九五の御身を卑しい町人に姿を變へてまで、地方行政や民間の事情をお調べになり、正しい政治を行はせられやうとなされるとは、當代の幸福。陛下の御心を推し、某、涙の出る位に心嬉しく存じあげます。」と、本當に涙をほろ〳〵と流して、喜んで居る。

武骨者の正直さ。乾隆帝も今では、聊か豪さうに言つて見た藥が利き過ぎたので、煙つたい氣持だが、さあらぬ態で、

「さう云ふ譯であるから、朕が供として、其の方一人が來て貰ひたい。餘の者は忍びの旅には、反つて憚げになる。」

「はッ。お仰せまでも御座いません。陛下の御心に添ひ奉ることならば、粉骨碎心してお供をいたしまする、某一人まゐりますれば、道中の妖賊ども、如何に出沒をいたさうとも、屹度擊ち退

けて御覽に入れまする。」

「おゝ。その勇氣。その方の勝れたる武藝が、萬人の家臣を連れまゐるよりも心丈夫なのだ。」

と、うまく煽てあげる。

「有り難き御諚。某が陛下のお供を仕ることは老の榮譽と、深く御禮を申しあげます。」

彼はすつかりと悅んで了つた。

「それで甘鳳池。」と、帝は言葉を改めてから「早速ながら明後日、早朝に出發を致さうと思ふが一先づ其の方の邸へ、朕がまゐり、そこから町人に變裝をして旅立つことにいたさう。だが町人に直ぐと、朕が身變りすることも困難であるし、その方とても、馴れぬ町人言葉はよう使へまい。そこはお互ひに便宜を思ひ、朕は讀書人、つまり京都の試驗に及第をして居らない秀才程度の學生に變裝をし、その方は年配が年配だから、朕を指導し、教授して呉れる家庭教師格な僧侶に身を變へてまゐらうではないか。」

「え……某が坊主になるのでございるか。」と、甘將軍はいかに何でも餘りに困ると云ふ色を面に見せて、不服さうに云つた。

「僧侶が適當だ、僧侶になれ、朕が命令と思へば異存はあるまい。」

「はッ。」と、仕方がないので、渋々と承諾をしたのである。

「それから其の方の外に、もう一人、供を召しつれてまゐるから、左樣心得て居れ。」

「して其は何人でございますか。」

「町人だ、一定の職はないが、大變に遊廓の事情には詳しい町人なのである。」

「恐れながら申しあげます。」と、甘將軍はまた恐れながらを云ひ出したので、帝は鳥渡眉間に皺を寄せて、

「何か？」不興氣に訊ねた。

「卑しい町人風情を、陛下のお側近く召しつれるのは甚だ宜しからざる儀と存じあげます。殊に一定の職のない浮浪の徒などを……」と、頗る頑强に不滿を述べた。

「さア、それが不可ぬ。餘りに朕と區別して、忍びの旅に出たとて、それでは何の役にも立たぬのである。それよりは、今も申す通り、そのやうな浮浪の徒を案内として、先から先と、民情を探つて旅を續けたならば、本當に思はぬ獲物があらう、これから旅に出てもある事だが、朕を皇帝と思はず、變裝をしてからは、その方は何處までも師匠の僧侶。朕は學徒の秀才と。恁う云ふ積りで、言葉遣ひから行動まで、すべて他人に感づかれないやうに注意せねばならん。加之に、

もう一人の連れにまゐる町人だが、それは明後日、その方の邸までまゐる筈になつて居る。龜漢と云つて、何でも遊廓で妓の世話をする役人だとか、王侍從が申して居つた。」

「いや、それは飛んでもない事でございます。龜漢と申すのは、話に聞いて居る所では、役人などではございません。男子にして時には藝妓の所爲をいたす、卑しい身分の男でございまして、多くは浮浪の徒や遊蕩に身を崩した不所存者のする事と耳にして居ります。そんな卑しき者を、一天萬乘の天子ともあらう方が、召し連れて御旅をなされたとあつては、末代までも恥辱でございます。」と、一生懸命に眞赤になつて反對をし出した。

「ところが、昔はさうであつたが、今は至極正しい仕事に從つて居る感心な者であつて、遊廓の事情に詳しい者と申し、王侍從に命じた所、その者を選んでまゐつたのだ。最もその者には、朕が事も、その方の身分も話してない。ただ王侍從の友人が、蘇杭へ旅する案内をしろと云ふ位にごく輕く話してあるさうだから、この點は氣遣ひない。」

「幾ら氣遣ひないと、仰せられても、一天萬乘の君が……」

「これさ。甘鳳池！　一天萬乘と恐れながら、申しあげますは、以後その方は口にいたさぬやう堅く封ずるやうに、心掛けえ、朕はその二言は、氣になつてならぬ。」

「しかしながら陛下！」と、將軍は迷惑さうな眼を輝かして「陛下のお言葉に逆ひますことは、臣として道にあらぬ、不都合なことにございまするが、不正と知つては、幾ら陛下であつても、口を默して居ることは此の甘鳳池には出きません。陛下のお言葉を伺ひますと、切りに遊廓々々と云ふことを、繰返して仰せなされますが、民情を調べるに、何で遊廓などが必要でございますか。」

「ハツ〳〵〳〵。」と帝は高く哄笑して「甘鳳池！　その方も年の加減で餘程毫碌をいたしたと見えるな。」

「これは、怪しからぬ事を仰せられます。鳳池、年老いたとはいへども……」

「まア、よい〳〵！」と、帝は彼を制して「遊廓ぐらゐに、すべて下々の事情を探るに都合のいい所はないさうだ。と王侍從が申して居つた。」

「いよ〳〵怪しからぬは、王侍從の奴ぢや。」

「さう立腹するには當らぬさ、侍從が惡いわけではない。朕もまたさう思ふのだ。」

「いや何と仰せられませうとも、恐れ多くも、一天萬乘の君たる方が……」

「それツ、それ、その一天萬乘は、その方の口から、申さぬやうにたつた、今、封じたばかりで

はないか。」

「はッ。」と、思はずも平伏しながら、いま〳〵しさうに「ちやと申せ、餘りに恐れ多い儀にございまする。」

「よい！　何もかも、朕が承知の事である。」

これから粋な乾隆帝に武藝の達人、武骨一邊の甘鳳池將軍が供に立ち、案内役は龜漢の張三。變挺な一行が可笑しい旅を續けながら、名妓の產地として知られて居る蘇州の遊廓へと、變裝して乘り込み、一大事件の勃發するお話になるが、まア一吹してから……

素見の講釋

「時に老先生に若先生。」と、龜漢の張三は、杭州の宿屋に落ちついた日暮れ方、甘鳳池將軍と乾隆帝を知らぬこととは言ひながら、風變りな坊主とその弟子位に考へて居るので、こんな風に呼びかけてから、

「什麼です？　これから有名な杭州の名妓、別嬪さんの寄り集りである西湖畔の遊廓でも素見にまゐりますかネ？」

「さうだ！　それは此度、旅にまゐつた眼目でもある、是非ともその杭州の遊廓へ、そのヒヤカシとやらにまゐりたいものだ。」と、乾隆帝は頗る乘り氣になる。

これを聞いて、苦〳〵しい顏を一層苦茶々々にゆがめたのは甘鳳池將軍。

「何とお仰せられますか!?　一天……」と、危く口に突いて出やうとする鼻をビシヤリと音高く打ち折つたわけではないが、ぐつと彼の袖を引いた乾隆帝は、それとなく目で注意を促しながら

「これさ。鳳郎！　今更そ……そんな詰らぬ事は申さぬものである。」云ふな〳〵と、切りに目が押へて居る。

これを見て、怪訝に、呆氣に取られて居るのは張三。何にしても可怪しな主從の一行とは思ふが、王侍從から堅く言ひ含められて居る所もあるので、今までの道中、別に訊ねもしなかつたが時折老僧が何かを云ひかけると、若僧が袖を引張るのが氣になつてならないのだ。

「もし。鳥渡お伺ひしてえのでございますが、その……何でございますが……。老先生が一天……とお仰いますと、若先生が急に袖を握んでお留めになる。あれは一體何のことでございますか、俺らには一向、理由が解らねえので、これから道中も長いことだし一緒に御案内して歩かないではならねえに、お二人だけで何か恁う奥齒に物が挾つた言振は、氣になつて耐りませんや。

一つその一天……と、云つては、老先生がプツと默り込んで了ふ譯を話して頂きたいものですな。」

「あゝ、それか。」と、帝が氣輕に受けて「それは何でもない。老先生の口癖でな、氣にする程のことでもない。それよりは其の遊廓へ出向き民情の視察をいたさうではないか。」

「へッ。」と、張三は眼をぐり〳〵と睜つて、廻轉をさせながら「民情の視察でゞぜえますか!? 恐ろしく七難かしいお言葉をお使ひ遊ばすでゞさりまするな。だが、若先生! お前さん。そんなやうな、何時もの調子で堅苦しい言葉を使ふと、花魁が嫌ひますぜ、康熙辭典の化物が見えたやうに、スコ持てもしません。」

「こらッ張三! 控へッ。」甘將軍が眞赤になつて呶鳴りつけた。

「これは吃驚した! 老先生、これから遊廓へ素見にでも行かうと云ふ、粋な心掛を持ちながらフグ章魚のやうに御立腹は野暮でげせうがさ。」と、嘗めた物言ひである。

「まア鳳郎。」と將軍の變名を呼んだ乾隆帝は、機嫌よささうに笑ひながら「何も立腹することはない、何しても相手は、教養のない野猿も同じことだ、こんな男が何かと、珍しい所を案内して呉れるので、いろ〳〵と新しい事を知るのだから……」と、切りに慰撫めて居る。

「これさ、張三!」と、帝は彼に向つて「少し訊ねたい事があるが、その方の唯今申した言葉の内、素見とスコ持てとフグ章魚と云ふのがあつたが、あれは什麼云ふことだ?」

「へえ。素見はぞめきで。」

「そのぞめきとは何なのだ?」一國の皇帝に素見やぞめきの分らうはずもない。

「困りやしたな。その若い綺麗な妓の居る所を戯弄ひながら廓の端から端まで覗いて歩くのでゞぜえます。」

「なる程、それは氣に入つた。餘程面白いものであらうな。」帝は熱心である。

「面白いの、面白くねえのと、その大體、素見の味は一度や二度、廓へ足を入れた朴念人には解りツこはありませんや。綺麗な妓から、あらッ、また今夜も來たの! 本當に雨が降るのに御苦勞さまだネ。靴が汚れると氣の毒だから、早く歸つたら什麼? などと、聲をかけられるやうちや、まだ素見も新米でさア。毎晩根氣よく歩き廻つて居る内に、そこは可笑しな奴で、何所へ行つても、口一つ利かない妓から眼で挨拶をされるやうになりまさア。中には人なつツこい眼で、デレ助奴、また今夜もか! と云ふ風に見るのもあるし、まア一度、登樓つたら什麼と、媚を含んだ眼で、優しく睨むやうにするのも出て來まさア。行く先々の妓から知られて了ひ、妓の素情

から背中にイボのあることまで知つて居らなくちや、一人前の素見客ぢやありませんや。素見なんかは、本當の廓通のすることで、湯水のやうに金をすてる大盡遊びをする奴や、ただボヤ〳〵と廓の細道を歩き廻つて居る、金のねえ奴ア、素見ぢやねえ、素見されに行くのでさア。こんな動物は妓から嫌がられる野郎ですよ。」

「ふん。なか〳〵面白い講義だ。してスコ持てとフグ章魚は？」

「スコ持ては、少ししか持てねえので、つまり妓から振られるので。」

「どうも分らんな。少ししか持てぬとか、振られるとか申すが……。何が一體……？」

「妓から惚れられねえ、大切にされねえひとですよ。」

「なる程、それをスコ持てとか、振られると云ふのだな。」

「左様で。妓が嫌な奴ぢやと思ひますと、さつぱりと喜ばねえのでさア。」

「什麼だ？　朕は廓へまゐると、スコ持てであらうか。」乾隆帝も豪い事を氣にかけて、訊いて見る。

「さア、それは相方の出やうでさア。朕だか何だか知らねえが、お前さんのやうに、難かしい事ばかり言つて居つては妓は嫌ひませうよ。」

「それは不可ん。どうだ？　朕がスコ持てでない方法はないか。」

「困りましたなア。では何でもいいから餘り矢釜しいことをお仰らねえで、妓の機嫌を損はねえやうに、ただニコ〳〵と笑つてられるのが、一番罪がなくつていいのですぜ。加之に杭州の廓は妓の格式と氣位が恐らく高い所でげすからな。」

「さうか、ただニコ〳〵して居るのか、しかし朕が笑ひ通しで居ることは、妓の手前、面に締りがなくて、愚者に見えぬであらうか。」

「へッ。そ……それは何も笑ひ通すことはありませんや。そこは如才なく笑ふので。」

「なか〳〵に難しいものだな。それで鳳郎は如何なものであらう。」

「えッ。」と、張三は驚異の眼を張つて、「この老先生も廓へ御一緒にまゐるのでございますか。」

「いかにも、さうぢや。」甘將軍は大きく頷いて、しやッちよこ張つて居る。

「それは駄目だ。若先生だけかと思つたら、こんな野暮天の大將が乗り込んだ日には、第一、廓であげますめえし、妓が薄氣味惡がつて逃げてしまひまさア。」

「無禮なことを吐すと、そのままには捨て置かんぞ。恐れ多くも一天……。いやなに隆郎どのの御守護に任ずる某、片時たりとも、お側を離れることは相成らんのぢや。」

「こ……この調子ですからなア。」と、張三は首を縮めて、乾隆帝を見返つた。

帝へ初會惚れ

彼等三人は、こんな風であつたが、日が暮れると共に、杭州府の遊廓へと繰り込んだ。

ことは西湖に船を浮べる、江山船と云ふ水廓があつて、多くの妓はその澤山な船に住居をして居つた。

乾隆帝は、張三の案内で、先づ湖畔の遊廓へと足を運び、春華妓院にあがつて姚鳳仙と云ふのが、帝の相方として選ばれたのである。

「もし主さんへ。」と、若い美しい鳳仙は、何所が氣に入つたのか帝へすつかりと初會惚れの形。側に居る甘鳳池將軍と張三の當てれらる事は、一通りでない。がそれだけ帝にとつては、好い氣持ちなので、

「うん。何か!?」と、盃を卓に置て、優しく訊ね返したのである。

「主さんは何方からお越しでムいますか?」

「北京からまゐつたのだ。」

「まア、京都から? 本當におなつかしうございますわ、私も生れは北京の者でしたが……、惡い人に誘拐されまして、こんな所へ身を沈めたのでございます。」

「何ッ? その方も北京の者か。して其の惡者と申すのは何れの奴ぢや、仕儀に依つては救ひ出して取らするぞ。」と、帝が乘氣になつた事は豪い勢だ。

「まアお前さんは。」と、張三が耐りかねて、横合から「妓の手練手管。巧いことを言はれるのを一々に眞に受けては不可ません。恁う云ふ所の妓は、出鱈目で生きて居るのですから……。さア素見して歩くのは、一軒に恁う長く、足を留めては仕方がありませんや。ソロ〳〵と此の家は切りあげて、他へ出かけませうぜ」と、促し立てた。

「いや。朕は此家がよい。その方たち兩人が勝手に素見してまゐれ!」挺でも動きさうのない氣合である。

「お前さん。この妓に惚れたのかネ。惚れたのならば仕方がない。老先生。」と、甘將軍に向ひ

「俺等はこれから好きな穴を見つけやうではありませんか。」

「斷じてならぬぞ。」將軍は頑强に首を振つて「某、何れへもまゐることも罷りならぬ。恐れ多くも一天、……いや、何に隆郎どのの御守護を任ずる某。いかなる事があらうとも、片時たり

とも、お側は離れぬぞ。」

「それは野暮と云ふものですぜ。」と、張三が切りに、引き出さうとする。

「さうだ。張三の申す通りである。」帝もこの老將軍を何所かへ行つて貰ひたい口振。

「貴方さんも、粋をきかしなされませ！　若い年頃のことは、誰とても同じではございませぬか！」と、鳳仙も口添へをした。

「いや。例ひ何奴が何と申さうとも、某はお側は離れ申さんのぢや。」

「ほんに迷惑なことでございますなア。」妓はヂッと、帝を仰いで見た。

「幾らツベコベと吐さうとも某は民情視察のお供に任ずるのである。上御一人をお留め置き申すことなどは……」

この騒ぎは、何時か妓から樓主の耳に入り、怪しい一行として、廊の役所へと密告をされた。

それは、當時御禁制であつた僧侶の遊廓入りの上に、この一行の使ふ言葉の内に、一國の皇帝でなければ用ゐない所のものがある。そして何所か秘密結社の白蓮教主らしい面影が、若い男の方に見えると云ふのだ。

廊の役所から、この要所々々はすつかりと捕手の面々で堅められて了ひ、殊によると、怪しい

一行の首領は、時の天下を覗ふ白蓮教主かも知れないと云ふのだから、豪い騒動になつて來た。

「こりや亭主。その怪しい奴の居る室へと、某を案内いたせ。」と、春華妓院の表口、巡察司である男が先に立つて、跡から十數人の捕手が附き從つて居る。

「はい〳〵、これはどうも御苦勞なことでございます。何にしましても、大變に怪しい人たちでムいまして、老僧の姿をいたして居るのなどは、少しも坊主らしい所がないばかりか、武士のやうな言葉遣ひ。加之に若い男は、恐れ多い事でありますが、時折不意に漏す言葉に、朕が〳〵と自分のことを斯樣に申すとの妓の言葉でムいます。今、この世の中で、朕と申されるのは、誠に恐れ多い次第でありますが、一天萬乘の君さまより外にはムいません。第一、これが何より不審の一つでございますので、實は後で祟りのありませんやうに、お知らせをいたしたわけであります。」

「その儀は神妙と心得る。其奴め白蓮教主か或は何れ不逞の徒に違ひあるまい。遊廓にまゐつて恐れ多くも、主上の言葉を侵し奉る不屆至極の惡者、屹度詮議いたして呉れねばならぬ。」

「左樣でございます。では恁うお出でなされまし。」と亭主は、先に立つて、彼等に三人の模樣を見せる爲めに、コツソリとその居間の方へと案内したのである。

彼等は、亭主に示された壁の隙間から、入れ代り、立ち代り、中の様子を伺つて居る。

丁度、この時、甘將軍が旺んに、頑强に言ひ張つて居る所であつた。

「なる程、あの老僧の姿をして居る奴が、一番に一僻あり氣に見受くる。」と、巡察司は、亭主に囁いてから「その方たち、國禁を侵す不屈きな奴輩、直ぐと巡察廳へ同道をいたす！」と、口に立つた彼は、内へ向つて、大聲に怒鳴つた。

「何ぢや？」甘將軍は、怒りの吐け口をここに見つけたので「貴樣は何奴ぢや？」

「此奴、某に向うて、貴樣とは何事だ。いよ〳〵怪しい奴である。直ぐと役所にまゐつて、取調ぶる筋の申開きをせよ。」

乾隆帝は、この場の樣子を、不興氣に眺めて居つたが「その方は退れ！　朕に要事があらば、この土地の地方長官、松亮年を呼んでまゐれ。」

「いや此奴が！　云はして置けば、氣狂ひ同然。松長官閣下を呼んでまゐれとは、無禮な奴め大方正氣の沙汰ではあるまい。此所で騷ぐは、この家の迷惑である。申すことがあらば、役所へまゐつて尋常に申し立てえ。」

「何所で申したとて、同じことである。」

「何だ？　それッ。」と、後の捕手を顧みて、顎で彼を捕縛をしやうと指圖をした。十數人の捕手が、どか〳〵とその居間へなだれ込んだ。

張三は、恐怖に顫へあがつて、卓の下へと逃ひ込んで了つた。

「控へえ！　某を何と心得居るか。まツた此所に座す方を、誰方さまと思ひ居る？」甘將軍は、多年千軍萬馬の間に錬へた破鐘のやうな大聲を張りあげ、はッたと彼等を睨んだ。そして蟲乎と立ち上ると、

「某が云ふまでもない、此所に座すのは……」と、帝の事を云はうとした時、扉の外へ上下座して、ピッたりと跪づいたのは松長官の次に居る巡察廳長であつた。

「いや暫くお待ち下されたい。甘將軍閣下が、此所へ秘にお越しあらうとは、少しも存じませんでした。この杭州へお出でになつた事さへ耳にいたしませんのでお出迎へさへ仕りませず、どうぞ萬罪お許しを願ひたうございます。」

これを見て、吃驚したのは、その下役の巡察司や捕手の面々、親分が土下座するも當り前當時飛ぶ鳥を落す勢のある甘鳳池將軍がこの汚い坊主であらうとは！

「これッ。退れ、退り居らうぞ。恐れ多くも一天萬乘の皇帝陛下でおわしますぞ。」と甘將軍はま

た叫んだ。

「うえッ。」驚いたの、驚かないのと、天地が顚倒した程に吃驚したのは、そこに集つて來た一同の者たちである。これから乾隆帝と鳳仙とが、馴込みを重ねる場面になるのであります。

牡丹燈の女

髑髏と語る

「喬さま、本當に私はお嬉しうございます。」

「いや、それは私から申す言葉で。不圖した御緣からこのやうに、美しい貴女と知合になりました。この節では、もう何をしても手につかないで、ただ夜の來るのを待ち兼ねて居ります。」

「私とても同じでございますわ。あの晩のことを思ふとお恥しい、女の愼みを忘れて、一眼見たばかりの貴方さまをお慕ひ申しあげ、こんな風に深く馴込を重ねたのですもの。私とて、夜のくるのが待ち遠しうございます。ですが貴方さまは、定めし私を浮れ心の卑端いものとお思ひでございませうが……」

「何の、そ……そんな事がありませう？　私は貴女を得てからと云ふものは、今までの詰らないと思つた世の中に光明と希望が見えて、この世で、一番の幸福者のやうな氣がして仕方がありません。」

「それは本當に貴方のお心からおつ仰るお言葉でございますか。」

「何で私が虛僞や出鱈目を云ひませう!?」

「まア……嬉しうございます。私の身も……心も……みんな貴方へ……」

「えッ、それ程までに、しがない私をお思ひ下さるのか。」

「ええ、もう何もかも、みんな貴方さまのものですわ。」

「淑芳さん。」と、怪しいまでの顫え聲。

「喬さま。」と、若い男女は、激する情を押へつけることが出來なくなつて、相互に犇と堅く抱擁をした。

その隣家に住んで居る孤獨な老人は先刻からぼそ〳〵と男女が囁き交すやうな聲音を聞いて、不固眼を醒し、床の上に起き直つたのである。そして不審の晴れやらぬ頭をかしげ、兩腕を組んで耳を立てた。

隣家には、妻を逝くしてから、やはり自分のやうに獨居者の若い、喬生と云ふ男が住んで居つたのだ。それが此の半ケ月許り前から、夜になると、何所から連れてくるか、若い女との樂しさうな睦言が漏れて來る。幾ら年は老つても氣にならない事もないが、最初の内こそ、若い者のことだ、仕方もないと考へて居つたが、恁う毎晩のやうに、夜遅くまでひそ〳〵と語り明された日には、耐らないと思つた。

「今夜は一つ、喬生の相手がどんな女であるか突き留めて置いて、明朝はうんと彼奴の油を絞つてやらなければならない。」と、腹の内で考へた老人は、音を立てないやうに氣を配りながら、ソツと床から土間へ下りて、隣家とは壁一重、灯影の漏れる小さな破穴へと眼を當てた。

と、彼は餘りの驚愕と恐怖に、思はずも「アツ」と、叫ぶ所であつたが、危くもその聲を呑み下して、ガタ〳〵と顫える足元へ力を入れながら、もう一度、その壁の破穴へと眼を當てて覗き込んだ。

すると、そこには、灯を背にした喬生が、見るからゾツとする程に怖しい髑髏と向ひ合ふやうに、炕に腰を並べ、さも樂しさうにいろ〳〵の話をそれからそれと繰返して居る。そして髑髏が何事かを低い聲でつぶやきながら、凄い笑を見せると、彼は若い女でも引き寄せるやうにそれを

抱き締めて、

「私はもう……胸が張裂ける程に嬉しい。」

髑髏はキキと、凄い笑ひ聲を立てた。

彼は、それを型く抱き締めたままで、側にあつた榻の上に轉び倒れたのだ。

老人は、背筋へ水を流し込まれる冷い恐怖を覺えた。什麽しても、それ以上に其場の成行を見て居る氣力がなかつた。

彼は漸くのことで、床に遁ひあがりガタ〳〵と顫えながら、一晩中微睡とも出きなかつた。

隣家から漏れる喬生と髑髏の囁き聲が黎明近くなつて消えた時、彼はホツとしたやうに蘇生つた思ひである。しかし此の儘に捨てて置くことは、年若い彼を見殺しにすると同じである。すべてを喬生に明して、その怖しい迷を醒して呉れやうと決心をした。

「喬さん〳〵。」と、老人は表へ廻つてその扉をとん〳〵と叩いた。

「はい、誰方さまで？」と、家からは元氣のない、寢恍けた聲がして「唯今、お開けいたします。」

「は……早くして呉れ！　大……大變なことなのだ。」

扉が開いて、朝の薄明りの前に、幽靈のやうに蔭の薄い、肉の落ちた喬生の姿がションボリと

現れたのを見ると、老人は耐り兼ねて、

「お……お前さんはえらい奴に魅入られて居るぞ。近頃毎晩のやうに、誰と話して居ると思ふのだ？」

「ああ、それをもうお知りでございますか。御存知とあれば、別に隠し立てはいたしません。本當にこの年をして、お恥しい次第ですが、一寸した所から或る大家のお嬢さんと馴込を重ね、深くなりました……」

「冗……冗談を言つちや不可ない。大……大家のお嬢さん所か、あれはナ、妖鬼ぢや。悪霊だッ。」

「えッ、まア、何を詰らないことをおつ仰います。先様のお苗字を出すことは、好みませんが、あの方は、西湖の西、湖心寺の近くにお住居になつて居られる奉化州の判官のお嬢さんで符麗卿とおつ仰り。字名を淑芳と云ひ、侍女の金蓮とたつた二人。事情あつてこの土地にお居でなのでございます。」

「な……何ッ？　奉化州判官の娘で符麗卿だ？　そ……それではいよ〳〵間違ひのない悪鬼ぢや。湖心寺の本堂に柩の置いてある。西湖畔で水死した若い二人の女の悪霊ぢや。」

「そんな馬鹿なことが……」

「いや、お前さんは全然、鬼霊に迷はされてお居でなのぢや。それが證據には、お前さんはまるで死人のやうではないか。此のままに行つたならば、妖霊のために血を吸ひ取られ、本當に死んで了はなければならない。實はナ、儂が昨夜お前さんたちの話聲を聞き、壁の破れから覗いて見て、吃驚したのぢや。お前さんが樂しさうに話して居る相手は、恐ろしい獨樓ではないか。」

「そ……それは本當でございますか。」喬生はわな〳〵と顫えながら急き込んで訊ねた。

「何んで偽りを云ふものか。什麼だ？　お前さんも儂から話を聞いたならば、何かこれと云ふ怪しい點は思ひ出せないかネ？」

「左様でございます。さう考へますと。」と、彼は思ひ煩ふ様子で「夜になつてまゐりまして、夜明けの光を恐れる所も、可怪しうございました。それから淑芳の身の冷いことが、私として、今に思ひ當ります。」力ない聲で、情なささうに漏した。

「まア、今日の晝間でも、湖心寺へ行つて、本堂に未だ置てある筈の水死女の柩を見て來たならば、儂の言葉が一層に本當であると云ふことが分るだらうよ。」

「はい、それはもう、私としまして、あの女の本性を突き留めませんでは……」と、蒼白い死人

のやうな面へ、ポッと氣色ばんだ血を見せて「もしもあの女が、貴方のおつ仰るやうな鬼靈であつたならば、私は什麼したならば宜しうございませうか。昔からも、死靈に憑かれ、魅入られたものは死ぬとさへ、言ひ傳へられて居ります。私は遲かれ、早かれ、死なくてはならないので御座いませうか。」と、彼は尙も半信半疑の態で、それでも死ぬことを怖れて、熱心に訊いた。

「さア、さうは言ひ傳へがあるものの、あの名高い玄妙觀法師の所へ行つて、お願ひしたならばあの方は開府王眞人のお弟子であるし、屹度いい御符を下さつて、お前さんに憑いて居る惡靈を追ひ拂ひ、妖氣をのけて下さるかも知れない。が什麼して、またあんな女と馴込を深くしたのだネ？」

「それは、このやうな譯からでございます。まア一通りお聞き下さいまし。」

怪しい魅惑

「金蓮！　妾たち二人は本當に淋しいわねえ。他にこれと云ふ賴りになる方もないし、天にも地にも、お前とたつた二人きりなのだから……」

「全くお孃さまのおつ仰る通りでございます。私は兎に角、召使のことでございますが、貴女さまは、これ程にお美しい御器量でありながら、私のやうなものとたつた二人で、あんな淋しい所にお暮しなさらなければならないとは、何と云ふ不運なことであらうかと、蔭ながらお痛はしく存じて居ります。」

「それもこれも、みんな定まる運命なのですから、諦めてますわ。」

「でも、それ程にお力落しを遊ばすことはございません。お孃さまは未だ十七や八のお年でありながら、これから本當のお樂みがくるのですわ。貴女さまをお慕ひ申して、愛しいと覺召す方も屹度降るやうに出てまゐります。その時は、私など御用がなくなつて、反つてお側に居ると、お邪魔でございませうから、お暇乞を頂くやうになります。」

「まア、嫌な金蓮！　お前こそ十九や二十の若い身ですもの。本當に面白いことが、これから澤山に出てくるわ。」

「どうでございますか。私はお孃さまと違ひまして、こんなお多福ですから……」

「いえ、お前の方が、私よりは餘程綺麗ですよ。加之に若い男の方の云ふことならば、何でも從順に、ハイ〳〵と聞くらしいわ。」

「あらッ、そ……そんな遊蕩な女に、私が見えまして？」

「えい、それは明瞭と分つてるのですもの。男の方がお前の手へ、一寸觸つた位でも、私を捨て乞度その方へ飛びついて行つて了ふわ。さうに違ひない。」

「お嬢さま！　それは貴方さまのお胸の内をおつ仰つてゞさいますのネ。」

「まア、私が？」

「えい、何時でも、淋しい〳〵と口癖におつ仰つておゐでなさるお胸は、私、よくく存じて居ります。」

「オホ、、、、、、お前だつて、淋しいと云ふことは、始終お云ひではないか。だからお前も胸の内では……」

「ホ、、、、、。」と、二人の若い女は、聲を揃へて笑つた。明みで云へないやうな事を、互の胸から胸へ通はせながら、羞みがちな處女が大切に藏ひ込んである祕密――樂しい希望の魂を巧な言葉で、突つき合つて見たのだ。

二人の若い女が、何所かから淋しいが、艶のある笑聲に、門前に佇んで居つた喬生は、思はずハツとしたやうに、その聲した方を透して見た。

すると、そこには牡丹燈を手に提げた美しい召使らしい女が、先に立つて、その後から、これ

はまたゾツとする位な凄艶さ。細そりとして居る姿態。肩から腰へかけての線がなよ〳〵として今にも月の蒼白い光の内に溶け込んで了ふのではないかと疑ふ程、深閨に育まれた女らしかつた。

その夜は丁度、上元節であつたので、向ふ五日間と云ふものは、明州城内の商店では、すべてが店頭に掲げる燈籠に意匠を凝し、一年にたつた一回だけ廻つてくる夜の祭日を祝すのだ。さうして道行く人たちも、女も男も各自にいろ〳〵の燈籠を提げて、街を見物しながら、自分の美しい燈籠を見せに、ぞろ〳〵と歩き廻つて居つた。

喬生は、去年の夏、若い妻を喪づてから、何だかこの世の中が本當に詰らなく思はれて、この華やかな燈籠節にさへ、城内へ出かけて見やうと云ふ氣も起らないので、自分の家の門前に立ち行きかう人たちや其の手に提げて行く燈籠を興なささうに眺めて居つたのである。

その内に、夜もだん〳〵と更けて行くと、城内から歸つてくる人だけで、三更近くなつては、その人通りさへも稀になつた。

十五夜の月ばかりが、嬰に冴え返つて、大地へ蒼白い水のやうな、冷い光をなげかけて居つた。

そこへ、ヒョツコリと浮き出したやうに、彼の心を掻き亂し、わく〳〵させるやうな若い女が二人。凄い程に美しい姿をして、現れて來たのだ。

喬生もハツとして眼を据ゑたが、それよりは牡丹燈を提げて居る召使と、もう一人の女の方が一層に吃驚した樣子で、暫くは立ち止つて、意外にも、この夜更けに門前に佇んで居つた若い男を凝視した。そしてかの女のパツチリと澄んだ眼が、彼の心に何事かを問ひかけ、なげかけて居るのを知つた。

「お嬢さま！　什麼遊ばしまして？」召使がソツと耳元で囁いて居るらしい聲が聞えた。

「えツ」と、ホツとして我に返つた女は、召使を顧みて「ホ、、、、。」と、羞しさうに低く笑つた。

「まア、何ですねえ。お嬢さまとしたことが！　少しお氣をおつけ遊しませ！」

「でも私……！」

「さツ、お歩き遊ばせ！」召使は無理にも急き立てて居つた。

女は殘り惜しさうに、喬生の方を振返ると、白い面に月光を浴びて、あでやかにニツコリと笑んだ。が急に面を返すと力ない足取で歩き出した。しかしかの女は、二三歩行つては振返り、四

五歩歩いてはまた振返つて、彼を見た。

喬生は、怪しいまで、胸のときめくのを覺えて、自分の心を押へつける力をさへ失つて了ひ、まるで見えない糸に引き寄せられるやうに、後からその女たちの跡をつけた。

或る時はかの女たちよりも前に歩き、或る時は態と歩みをにぶらして、後から行つたが、女の側を通る時、えならぬ蘭麝香が強く鼻を撲つて、一層にときめく顫をさへ覺えた。

「もし……もし……」

女は、喬生が側を通る時、低い力の籠つた聲音で呼び止めて「貴方さまは……？」

彼はハツとして、ブル〳〵と顫え出しさうな足を踏みしめて立つた。そして女の眼から、かの女の心を讀んで了つた。

「お嬢さま！」召使は心配さうに、何事をか耳元で、ひそ〳〵と囁いた。

「まア心配をおしでない。お前は何も云はないでお呉れ！　私は屹度、このお方と前世からのお約束が出きてゐたのだと思ひます。さうでなくて、何で、今宵一眼お遇ひしたばかりで、すつかりとあのお方のお心が分らう道理がないではないか。」

「私も、今、始めてお遇ひしたばかりの貴女の胸が分るやうな氣がいたします。加之に……」と

喬生は、何かもつと此の場合、女の心をひく適當な言葉はないものかと、思ひ惑つて居ると、女は矢繼早に、

「それ御覽！　ね、このお方もお仰る通り、私たち二人は、この燈籠節の月夜にお會ひする運命だつたのですわ。」

「もう、お宜しうございます。」と、召使は、急に女の言葉をさへぎつて、怨めしさうに見あげながら「ではお嬢さま、貴女はどうなさるお積りですが?!」

「私?」と、女は困惑の色を浮べて、救ひを求むる眼で、喬生を見返つた。

「恁うなすつてはいかがですか」と、彼は此所ぞと、思ひ切つた口調で「私の家へ行らしつては下さいませんか。別に氣兼ねをなさる何人も居りませんから！」

「さう、それではねえ、金蓮！」

「えい〳〵、それがお宜しうございませう。」

「お前、氣を惡くしたの?」

「何で、私が氣を惡くいたしませうか。」と、すねた素振をみせたが、急に言葉を改め、

「そ……そんな事はございません。」

「さう、それではお前。その牡丹燈を持つて、一足先へ歸つて下さい。ね、私は、少しお話がありますから……」と、言ひ澁つて「本當にいいでせうねえ。」

「はい、では私、お先へ。」と、喬生に向ひ「お嬢さまをお賴みいたします。御免遊ばしませ。」と言ひ捨てると、くるりと踵を返し、急ぎ足に去つて行つた。

牡丹燈の灯影がだん〳〵と薄れて、遠ざかつて行くのを、見詰めて居つた喬生は、

「お嬢さん。」と、召使の口調を眞似て、呼びかけて見た。

「まア。」と、眼を見睜つた女は「そんなことをお仰つては嫌！」羞しさうに伏眼になつたが、急に面を見合してニツコリ。

「さア、まゐりませう！」彼は大膽にも、人通りがないのを知つて、側に寄り添ひ、ソツと手を握んだ。

「何と云ふ冷い手だ！」

まるで生きた人の手ではない。が彼は今、そんな事などは考へても居らなかつた。ただ凄い程の女の美しさに魅惑され、痲痺され、醉はされて居つた。

女は、喬生の爲すままに任して居つたが、肩に手を置き、腰に手を廻しても、何か恁う影を掘

むやうに頼りなく、冷さのみが指先に殘つた。しかし彼は、女の不可思議な力に引きずられ、側を離れることさへ出きない、魂までもゾッコン打ち込んで了つたのではないかと思ふ程な強い愛着を感じて居つた。

かうして獨身の彼が、夜更けの路傍であつた美しい女を、家へ連れ込んで來たまでの一伍一什を描き出し、その大體を掻いつまんで、隣家の老人に語つたのである。

死靈の城へ

「お前は三日の内に必ず死ぬぞ。身に憑き纏うて居る妖氣の爲めに、魂までも奪はれて了ふのだ。それッ、その顏に現れて居る死相が、儂にはあり〳〵と分るので、氣の毒ぢや。」

喬生が、玄妙觀法師を訪ねて行くと、彼が未だ何も一語さへ切り出さない内に銀髯長く胸に垂れた法師は、鋭い眼を据ゑて、かう言ひ出したのである。

「そ……それに就て、私はお願ひに上りましたのでムいます。」と、彼はそれから、隣家の老人から聞いた話。湖心寺に行つて、本堂の隅に置いてある柩の上、つり下げてある牡丹燈に見覺えのあることから、怪しい女との馴込を重ねるに到つたことを語り出さうとした。

「いや、それは聞くには及ばぬ。お前が儂の法力によつて救はれやうと思ふならば、これから儂の云ふことは、何でも守ることが能きるか、什麼ぢや？」

「はい、それはもう、この怖しい死靈から離れることが出きますならば、怎麼お命令でも守りますでございませう。」

「さうか、では此の二枚の朱符を、お前にやるから、一枚は門に、もう一枚は榻に貼つて、如何なる事があらうとも、どんな變つた聲を耳にしやうとも、夜になつてからは、決して外出をしてはならぬぞ。もしも儂の許さぬ前に、この命令を破つたならば、お前の生命は無いものと思はねばならぬ。よいか、分つたであらうナ」と、法師は、二枚の赤い御符を、喬生に手渡しながら、強く念を押した。

彼は大層悦んで、法師に厚く禮を述べ、家へ歸つてから、朱符を門と榻に、命令られた通り貼りつけた。

そして什麼云ふ變つた事が起るであらうかと、ビク〳〵しながらも、日の暮れるのを待つたのである。

その内に、彼にとつて、怖しい第一夜——四邊はとつぷりと暮れて、深い夜が來た。

喬生は、室の燈火を消して、床の上、すつぽりと夜具を頭から冠り、呼吸を殺して、わな〳〵と齒の根も合はずに顫えて居る。

初更――二更、三更近き刻限となると、何所ともなく、ぴた〳〵〳〵と云ふ聞き馴れた地を踏む靴の音が靜に、枕に響いて來た。

「喬さま、喬さま。」と、門の扉口で、女が幾度か繰返し、聲を嗄して呼びつづけて居る。が彼は生きた空もなく、夜具の內で、一層にガタ〳〵と恐怖に顫えながら、ヂツと默つて居つた。

「貴方さまは、何と云ふ無情い方でございますか。」と、女の聲は物悲しい調子を帶びて「あれ程までにお契ひ下さいました妾を、今と……今となつて、お見捨てなさるのでございますか。」涙に聲を濕らして、詰つた。

「喬さま。私がこれ程に物を申しあげましても、貴方さまは一言さへ、御返辭して下さいませんのですか。本當に……本當にお情ないお心におなりですわネ。燈籠節の晩にお仰つたお言葉。あれはみな僞りでございますか。淑芳は喬さまが、そんな薄情な方とは、存じて居りませんでした。」

女の怨言は縷々として、それからそれと盡きないで、泣く音を漏し、悲嘆を傳へて、搔き口說

いたが、彼がヂツと無言で居るので、終ひには物狂はしい叫びをあげ、果ては憤怒の罵りを浴びせかけた。

「ようございます。貴方はよくも、私をお欺しなさいましたネ!? この……この怨は屹度報いてあげますから……」と、その邊を暫く走り廻つてでも居るらしい樣子であつたが、急に烈しい聲で「喬さま。貴方は何で、この扉をお開け下さらないのですか!」

ばりツ〳〵と、口惜しまぎれに、扉を爪ででも引つ搔く音が聞えて來た。

喬生は、夜具の內、夢中で佛の加護を祈りながら、顫えて居るばかりだ。

それでも、よい按配に、その夜は、怖しい怨みの言葉を言ひ殘して、淑芳は歸つて行つたらしかつた。が、それから毎晩のやう、女は喬生の門まで來ては、扉を破る程に引つ搔きながら、さん〳〵に彼を怨んだ。そして其もだん〳〵と熱がさめたのか、諦めたのか、日數が經つに連れてその時間が短くなり、十日程過ぎた夜からは、ぱつたりと來なくなつた。

彼は、ホツとして、蘇生した元氣を回復したのである。

それが一ケ月近くなつてからは、死靈の恐怖から本當に解放された氣持で、或る日のこと、喬生は久し振り、親しい友達を訪ねて、樂しい話と快い酒の醉の進むのに、つい時間の經つのを

忘れて了つた。そして彼がその友の家を出た時は、何時か、日はとつぷりと暮れて居つた。

月のない、星の降るやうな夜で、強かに醉つた酒の面を風に吹かせながら、幾らか氣にはなつたが、湖心寺の側を、湖畔に沿つて、ぶらり〳〵と歩いて行つた。

すると、寺の破垣の暗い處に、急にぽーと蒼白い薄光が、射して、ギョッとした喬生の目の前に、地から湧いたやうに、牡丹燈を手にさげた金蓮——淑芳の召使の姿が現れた。

「まア、喬さま。お久しぶりでございます。」

と、する〳〵と、醉眼を見開いて、呆氣に取られて居る彼の側へ寄り添つた。

「貴方さまは、本當に何と云ふお情無い方でいらつしやいますか！　お嬢さまは此の頃、貴方さまのことを申しては、泣いてばかりお暮しでございます。さア丁度よい所で、お眼にかかりました。いえいえ、もうお遁げなさらうとて、今夜は私がこをお離しはいたしませんわ。どうぞ、お嬢さまを可憐さうと覺召して下さつたならば、長うとは申しません。ほんの一寸の間で宜しうございますから、お眼にかかつて、一言でも、二言でも、貴方さまのお口から優しいお言葉を、お掛け下さいまし。さうでなければ、私、どうしても此のお袖は離しはいたしませんわ。」

と、金蓮は堅く彼の袖を握んだ。

「金蓮！　どうおしなの？」

と、透き通る優しい聲が暗にして、すつきりと、その側に美しい淑芳の姿が浮び上るやうに出て來た。

「あッ」

と、淑芳の口からは、悅びとも、驚きともつかない叫びがあげられて、

「喬さまではございませんか、私……私、遇ひたうございましたわ。」

と、轉ぶやうに走り寄り、彼の前に膝をつき、葬とすがりついて、身を顫しながら、さめ〳〵と泣き出したのである。

喬生は、什麼したことか。怪しいまでに女たちの不愍さに魅惑され、玄妙觀法師の言葉も忘れたやうに、振り切る力さへ失つて了ひ、頭腦にまざ〳〵と想ひ返されて來たのは、淑芳との樂じかつた逢瀬であつた。

「本當に濟みませんでした。」

と、彼は眼に露さへ浮べ、細そりとした女の背中を、慰めるやうに撫でて居つた。

「いえ、貴方さまのお心が、前に變らないことが分りましたので、私、こんな嬉しいことはござ

いません。」

女は喬生を見あげ、晴れてニツコリと笑つた。

「まア、お嬢さんのお嬉しさうなこと！」

「金蓮！　私、何ですか、羞しいわ。」

袖を面に當てながら、眼に媚を籠めて喬生を偷み見た。

それから女たちに案内された彼は、直ぐ近くにあると云ふ邸へと、夢の中の人のやうに、ふらふらと引かれて行つた。

翌る日になつて、喬生が歸ちない所から、大騒ぎとなり、大勢の人で、もしやと思ひ、湖心寺へ押しかけて見ると、淑芳の柩の蓋の隙から、彼の着物の裾が外へ、少しはみ出して居る。

蓋を開けて見ると、女の髑髏の上に、折り重なるやうにして、彼は死んだやうになつて居つた。

が二日程して本當に死んで了つた。

胡蝶盃物語

船中で語る若武士と漁士の娘

秋の陽光を湛えた楊子江の流れは、いかにもなだらかに、鏡の面のやうに鈍い銀色に光つて見えた。

帆船の往來も斷絶えた黄昏近く、河巾の廣い三家口の村端れ、岸の蘆の茂みへ舳を突込んだ漁船らしい、かなり大きな胴の間のある船が一艘、もやつて居つた。

折柄、堤を呼吸せき走つて來た一人の若者。

年の頃なら二十三四、武家に人となつた上品らしいキリツとした顔立、優しい姿に似氣なく、棍法や鎗術で錬えた腕や指が節臭れ立つて見え、日に燒けた面が何所か武者修業にでも出歩いた男のやうにさへ思はれた。

「もし……もし。」と、姿に似ない女のやうな優しい聲を出して、その男は船の近く、堤に立つて呼びかけてから「どうぞ私を向ふ岸へ渡して貰ひたい。お禮は幾らでも希み次第に致すが、一生の頼みである。どうぞ急いで向ふ地へ渡して貰ひたい。恁う云ふ内も心が急いてならぬ。これツ、

その船には誰も居らないのか？」

「あい、誰方でございますか存じませぬが、それはなりませぬ。」

胴の間の屋根を跳ねて、直乎と立つて、半身を現した娘。その男の方を一目見ると、急に嬌羞を帯びて、俯下いて了ひ、もじ〳〵とし出した。

「什麼してならぬのか。そのやうな事を申さず、是非とも向ふ地へ渡して貰ひたい。」男はさう云ふ内も、只ならない様子で、後の方を振返り〳〵哀願する調子で頼んだ。

「貴方さまは縣知事さまの御子息さんでございませう……が。」と、娘はチラッと瞳を投げてから訊いた。

「いかにも、私は平陽縣知事を父に持つて居る張景陽と申す者ですが……それは一體、什麼したわけですか？」

「さア、單將軍さまからたつた今、布告が廻つてまゐりまして、平陽縣知事の子息、張景陽を向ふ地に渡す者があつたならば、嚴重に處罰する。そればかりでなく一家親族までもが同罪であると、かやうに申してまゐりました。」

「うむ。左様であつたか。」男は落膽した態度で「もう既にこの邊までも手を廻して居ると見える

が、私は決して天道に逆いた、不正を働いた者でない。どうであらうか。私が一生の恩に着るがこの生命を救つて貰れる積りで、隨分迷惑の願ではあるが、助けて貰えまいか。」

「それはもう、知事さまのこと、貴方さまの事は、世間の噂でよく存じて居りますが、お上のおとがめよりも、唯今私には降つて湧いたやうな取込事がございまして、お言葉通りに致す事が出きないのでございます。」

「そして夫は？」

「老父がたつた今、死にましたので……」

娘の眼には露が光り、悲痛の色を深くして水面を見つめた。

「それはお氣の毒な。」男も困惑の色を面に浮べて「本統に絶對絶命、困つた事が生じて了つた。恁う云ふ内にも追手は、私の行方を探して迫つてまゐらう。非義非道の彼等から繩目の辱しめを受けるならば、潔よく自盡して死んだが勝である。」淋しく漏した言葉の末から「何所か、向ふ地へ渡して呉れる漁船でもあるまいか。」

「それは所詮、希みのない事でございます。貴方さまも堤から御覽なされば、お分りでありませうが江上にはもう一隻の船影さへありません。將軍さまからの嚴重な布告。みな祟りを怖れて家

路へと漕ぎ返つて了つたのでございます。水の上を歩く術のない限り、向ふ地へ渡る事は出きませぬ。」

「ああ、是非ない事だ。父に累いを及ぼさぬ爲めにも、私が此所で入水して死んだと聞いたならば、幾ら非道の單將軍でも、よもやこれ以上に憤怒の追及はいたすまい。」

男はすべてを諦め、觀念したと見え、落ち着いた口調で「豪く迷惑を掛けては相濟まぬ。さう云ふ内にも追手から、繩目の恥辱を受けたならば、末代までも名の汚れである。では此でお分れ致さう。」

張景陽は憤然と元氣のない脚取で元來た道と反對の堤を二三歩、歩いて行つた。

「もし景陽さま。」

船の娘は、耐りかねた憐愍の心に、聲をつまらせながら「什麼なる事か先方は分りませんが、暫く此の船の胴の間へお忍びなされませ！　追手の眼を遁れる事が出きませんで、發見け出されましたならば、その時はまた何とか、分別もございませう。」

「えッ、それでは私を向ふ地へお渡し下さるのか。」景陽は思はずも嬉しさに、立ち止つて訊き返した。

「いえ、船を出す事は此の場合、反つて追手の疑ひを深くする道理でございます。さア急いで船へお忍びなされまし。おう……あれ、向ふから堤を眞驀地、どうやう此方へと追手の影が見え出しました。」

船に立ち上つた女は、氣を急き立てながら遙か遠くへと眼を据ゑた。

「それではお言葉に甘へ、隱して頂きます。がもしも發見け出されました其の時は、一命を捨ても決して迷惑は及ぼしませぬ。」

張景陽は、恁う言ひ捨てると、身輕くポンと、汀から船へ身を躍らせ、胴の間の板を跳ねて姿を隱した。

そこへ間もなく、戟や劒を手にした騎馬の武士が三十餘騎、蹄の音高く、堤に砂煙りをあげながら走つて來て、

「こらッ娘！　此の道を年頃二十歳前後、武家の若者らしい男は通らなかつたか。」

馬上の一人は、威猛高に蠻聲を絞つて叫んだ。

船の娘は、それに何の返辭さへせず、遣瀨ない風で、ヂッと水の面を見詰めて居る。

「やいッ、おのれは聾娘か。この堤を二十歳前後の若者が通行を致さぬかと、某が訊ねて居る

のは、耳に入らぬのか?!」

「……」娘は振返りもしない。

「いや、飽れ返つた女ぢや。どうやら尊と見えるな。」

馬上の武士は、鞍から下り、汀から船へ片足をかけやうとした時、娘はクルリと身を返して、

「何を爲さるのでございます！　汚い船でも私の住居でございます。何の斷りもなく、土足でお上り下さる法がございますか?」キッとして詰つた。

「やッ。おのれは尊ではないのぢやな。」船椽にかけた片足を引込めた武士は、さも意外さうに、

「では何で、某があれ程に訊ぬる事に答へぬのだ?」

「それ所ではありません。たつた今、二人活しであつた老父は非業の最後を遂げ、どう此の先を送らうか。と途方に暮れて居るのでございます。」

「ふうむ。父が非業の死を遂げたと?」

「はい、これ御覽下されまし。」と、娘は胴の間の片隅。掛けてある眞菰を跳ねて「此の通り、たつた今、歸つてまゐりますと、息絶えたのでございます。そして臨終に言ひ殘しました言葉に依りますと、單將軍さまの若さまから妙音寺の境内で無理難題、大勢で激しく老の身を打擲されたのが原因でした。」悲憤の涙をハラ〳〵と流しながら、怨みの眼でチッと武士たちを見返した。

「うむ。あの老耄漁士の娘か。」

「今日の騒動は、言はばあの漁士が頑固から起つたも同じ事ぢや。將軍さまの若さまのお仰ることだ。どうせ賣りに來た背籠の大鯉。若さまのお希み通り、差し上げるが當り前であるに、代がどうのかうのと吐し居る。某たちが手で、無禮打ちにもす可き奴ではあるが、高が老耄のこと、百叩きで追放をしたのぢや。それが元で死なうと、生きやうと某等の知らう理由もないが、その場へ丁度、縣知事の息子、張景陽が通り掛り、某の主人、將軍の若さまである單干善殿に齒向ひ、無法にも手痛い目にお遇はせ申したので、某等も打ち捨てては置けぬ。直ぐと將軍府の兵を借りて、彼奴を取つて押へ、あの武藝を鼻にかける、傲慢無禮の景陽を逮捕する布告を出す事にしたのだ。どうせ此の江が渡れなければ、彼奴も袋の鼠。遲かれ早かれ刑場の露と消える奴ぢや。どうだ?　此の邊を迂路〳〵して居つた姿は見かけぬか。」

「そのやうな事、一向存じませぬ。」怒りを押へ、不氣嫌さうに面を背けた。

「さて〳〵氣の小い女ぢや。老父が死ぬのも身から出た錆。今更に某等を怨む事はない。がもしも此の後、張景陽が參らうとも、船中へ潜伏い立てなど致す事は、相成らぬぞ。そのやうな所爲

をすると、其方も同罪・重く處刑されねばならない。確と申し渡して置く。」

武士たちは、老漁士の死に多少は心もとがめると見え、遁に無法な所爲もしないで、堤を向ふへと走つて行つた。

日は何時か、西の空を燒く餘炎が薄れて、灰黑色が濃く、四邊にたれ籠め、人の面も朧に、河面に薄墨色を流した。

汀に低く、竿を入れた水音が響いて、娘の船は嚴しい禁令を破り、江の中心へとすゝ〳〵と浮び出したのだ。

月はまだ上らないが、日がとつぷりと暮れて、空に星の輝き出した頃。

楊子江の中流、寂とした夜闇の内に、娘は手馴れた櫓を巧に操つて居る。

小半時近くも漕ぎ續けたであらうか。船が向ふ地近く來た時、娘は櫓を捨て、胴の間近く來て板を跳ねあげ、眞暗闇な底の方を覗き込んだ。

酒の香を慕うて飛び廻る番ひの蝶

「景陽さま、もう大丈夫でございます。」胴の間にキツと兩手を突いて跪き、彼の姿を現すのを

待つた。

「お蔭で、危難を遁れる事も出來ました。此の御恩、一生の恩に着まする。」

張景陽は、船底から這ひ出して、そこへキチンと座り、兩手を突いて深く禮を述べた。

「何の……私こそ、貴方さまにはお禮を申さねばなりません。知らぬ事とは云ひながら、この御災難も皆、元は老父の急場を救ふ事から起つたとは、唯今武士の口から分りました。本統にお氣の毒な事をいたしました。お邸に居らつしやれば、知事さまの若さま。何御不自由もあるまいお身を、このやうに船底へ身を隱し、此から先も什麼なる事かと、お案じ致しますわ。」娘は愁然と云つた。

「いや。此方の岸にさへ渡して頂けば、最早單將軍の權勢も及ばない他の天地。ただ氣懸りなは父、知事の身の上である。私の此の遺恨から詰らぬ難題を掛けられはせぬかと、それ許りが心配です。」景陽も淋しく云つた。

「本統に無法な單將軍のこと。どんな所爲を致しますか分りませぬが、よもや貴方さまの居らぬのを、何時まで深く恨みませう。それよりは私は、屹度老父の仇を酬いてやりたう存じます。」と娘は決心した面持で言ひ放つたが、急に力なく首垂れて「しかし其れも何時の事やら覺束なく…

……」

「お力落しをなさるには當らぬ。今日の御恩返しの爲め、屹度應分のお力添へを致しませう。何處に居らうとも奔せ參じて……」

「本統でございますか。」娘は嬉しげに瞳を輝かした。

「契つて詐りは申しません。」景陽もキツと身仕ひを正して云つた。

「有り難ふ存じます。そのお言葉を頼りに、機會を伺ひ、老父の仇を報いる事にいたしますわ。」

男女は暗に面を見合して笑んだ。それは如何にも淋しいものであるが、彼等の胸の内に怪しく通ふ何ものかがあつた。

「私は江を住居とする漁士岳順の娘。倩英と申す者でございます。平生はお言葉も頂けない卑しい身分の者でありますが、不圖した緣から此のやうにお遇ひ致し、また直ぐとお別れ申さなければならないと思ひますと、情なうございます。」と、娘、倩英は聲まで、いぢらしくも顫して、

「死んだ老父が引き合して下さつた方と思ひ、貴方さまの事は、何時までも〳〵忘れずに居りますわ。」

「私もこんな場合、口にするも端無いが、怪しいまでの胸の亂れ。先刻堤で一眼見た折から、漁

士の娘に似氣ない美しい姿と心に、日頃抱いた事のない心をまで持つやうになりました。加之に危難も去つた一時の氣安さから、船を去るのが心苦しく思はれます。」

「人の噂も七十五日とやら、將軍も何時かは忘れるともなく、貴方の恨みは忘れることでございませう。その時、老父の仇を覘ふ頼りない女が一人佗しく、大江に船住居して貴方の事を思つて居るのを、思ひ出して下さりましたならば、どうぞ單將軍の息、干善の仇を返す前、もう一度、この船をお訪ね下されませ！　干善に仇を返す日は、私の身の亡ぶ日でございます。その前に是非、貴方さまにお願ひ致したい事がございますのです。」

「それはどのやうな儀か存じませぬが、今、お話しては下されまいか。」

「さア、今は……申しあげる機會でございません。」

月はぽつかりと、低い東の山端に上つて、キラ〳〵と江に光の影を刻みながら、船上の男女の姿を鮮かに描き出した。

「おう、月も上つたやうだ。餘り長く居るも、反つて迷惑を深くするやうなもの、船を岸へ寄せて頂き、今夜は足の續く限り、月光を頼り、京都への道を辿らう。」

「長くお留め申したいは山々でございますが、先方の遠い旅路、お別れの盃を一杯なと、差しあ

げる事にいたしませう。幸ひ今宵は老父の飲代に購つて置たものがございますから冷くなつた老父の靈を弔ふ爲め、一つには貴方の門出に幸多いやう、志ばかりを汲んで行つて頂きたう存じます。」

「忝ふございます。お志、遠慮なく頂戴をいたしませう。」

景陽と倩英は、二人ながら前途の暗い、頼りない身を寄り添ふやうに冷い酒の一二杯を汲み交した。

「倩英どの。」男は急に改まつた聲で呼びかけてから「この盃。ほんの詰らぬものではあるが、今日のお禮の印まで收めて置て貰いたい。」と、板の間に紅い木盃を置て「金に代へたならば些細な品であらうが、この盃は私の家へは先祖代々から傳る珍らしい寶の一であつた。今日も妙晉寺の開帳、それを見がてら靜かな裏山で酒でも汲まうと思ひ、此の盃を身につけて出かけて行くと、寺院の門前で黒山の人集り、何であらうかと覗いて見ると、將軍の馬鹿息子、單干善が父の威勢を笠に着て、貴方の父である老漁士に無法な打擲を繰返して居るのだ。附近に澤山の人は居るが、後の祟りを恐れて一人として、その仲に入り、留め立てする者がない。餘りの事に見るに見兼ね、私が仲に割つて入つたのが、此の爭ひの下。大勢の家來と共に劒を拔いて斬り掛つて來

たので、大人氣ないとは思つたが、干善を取つて押へ、聊か手强い仕置を加へてやつた。所が其を根に持つて、將軍府の兵を勵かし、天下の賊でも捕へる大騷動をやり始めたのだ。そんな譯で身には何一つと、外の品は持つて居らない。ただ此の胡蝶盃一つだけである。それに。」と、彼は盃を再び右手に握んで、空の一方を覗むやうに眼を据ゑ「この盃で酒を汲む時。屹度何處ともなく、あれ、あのやうに眞白い胡蝶が二羽、番い離れず飛び出して、盃の酒の香を慕ひよりながら舞ふて居るのが、昔から不思議な盃とし、家の寶として傳へられて來ました。」

「まア。」と、倩英も今更らしく、明い江上、船の廻りを飛び廻つて居る二羽の白い胡蝶を不思議さうに眼で追つて「本統に先刻から何で、今頃蝶が飛んで居る事かと、可怪しく存じて居りました。」

「では、どうぞ此をお收めを願ひたい。」と、景陽はかの女の前に置た。

「いえ、そんな寶を私風情が頂きましても、反つて心配でございますから、決して御氣遣ひなくお持歸りして下さいまし。」

「御辭退する程のものでない。ほんのお禮の印までに……」

「いえ、それは私から致さねばならないのですのに、漁士の娘にそんな盃など、餘りに不釣合で

ございます。」固く辭して手に取らうともしない。

「それでは恁うなされては下さらぬか。私は行方定めぬ旅に赴く身。再び貴女と廻り遇ふまで、どうぞ預つて置て貰ひたい。」

「はい。それなれば易い事ですわ。貴方さまが貴重な品。屹度大切にお預り申します。」

「倩英どの。大變に御厄介をおかけ致した。」

彼は立ち上つて、櫓を握ぎうとした。

「いえ、もう岸までは譯ないこと。手馴れた私が漕いでまゐりませう。」

月光に背いて、倩英は櫓を握んだ。そして低い拍子を立てながら、岸の汀へと漕ぎ寄つて行く。

二人は、恁うした奇怪な緣から廻り遭つて、亦本意なくも束の間に別れ去つたのである。

七年後の今日生々しい瘡跡

「こんな譯で、今から七年前、楊子江の堤で逢つた危難を救れた倩英とは、會ふ機會もなく、忘れるともなく天下を放浪して歩いたので、今日まで遂に杳として消息を知らなかつたのだ。」と、

當年の張景陽。今では峽西の戰ひに武勳を立て、一躍して副將軍の位置を克ち得た彼は、列座の人たちを見廻しながら語り終つた。

「成程、張將軍にも優しい物語をお持合せでございますな。」と側の參謀格である老武士は相槌を打つた。

「だがその後。昨年の秋であつたが丁度故鄉へ歸る時。あの三家口の邊を船で渡りながら、月夜に遇れた當時を追懷し、倩英の事を一倍と懷しく感じたので、人を派してその行方を求めたが、到頭分らないのだ。行方が分らない許りでなく、在りし當時の蘆の茂み、汀の淺瀨に其と思ふ船が朽ち果てて、半は水底へ沈み傾いて居るではないか。」彼は感慨無量と云ふ樣子で、沈思するやうに低語いた。

「その娘は、什麼したのでございませうか。」

「さア、さつぱりと分らないのであるが、先刻この席へ招かれ、主人どのが見せられた珍しい木盃。これ、これが其の盃であるが、これこそ疑ふ方のない胡蝶盃である。什麼して倩英に渡した盃が、廻り廻つて此家へまゐつたものであらうかと、實はその事も詳しく伺ひたく、最前から由ない長物語りを致した次第である。」

景陽はぷつつりと口を閉ぢると、視線を主人の席へ向けた。

「ははあ。その様な深い由緒のある木盃とも知りませんので、七年前、實は城内の古道具店から買ひ求めて戻つた物でございました。かただ不思議な事は、何時も此の盃で酒を汲むと、何處からともなく二羽の蝶が現れ、俺の身の廻りを飛び廻るのでありました。さても珍しい掘り出し物塗のよいばかりでなく、この盃には斯様な不思議も附き纏つて居るのかと、今日まで理由も知らずに珍重して居りましたのです。」と、主人は夫を手に入れた一通りを述べた。

「そして其の盃の出所に就ては、お訊ねなされなかつたのか？」

「いや、それも半年程後のことであるが、意外な所から分る事になりました。」

「おう、出所が分りましたか。」彼は膝を乗り出すやうにして、主人を凝視した。

一座の者も興ある事に思つて、耳を澄したのである。

「それは三家口附近の山賊の一團を引きあげた時、彼の首領と覺しい者の口から漏れた事であるが、或る日のこと、彼等の數人で、豫てから眼をつけて居つた漁士の娘、美しい女を誘拐をして來たのであつた。山寨に連れ込んでから毎日のやうに責めたけれど、娘は頑として彼等の意に從はない許りでなく、果ては隙を伺ひ、その山寨に火を放ち、危難を遁れやうとさへ計つたので、

かの女は到頭定りきつた徑路である、ある廊へと身を賣られる事になつた。そして固く縛めた女を輿に乗せて、賊徒たちでかきながら山道へと掛つた時、後棒の賊は、輿からたら〳〵と紅い血の草を染めるのを見て吃驚した。早速に垂帷を跳ねて見ると、中には女が舌を嚙んで、がつくりと首は前へ、襟に埋まる程に垂れ下り、もう本統に虫の呼吸である。輿から外へ引きずり出す拍子にその女の懐中からころ〳〵と路傍へ、轉がり出したのが此の木盃で、其が轉々して、儂の買つた古道具商の手にと入つたのである。恁う云ふわけで、この盃の出た路も分りましたが、ただ女が何者からこんな盃を貰つて居つたかが判明しなかつたのでした。」と、主人は長い話を結んだ。

「それは間違ひもなく倩英であらう。死ぬ際までも私との約束を重んじ、この盃を懐中して居つたものと見える。」景陽は撫然として眼をしばたたきながら。

「それにしても、可憐しい心根の女ではないか。」

「珍しい由緣のある盃。この列座の方たちの間を一巡して頂かうか。」

「成程、それも興ある趣向ぢや。是非さう願ひたいものである。」

一座の懇望。主人も、景陽も異議のあらう譯もないので、胡蝶盃で次から次と、酒は汲み廻

されて行つた。

丁度、それが景陽の手に廻つて來た時、彼は月夜の船を思ひ、倩英の姿を描き出して、侍婢の酌ぐ酒の盃に滿つるのも知らで、眼に涙を湛え、暗い樹立の深い庭の方を眺めて居つた。ハラハラと酒の雫は卓をぬらした。

「うむ……」呻く叫び聲をあげた。

「あッ、これは御免遊ばしませ！」侍婢は粗忽を詫びながらをろ〳〵聲で云つた。

「倩英だッ。」彼は直乎と立ち上ると、酒を溢し捨てた盃を握んで、席を離れ、つか〳〵と廊下の方へと出て來た。

「景陽どの、如何なされました？」

「將軍！　什麼遊ばしました？」

後から三四の人が怪訝な顏をして附き從つて來る。

「おう倩英が……、あれ、あそこに參つたではないか。」庭の暗を見透して叫んだ。

「いえ、何も居りませんが……」

席の燈光は、風もないに氣味惡く、はた〳〵とゆらめいて、光が横に流れた。「あッ。」と、席

の人たちは、思はずもその時、聲に出して屹驚した。

それは庭の樹立の内、うつすりと光りが射して、そこには美しい、若い女の姿が浮みあがるやうに描き出されて居つた。そして細い手をあげて、景陽を手招ぐやうにしたのだ。

「おう、久しい事であつたな。」景陽は廊下から庭へ躍り下りると「今宵計ずも木盃を手に入れて當時の事を忍び、涙に暮れて居つたのだが、よく參つて呉れた。招かずとも、當年の禮も申さねばならぬ。今、直ぐと其所へ參るであらうぞ。」

彼は樹立を縫つて、影のやうな女の姿を追つて、よろ〳〵と歩いて行く。

白い胡蝶は、身にまつはるやうに女の先に後に、舞ひながら飛んで行くのだ。

「倩英どの！　何所まで私を連れ行く積りであるか。」

景陽は、倩英の影を追ひながら、その邸を出ると、暗い路を、城外の小丘の方へとふら〳〵と足を運んだのである。

「倩英どの！」

城門をはづれた小一里の郊外、老松のすく〳〵と空に聳える野原の中、墓地のやうな所へ彼を引き出して來た。

「景陽さま！　私はお遇ひしたうムいました。長い〳〵間、ここで一人貴方さまのお出でをお待ち致して居りました。お預りした胡蝶盃もお返しする事が出きまして、私もホッとしてお別れ申す事が出來ますわ。」

聲は昔と變らないが、淋しい弱い調子が水底か地の中から漏るやうだ。

「私も貴女の事は氣に懸りながら、功名を追ふに心が奪はれ、忘れるともなく忘れて居つた事は全く申し譯がありません。」

「いえ、貴方さまの御出世を知り、私はどのやうに嬉しう存じます事か。」

「今日あるのも、皆あの當時、江を渡して下さつた貴女の情によるもの。私の手で出きます事ならば、どんな事でも致しますから、お仰つて頂きたい。」

「景陽さま！　唯今貴方さまがお居でになつたお城の主人、馬泉生が實は私の仇でございます。あの男が三家口の巡察廳長を勤めて居つた時に、無理から手籠にし、罪のない山賊の一人を其の罪の下に、東門で曝首にいたしました。それは私を生かして置く事の出きないのを知つてあの男は、胸深く劍を刺し通し、此所へ埋めました。がそれは疑れのない立派な證據となるものでございます。どうぞ私の爲めに、この恨みを晴して下さいませ！」

「うむ、そんな深い隱れた犯罪が、あの馬泉生にあつたのか！　屹度この恨は晴して呉れるぞ。」

景陽は力ある聲で、斷乎として言ひ放つた。

恨を抱いて死んだ倩英の骨は生々しく、七年後の今日、傷跡さへ歴々と分る位で、翌る朝、掘り出した時、人々は流石にぞッとしながらも、奇異の感に打たれた。

六月雪物語

韓爺廟の祭

清新の氣天地に溢れた北支那の初夏は、何處を眺めても嫩綠の色が鮮かに萬象を彩つて居る。

九月末から冬枯のやうに雪に閉されて、青いもの一つ見ることの出來ない此の地方が、暗い結氷期から解放され、丘に畑に山に河に、あわただしく過ぎる短い春の訪れから六月へかけて、一時にぱッと明るい綠の世界になるのだ。

四方をとりまく、低い、なだらかな茶褐色の山も薄綠に煙つて、灰色の城壁、龍のやうに蟠る

堤の楊柳の根株にさへ新しい芽が吹いて、畑と云ふ畑は一面高粱の若葉がすく〳〵と頭を並べて見渡す限り綠の敷物を延べたと同じである。

外に出ても居に居ても、本當にすが〳〵しい清鮮な氣持がして、すべてのものの躍動する喜びの呼吸づかひを感じることが出來るやうな心持になる。

夏の厄介な代物である蠅の唸り聲が、生れ變つた天井裏や窓に聞え始めてくる。そして炕の割目からは、才槌のやうな、小さい針を持つた頭の南京蟲が、素早く走り出してはすぐと姿を隱してしまふ。

この頃になると、城壁の鼓樓の下で、半裸體の乞食たちが、着てゐる上衣を脱いでは、寒い冬の間攻められた虱の整理をしてゐるのをよく見受ける。

生れ變つて新しく生きやうとする準備が大陸の初夏に整へられるのである。

あらゆるものが人の心を外へ外へと誘ふ時で、村や城內にある廟の開帳もぼつ〳〵始められる噂が傳はり、今日は關帝廟の緣日、明日は平頂山の娘々廟の開帳だなどと村道をぞろ〳〵と、着飾つた村人たちの往來が繁く、驢馬や轎車も絶えず續いて行く。

その日は丁度、蓋平城外にある韓爺廟の祭日であつた。

私と仲のよい劉漢英が、わざ〳〵カマボコ型の驢車まで用意して誘ひに來てくれたので、晴れた初夏の朝、綠に燃える野原を突切る一本道を、その城壁の方へと二人して、驢車に坐し、凸凹の烈しい所をごつとん〳〵と怒長にゆられて行つた。

「劉さん！　韓爺廟と云ふのは、韓退之でも祀つてあるのかね？」と、私は彼に訊ねて見た。

「いえ」と、彼は微笑しながら「韓退之ではありません。韓爺廟と云ふのは、ここだけ祀つてある土地の人で、恐らく他にはございますまい。これに就て、昔から不思議な傳說があるのです。」

「ほう、それは聽かして貰ひたいね。」と、私は興あることに思つて、彼を促した。

「ええ、では、その韓爺廟に行きつくまで、車上でお話してまゐりませう。」と、彼は廟にまつはる不思議な『六月雪物語』を始めたのである。

暴主の酷政

「明朝の中頃、この地方の城主に、金忠楊と云ふ、武人あがりの亂暴な男が居りました。主が主なので、その一族郎黨、祿な家來は一人も居りません。百姓などは、まるで蟲けら同然に考へてゐるので、些細な事でも、彼等の意に逆つたが最期、斬捨て御免は云ふまでもなく、その一家

の財を浚收してしまふなど、思ふさまに勝手な振舞を繰返して居りました。泣く兒と地頭には勝てぬ」と云ふ、お國の諺語にもある通り、百姓たちは怨を呑んでは、彼等のしたい放題に任せ、一から十まで唯々として泣寢入りに終つてゐました。ところが、人間と云ふものは、だん〳〵と增長するもので、城主金忠楊の我儘は日一日と募つて行きまして、あらゆる貪澤な所爲をしましたので、幾ら城主でも、さう〳〵は金が續きません。そこで暴虐な城主の常套手段である上納稅の增額を、八十六部落の百姓たちに申渡したのでした。それも今までに增徵してゐないなら兎に角、さん〳〵に絞り取れるだけは、いろ〳〵の名目で新しい稅を作へ、百姓たちから上納さしてゐたので、幾ら蟲けら同然に扱はれてゐる彼等でも、流石に今度は騷ぎ始めました。それは一番上等な畑の收入を標準として、年貢額を一律に定めるのでして、これによると今までの倍額の稅を上納しなければならなくなるのです。彼等は食ふや食はずで居ながら、なほも祖先傳來の土地を賣つてまで、この無法な稅金を收めることは、何としても耐らないことです。それで彼等の重立つた里長たる二十餘人は、連名で百姓一同に代り、嘆願狀を城主金忠楊の手元まで差出しました。ところが金城主は、不愍と思ひの外、以ての外な百姓どもの行爲と、大層な立腹で、直ぐとその二十餘人の里長たちを召捕へ、嘆願狀もろ共に牢獄へ叩き込んでしまひました。そして一ケ月以內に年貢稅を收めない者は、これらの里長同樣、入牢を申しつけ、嚴罰に處すると言渡したのです。さあこの地方の騷動は一通りでありません。自分たちの代理として嘆願して呉れた部落の有力者は、今も申す通り、有無を云はせないで、獄裡へ繫いでしまひ、虎よりも恐しいと云はれる收稅の役人は、村から村へ、上貢稅の催促をしながら、何の容赦もなく、百姓を責めて廻ります。どうしても上納する力のない者は、水責め、火責めに似てゐる激しい責苦にかけて田地田畑は云ふまでもなく、愛する子供まで賣らして、稅金に換へさせ、上納させやうとするのでした。生きながら地獄の苦しみとはこんなのを云ふのでありませう。」と、劉漢英は、當時の悲慘なさまを想ひ出したらしく、痛ましげに眼を伏せて、更に輝く野面へと視線を移した。

そこには、晴々とした畑一面、靑々とした高粱のをちこち、樂しさうな百姓たちの姿や、鋤を引く牛ののんびりとした景が展開されて、昔の痛しい酷政の跡は見ることも出來なかつた。

彼は再び語りつづけた。

「その頃、城東三里を離れた所に、韓文源と云ふ豪家がありました。昔からの名家で、當主は稀

義人の諫言

な氣骨のある人でした。彼は何事か思ひ決する所があつたと見え、家族一同を集めて云ふのには

『お前たちも、當代の城主金忠楊どのの虐政は、眼に見、耳に聞いて居るであらう。儂も今日までは隨分と辛抱し、耐へて來たのであるが、もう今となつては、多くの百姓の、死よりも苦しい難儀を見てゐるに忍びない。それで、儂はこれから、多くの人たちの爲に、一身を犧牲に供して城主へ諫言を申しあげ、里長二十餘人の御赦免と、此度の年貢增稅の御取止めをお願ひする積りである。もしも幸ひに儂の言葉が容れられたなら、此の上もない喜びであるが、不幸にして却つて儂が城主のお怒を買へば、どのやうな最後にならうも知れぬ。しかし之は長い間、儂が考へに考へた揚句であるから、決して無謀の擧として、止め立てはして呉れるな。儂の死は覺悟の上だお前たちに別れの言葉を述べて、思ひ殘す事のないやうにしてから、老先短い餘生を、あの憐れな人たちの爲めに捧げて見たいと思ふのである。』

彼は決心の程を詳しく語つたのでした。座に居る一同、ただ面を見合して、この悲壯な韓文源の態度に、胸を打たれぬ者はありません。日頃彼の氣質を知つてゐる人達ですから、誰一人として、それを止めやうとする者もありませんでした。そこで彼は、暴虐な金城主を相手に、百姓の味方となつて、たつた一人で、諫告狀を懷中にし、城主の館へと出頭しました。他ならぬ、土地

で一二を爭ふ豪家韓文源の事故、城主は何事であらうかと彼を見見し、對面をする事になりました。それから彼の態度、金城主を前に縷々數萬言、肺腑を刳り、血を吐く思ひで、熱涙を絞つて城主が下僚の酷政を責め、增稅の不都合から百姓の難儀を救つて呉れるやうに申立てました。そして彼の願意が聽き屆けられない時は、死しても此の座は一寸も動かじと云ひ終つたのです。金城主も最初は、彼の壯語に氣を呑まれて居りましたが、性來の暴虐、正義を聽く耳を持つて居りませんので、

『其方は余に諫言致さうとか。余は余の百姓から年貢を取り立つるに、何で其方の言葉を用ひやう。退れッ！　其方が唯今の暴言に對しては、追つて沙汰致すであらうぞ。』

城主は烈しい憤怒の眼を据ゑ彼を睨みつけましたが、彼は、これですご〳〵と引退る男ではありません。

『いや退りません。儂の言葉の通らぬ中は、此の座を一寸たりとも動きません。』

韓文源は嚴として言ひ放ちました。

ここまで話した時、劉漢英の頰には紅い血が上つて、さも愉快さうに見えた。

六月の紅雪

道は凸凹が恐しく烈しいと見え、驢車のゆれるのが氣持の悪い程であつたが、彼はそんな事は意に介しない風で、一語は一語と話に熱を帶びて來た。

「金城主は、韓文源のこの言葉を聞くと、カツと怒にのぼせ返り、側の侍者を顧みると『憎い奴は其奴だ。重ね重ね余に言葉返しの上、ただ今の無禮、もう容赦は要らぬ。直ぐと入牢、二三日内に斬罪に處してしまへ。そして彼の一族は當城五十里の外へ追放を命ぜよ。』と、無法な命令を發しました。そこで、挺子でも動かぬと頑張つてゐた韓文源を、十數人の侍者が總掛りでたうとうそこを引きずり出し、監獄へと叩き込んでしまひました。隨分亂暴なことをするものですね。

そしてその翌る日、彼――韓文源を刑場に引出し、斬罪に處さうとしたのでした。丁度六月の或る日で、今頃のことでしたらうが、斬落す首の穴を前に、無理に二人の下役人が高手小手に縛めた彼を押へつけ、今や刑に行はうとすると、どこから飛んで來たか、數百數千の蒼蠅が、彼の首の廻りへ一面にたかつてしまひ、斬首を妨げやうとするのです。斬首人が幾ら追拂つても、跡から跡からと蠅の數は增すばかりです。その中に晴渡つた空が俄にかき曇つて、電光雷鳴、盆を覆

へす大雨が降出しました。さあ、かうなると、役人たちもいい心持はしません。遂に斬罪の期日を延すことになりました。そして誰もこの刑を行ふのを辭退る者ばかりで、一人として斬首人になり手が無くなつたのでした。これを聞いて金城主は更に激しい怒を增し、無理から一人の男を擇び、その任を完うするやうに嚴命しました。その男は、極く役の低い、詰らない者でしたが、流石に情義を辨へてゐると見え、韓文源を刑場へ引出した時、彼の前に跪き、

『韓文源どの、私は此度、金城主からの嚴命で、貴方を斬罪に行はねばならなくなりました。誰とてこの事を行ふに、潔よく思ふものがござりませう。私も貴方の首に刄は當てられません。さうかと云つて城主の仰せ、私として背くことは、主從と誓つた手前、此の上なく心苦しいことで御座います。』と、彼は手を下すに忍びぬ事情を述べて、韓文源の自刎を迫つたのでした。

『よい、お前の云ふことはよく分つた。俺の行く可き道も知つてゐる。』と、やがて文源は縛めを解いて貰ひ、斬罪人の刄を右手に掴むと、諫告狀を口にキツとくはへたまま、さツと頸を、自分から刎ねて死んだのでした。

その日も、午頃から急に空が暗くなり、夜になると、六月半と云ふのに、俄に寒くなつて、綿をちぎつたやうな雪が、片々と降つて來たのです。しかも紅味を帶びた薄氣味の悪い雪の色、

蓋平城の内外は、この不思議な天變に、何事か起らねばよいがと心配を致しました。」

宙に浮く首

「それから毎夜のやうに、諫告狀を口にくはへた韓文源の首が、城主金忠楊の床の上に、頭に、壁に、到る所に現れては、睨みつけてゐるのでした。彼はその度に、氣でも狂つたやうにその首を追廻して、斬りつけましたが、連夜、幻の如く夢の如く宙に浮く韓文源の首のために惱されてさしも暴虐な彼も、十日程して後、自ら振廻した刄の爲めに、果敢なくも無慙な死を遂げて了ひました。さあ、之を聞いた役人たちは怖氣を震つて、二十餘人の里長の赦免を行ひ、增稅も沙汰止みとなりました。そしてその後に來た新しい城主が、更に惡政を革めて行つたのですが、その韓文源の節義に感激した村人たちが、毎年六月に一度、彼を祀つた韓爺廟の開帳を行ふので、それが今日なのです。」と、劉漢英は、長い物語を終つた。

何時か私たちも城外の河原、韓爺廟のある近くへと着いたので、二人は驢車を捨てて、いろ〳〵の物賣り店や大道手品師、猿廻し、太皷叩きの曲藝などの周りに集つた黑山の人を眺めながら、混雜の波にもまれて行つた。

廣い河原。その廟の向ふには野天の舞臺が掛つて、その前にも人の山。弦子に笛、太皷や四ツ竹、胡弓の音にからんで、支那歌劇の一幕『六月雪』の序幕が丁度開かれた所であつた。

晴れた空の下、どこを見ても新緑に包まれた天地に、悠久な氣分をそそる律呂ゆるやかに、舞臺には三四の役者が扮裝して、その廟神である韓文源の節義を、村人の心に新しく吹込まうと演じてゐる。

天地開闢六萬年

片足で六萬年

天地開闢の謂れと言ふと、何處の國でも、途方も無い膽の潰れるやうな大法螺の競べつこです。然し、これからお話しする支那の開闢說は、さすが白髮三千丈の本家だけあつて、ただ〳〵呆れ果る他はありません。まあ聞いて下さい、斯うです。

支那では、あの日月、二十八宿の星辰、及び吾々の地球を、現在の場處に据ゑたのは、估驢蹉吒大仙といふ、文字を見れば、蹉たかりの驢馬の妖精でもありさうな仙人だと云ひます。その通

り此の大仙は、天の帝大三摩多の后が驢馬との間に生んだ子で、一度は捨てられたのを、羅刹婦といふ鬼女が拾ひ上げて、育てたのだと言ひます。

ところが此の子長ずるに及んで仙術の奥儀を究め、しかも夜晝片足で突ツ立つたまま、六萬年もぢツとしてゐました。それをまた六萬年間雲の斷れ目から見てゐた氣長な佛たちが、餘りの辛抱强さに呆れてしまつて、大仙の許まで下りて來て、

「お前は何故そのやうな眞似をして居るか、もう六萬年も經つたではないか？」と訊ねました。

「俺の身には汚れがあります。それを潔める爲に、かう難行苦行をして居るので御座います。」と大仙は答へました。

達磨大師は面壁九年お臀から腐つたと言ひますが、六萬年驚みたいに立つてゐた大仙の片足は化石して、苔でも蒸したことでせう。

此の偉い大仙の後裔から、支那最古の帝磐古氏が出たのだと言ひます。

磐古の生れた頃もまだ天地は混沌として宛然鷄の卵のやうでした。然し、一萬八百年を經る間に、清めるものは上つて天となり、濁れるは澱んで地となりました。磐古は、この一萬八百年の間、日に九度まで姿を變じて、天に上れば神となり、地に下れば聖となつて、ひたすら天地開闢

に力を盡してゐました。此の努力の效あつて、天は日に〳〵一丈づつ高くなり、地はまた日に日に一丈づつ厚くなり、これに連れて、磐古の身長も日に〳〵一丈づつ伸びて行きました。初めの身長を七尺としても、正に十萬八千丈んで七尺の巨人です。

かうして更に一萬八百年は過ぎました。天は愈々高く、地は愈々厚く、磐古は天柱のやうに雲に聳えて、曇り又は雨模樣の時などは、膝から上は見えないといふほどになつてしまひました。そして雲中で斷えずかアんかアんと音のするのは、磐古が左手に鑿を把り、右手に斧を揮つて、日月星辰を製造しては、その位置に懸けてゐる爲でした。

混沌たる南瞻部洲

ところで支那には、もう一つ別の開闢說があります。これは例の十二支に象つたもので、世の始めより世の終りまでを一萬八百年づつ十二代に分ち、この一めぐり十二萬九千六百年を一元と名づけます。天の開けたのは卽ち此の子の時代で、地はこれより一萬八百年を經た丑の時代、人の生れたのは、更に一萬八百年の寅の時代といふことになります。

諸君は東洋史で伏羲氏といふ名を聞いて居られると思ひますが、此の人などは、磐古氏から五

六萬年も後で巳の時代に生れた人君なのです。更に神農、指南車を發明した黄帝、聖賢の堯舜、あの人達は、何れも午の時代に出たのです。そして、吾々の時代もまだ此の午の時代の中にゐるのだ相です。

かうして此の世は、午の殘りに羊、申、酉、戌、亥の五時代、五萬四千年を加へた、約六萬年の後には、一元が濟み、世の終りが來て森羅萬象新たに「立て直し」となる譯です。

それなら天が子に開ける前はどんなであつたかと言ふと支那の學者はこれにお釋迦樣を引つ張つて來て、說明してゐます。

天も地も、また人も無かつた時代には、西方淨土に在します釋迦牟尼佛の大光明が赫燿として天が下の四大部洲を照してゐました。世尊、一日天も昏く、地も晦く、命あるもの未だ影も無く形も無く、ただうようよと水火の裡に蠢くさまをつく〴〵と御覽じて、そゞろに哀愍の心を催されました。そして御弟子の阿難尊者を顧みられて、

「これ、阿難よ。お前の目にはあの四大部洲の有樣が見ゆるか如何ぢや。」と仰せられました。阿難は頭を低れて、

「私は愚かな者で御座いまして、四大部洲の謂れもよく存じて居りませぬ。」と答へました。

次いで世尊は他の御弟子達に同じやうに訊ねられましたが、みな異口同音に「存じませぬ。」と答へました。そこで世尊は玉音朗らかに、かう說き出されました。

「皆の者よく見るがよい。それ天が下の四大部洲と謂へば、あの東に見ゆる東勝神洲、西に見ゆる西牛賀洲、南の南瞻部洲、北の北倶盧洲、この四つぢや。この中他の三洲には天地の別はあるが、南瞻部洲のみは、未だ混沌として荒れたがままに殘つて居るのぢや。」

觀音大士はそれを聞かれて、大衆の列より進み出で、

「この儀で御座いますれば、御弟子の一人を南瞻部洲へお遣はしになつて、天地を開き、御佛の敎へをお布きになられては如何で御座います。」と言ひました。世尊は頷かれて、

「汝の申すところは理りぢや。さりながらこの大役を勤むる者は誰であらうぞ。」

その時、一人の菩薩が合掌して、につこりと微笑みました。これは毘多崩娑那といふ、鼻くたぐ食のやうな名の菩薩でした。世尊はその菩薩を御覽になつて、

「汝が南瞻部洲に下らうず、つもりか。」と訊ねられました。菩薩は、

「左樣で御座います。ただ氣づかひで御座いますのは、南瞻部洲の天地を開く折に、その濁りに染みましたならば、それが長へに淨められぬ惡業とならうかと思はれます。それは、如何いたし

た物で御座いませう。」

世尊は捲髪の頭を振られて、

「その氣づかひは無用ぢや。天を開き地を創むることは、またと有るまじい動ぢや、されば、汝の身に何の汚れが殘らうぞ。喜ばしや、汝の力によつて、南贍部洲は初めて天地の區別を生じ、萬物初めて芽生ゆることぢや。まづ天に火を生じ、地に水を生じ、更に天に木を生じ、再び地に金を生じ、次に天に土を生じやう。それらの氣が交つて一となる折、汝を呼び戻してとらせうぞ。」と說かれました。

角の生えた怪人

そこで、菩薩は、世尊を初め諸ろの佛達に暇を告げて、一朶の祥雲に駕し、遙か南贍部洲へ赴きました。

さるほどに、菩薩、雲の上より小手をかざして眺めてあれば、聞きしにまさる荒れやうです。雲とも灰とも墨ともつかぬ物が天地の分ちも無く擴がつて、ただ混沌たる光景です。

毘多崩娑那は暫らく眺めてゐましたが、やがて雲の上から、獅子のやうに吼えたと思ふと、ひ

らりと身を跳らせて南贍部洲へ飛び下りました。

と見れば、その姿は今までの菩薩ではありません。正にこれ桃果のやうな圓く大きな球で、それら天地混沌たる中を、上に下にころ〳〵轉げ廻つて、七七四十九轉の後に、この團子はパツクリと割れ、中から人の容のものが現れました。

その身長三丈六尺、頭には筍の如き角を戴き、眼は百練の鏡を懸けたる如く、口には銀の牙を食ひそらせ、全身熊のやうなる毛を負うて、さも怖しげなる行相で、おぢやつたと申します。

さうでせう天地開闢の大業をこれから始める大任を有つて來たのですから、慈悲忍辱の佛樣の姿では、とても出來さうもありません。

さて此の怪人は、やがて呀と力聲を出して、丸く屈んでゐた身を伸し、すツくと立ち上ると、あら不思議や、それに連れて、清める氣は見る〳〵高く上り、濁れる氣は見る〳〵低く下つて、天地豁然として分れました。

それでもまだ天地が厚く、くツついてゐる處があると、此の怪人は、左手に鑿を把り、右手に斧を揮つて、かアんかアんと切り開きました。かうして凄じい怪力で、天地愈々開け、やがて此の世の初めが來ました。

この間釋迦牟尼佛は、西方淨土にお在まして、菩薩の奮闘振りを見て居られましたが、側らの觀音大士を顧られて、

「毘多崩娑那の仕事も、もう果てたやうぢや。汝、今より天神の姿となつて南贍部洲に向ひ、ひそかに淨瓶の甘露を娑那の身に注ぎかけて、汚れを拭うてやるがよからうぞ。」と宣ひました。

大士は仰せを承はつて、天神の姿と變じ、急ぎ南贍部洲に赴いて、娑那の頭へ、淨瓶の水をたら〳〵と注ぎかけました。そして、凛々と鳴る音聲で、

「汝、此の土に降つてより、早や二萬年、功成り、行も滿ちた。今こそ西方淨土に歸る時ぢや。」

と說かれました。

此の言が終るか終らぬに、娑那は二萬年前と同じ獅子吼を放つて、大地へ沈むと見るや、再び桃果の形となり、觀音大士の淨瓶の中へ吸ひこまれました。そして西方淨土へ戻つて、もとの菩薩の姿に戻りました。この娑那の現身こそ第一の王、磐古氏であつたのだ相です。

白毛の天皇氏

磐古が西方淨土へ戻つてより南贍部洲は、天地陰陽の氣自然と相交つて、萬物を生みましたが

その中、子、丑を經、寅の代に、日月の氣が凝つて、一つの大なる石球となりました。その石球は、更に十二の小い球と割れ、その一つ〳〵より、人の容の生物が生れ出ました。

その數すべて十三、その中、長三丈五尺に及び、全身白毛に被はれ、色雪の如く白く、唇朱を塗れる如く紅である天皇氏が、十二の兄弟より敬はれて、首長となり、磐古の後をついで、四大部洲の君となりました。けれど、此の頃は未だ誰も名のある者は無く、住む處も勝手氣ままでした。そして四大部洲には、圓い球がぽかり〳〵と天より降り、もくり〳〵と地より湧き出て、それらが何れも人の容に變りました。

その後一萬八千年にして、とある山中より赫耀たる金光を放ち、五色の祥雲の棚びく裡に、蓮華の如き物が現れ、一つ〳〵に十一の孔があつて、それがやがてひら〳〵地上に落ちて來ると見れば、皆人の姿と變りました。その人の中に、全身漆の如く黑く、長三丈四尺にとどく者がありました。これが地皇氏で、天皇氏に次ぎ、天下を治むることとなりました。諸君も知つてゐらる三皇、伏羲、神農、黃帝の生れたのは、これよりも遙かに後の世であつたと言ふことです。

頭の何處が如何なれば斯んな途徹も無い空想が生れるのでせう？　以上は明の鍾伯敬といふ人の「開闢演義」によつてお話したものです。それから、支那の廣州始興縣城を去る南十三里の處

に、天地開闢の祖磐古氏の墓といふのがある相で「これによつても、磐古氏が實在の人格であつた事は疑ひの餘地は無い。」と、主張する呑氣な村夫子もあるといふ話です。

土匪物語

一

土匪と云ふのは、支那社會に於ける特殊な產物であつて、社會上から觀ると、頗る重大な意味を有し、表面はいかにも一種の墮落した遊民階級には過ぎないが、之を詳察すると、二つの意義を有することを知る。

その一つは掠奪を職業とすること、他の一つは或る階級鬪爭に於ける表現とみることで、近來支那の政治の腐敗は極點に達し、その經濟狀態の劣惡退下は、ここに語るまでもない。南京の新都に置かれた國民政府のことは暫く置いて、從來の國家は人民の保護に對する機能を全く喪失して居り、また一般の國民、その大多數は求めるに職無く、飢寒に迫られると云ふ位置にをかれて居る所から、彼等は止むを得ず相互に團結し、土匪と成つた。何れも義賊の誇りを持し、財產を

平等に分配することを標榜して居る。支那人もこの點は、土匪が强盜とは異なる特徵であるのを認めて居るのだ。

一體、これら土匪が、どうして支那に發生したかと云ふと、それは云ふ迄もなく支那の社會が病態である表現であつて、その眞相に不明の徒は、唯單に道德が弛緩し、頽廢し、淪亡したことを嘆じて居る。

このことは社會が重態である結果であつて決して原因ではない。然らば支那社會の病源はどこにあるか。換言すれば土匪が發生した根源は那邊に在るか。

その主因としては、封建勢力の分裂と再發生とが云はれて居る。

封建制度がもしも分裂をすることなく、充分に發達を遂げたならば、その歷史的使命を盡して後、自然に崩壞し、滅亡に歸することは當然であるが、支那に於ける封建制度は分裂作用を旺んに繰返し、互ひに鬪爭し、充分の發達とその成果を見る暇なくして、反つてその勢力が再發生の惡現象を呈する奇觀を呈した。

一個の軍閥が沒落して後、分れて幾多の小軍閥と成り、更にそれが成長するにつれ、また分れて小軍閥を形成すると云ふ分裂作用は、綿續して不斷の結果、時局は日に〳〵複雜混沌に趣き生

產の要素は與に隔離して行くと云ふことになつた。

資本の都市集中は、土地と自然とを利用するの方法無く、工廠の休業等が續出して、勞働力はその生產作用を失ひ、分散の形勢を誘致した。一部分は都市に向つて、更に人口過剩の怪現象を致し、その結果、勞銀の低落、失業の激增、勞働者の質惡の變化を發生するに到つたので、今のやうな道德淪亡の叫びをきく狀態に陷つたのである。

封建制度の分裂が、既に土匪發生の主要原因であることは云ふ迄もないが、社會環境の不良であることも副因であつて、人の破壞に趨るのは、決して自身に出づる者は尠く、社會環境の如何に在るのが普通である。

人の品性は元來、先天的影響を受くるのは少く、後天的影響を受くるのが多いのであつて、いかに善良の人でも不良な社會環境に身を處したならば、不良性を帶びることは免れ得ない。孟母三遷の理も卽ちここに在るわけで、この理を明らかにしない者は、常に土匪の發生に就て、その咎を土匪自身に歸するものがある。それは社會に缺くる所があつて、社會自らにそれ等を造りつつあることを知らないので、近頃、支那に於ても、一人の土匪を殺す時は、社會全體がその痛苦を感ず可きだ。國家が土匪の發生するやうな社會を造りながら、之を殺して遺さずと云ふの

は、民を網するに同じであると、叫ばれるに到つた。

二

土匪の鬪爭手段は頗る巧妙を極めて、その手段も種々であるが、之等に對抗する爲、支那には澤山な秘密結社が生れて居る。

乾隆年間、廣東の土匪を討伐する目的のために組織された湖南義勇隊。これが解散の憂目にあつてから、有名な秘密結社——哥老會を組織するに到つた。

この結社は、政治方面にもたび〳〵利用されて居るので知れて居るが、その性質は青帮や紅帮と同じで、後に黑帮と白帮に分れ、掠奪强盜を專業とするやうに變つてから、一般は土匪の團體と視て居る。

みいら採りが、みいらとなつたわけだ。

この黑白帮の元である哥老會——湖南義勇隊と同じ目的、土匪の被害を避けるために組織された秘密結社が青帮と紅帮である。

前者が討伐を目的とする積極的であるに引き變へ、後者は土匪と連絡をとつて、その害を避け

やうと努めた消極的團體である。

その昔、楊子江兩岸に產出する米は、必ず運河で北京へと運搬して來たが、その流域が土匪の猖獗、勢力範圍で、時の政府も手の下しやうがないほど變幻出沒して害を加へた。

そこで一般の運搬工人が土匪と渡りをつけ、連絡を取り、青帮と呼ぶ秘密結社を組織し、互ひに難を避け、利を計つた。後にそれらが紅帮と變つたが、最初の目的は土匪の害を避けるために楊子江を上下する運搬人夫や船頭が組織した團體であつたが、いつか不良の徒が多く混入し、職業的利益を謀る根本の精神を失ひ、土匪と同じ掠奪を肆にする秘密結社と變つて了つた。

支那の秘密結社には、このやうな職業的のと、外に宗教的に團結した白蓮教、その教系である滑縣の震卦教、山東の坎卦教、大乘教、金丹八卦教、青縣の義和門教、河南の如意門教、清門教、白陽教、景州の離卦教、故城縣の義和門教などがあつた。

白蓮教の分裂したのに、山東の大刀會、小刀會、それから義和團事件を惹起して八卦教の變態である義和團。これにも乾字拳、坎字拳、離字、震字……等々、多くの分派がある。

次に清初、楊如が教主となつて、儒佛道三教の大義を採り、正心修身克己復禮を宗旨とし、河南直隷山東の三省に發達し、頗る勢力のあつた秘密結社で、馬賊たちが多く信奉した在理教と云

ふのがある。

何れにしても、支那で秘密結社の多いのは、山東河南兩省で次は直隷山西である。

山東省だけで、大刀會、小刀會、紅沙會、黃沙會、紅櫻會、焦櫻會、紅旗會、白旗會、紅槍會、河南省には、紅槍會、黃道門、黃教會、天理教、白蓮教、紅槍會、八卦教、劉義會、紅燈會などがある。

外に政治的秘密結社として、三合會（天地會とも云はれる）があり、これは清水會、匕首會、雙刀會の三派に分れ、相互扶助を宗旨とし、廣東廣西江西福建等の南支那に旺んで、孫逸仙も革命には、この三合會の力を借りた結果、あれまでの働きを示し得たわけで此度の國民政府にとつては、有り難い結社であらう。

秘密結社に就ては、土匪と別にし、また詳しく書いてみたいと考へるが、丁度、土匪に對抗する爲めに組織される職業的結社のことから、思はずも枝道に入つたわけであつた。

これら職業的秘密結社が、何で土匪の被害をかやうに恐れるかと云ふと、彼等がいかにも組織的巧妙な手段に依て、その目的を達するからである。

その闘爭手段として、直接に富豪の邸宅へ侵入し、あらゆる財物を掠奪し、場合により、豫定

の金額に達しないと、人質を拉して行く、これを梆票と呼ぶ、彼等の常套手段だ。

それから楊子江の上流と四川地方の土匪は、一般の旅客から安くない通行税を公然と徴收して居る。吉林地方でも土地の狀態に按じて、土匪が土地税を賦課して居る。

もしもこれらを拒み、官憲へ密告でもすると、一身一家許りでなく、時とすると一村を襲ひ、燒き拂ふ殘虐位はやり兼ねない。地方官も多く、知つて知らぬ振で居るし、官匪それ〴〵に微妙な連絡もついて居るのだ。

更に土匪に依ては、旅客が往來する要所に待ちうけて、財物一切を掠奪し、少し進んで居る彼等、殊に港や都市に住む連中は、阿片や鹽、その他の專賣品の密賣を職業として居る。

彼等が目的意識は極めて不純粹なものではあるが、種々な表面に現れる行爲を歸納してみれば生活し能はない、極めて貧窮な人民であつて、土豪劣紳の壓迫に堪へきれず、その父母妻子を棄て、相共に集團し、人の財物を强奪するを業とするやうに變つたのだ。しかもその生活は、また困苦で、危險であるから、土匪自身としても、その職を樂しみとはして居らない。ただ飢寒の迫る所、餘儀なくこの道へ出でたのに過ぎない。

三

かうした土匪の內部組織を調べてみると、その團體の大小に論なく、均しく一人の頭目が有つて、部下をみな乾兒と呼んで居る。

頭目は絕對的な專制權を有して、その資格は武力を標準とし射擊、騎馬、打拳術などに精通のものを推して居るが、一般關係は平等で、尊卑を分たない。交情は頗る厚く、利益分配は株式會社の組織に似てゐるのが多い。一挺の銃と各人は一株の所有主で、銃器の無いものは一株主、所有者は二株主と云ふわけで、それ〴〵配當に預る。

彼等は外に對し不道德な行爲をして居るが、對內的には極めて嚴格な規律が有り、仁義を尙ぶ風さへ存し、決して各自が欺騙し、侵すことをしない。加之も各自の土匪團體間に連絡があつて相互扶助を謀つて居る。

一方に派探と云ふ者を四方へ出し、警察や官場の壓迫を未然に防ぎ、富豪の狀況と擧動を逐一探悉してゐるのは驚く可きことである。

甬地大嵐山の土匪などは、共和軍と自稱し、小國家を組織し公然と附近町村へ佈告を發して居

る位だ。

これら匪徒の將來はどうなるか、現在の支那としては未だ疑問の裡に在るが、曲りなりにも國民政府は樹立されたことであるし、彼等を農工に還元し、正當な職業を營み得るやうにしない限り、反つて激烈な階級闘爭の先鋒に化せしめる怖れがあり、社會をして一層に恐怖紛亂へ導くことは免れない。之は要するに、討伐の一事を以て、彼等を删除することの出きない反證である。

此度の新政府なども、この點へ留意し、先づ社會環境の改善と云ふことを力說してゐるが、幾ら口を大にして、精神的革命を叫んでみても、土匪となるより外に生活し得ない彼等の多くには馬耳東風である。

名畫の怪

吃又の芝居に、描ける虎の拔け出して、附近の田畑を荒すのを、再び書き消す一幕があるが、昔から名家の描き、名工の彫むだ作物には、多くの奇怪な話が語り繼がれて居る。

自分の居る房州にも、左甚五郎の作物が遺されて居つて、あちこちに在る遺物と共に、不思議

な傳說が殘つて居る。

清澄山の珍寶——甚五郎の彫んだ牛が、その寺院の失火の時に、山麓の百姓家の井戸端で、水を飲んで居るのを見かけ、其の家の人が、不審に思つて、側に寄ると、ぱたりとうづくまつて了ひ、矢張お山の木の牛であつたなどと謂れて居る。

これは支那の臨淸地方の事であつた。

崔秀才と云ふ貧乏な學者が居つて、未だに仕官もせず、牆も家も壞れたままの所に住んで居つた。

或る朝のこと、露の置く庭の草の上を白斑のある黑い馬が切りに跳ね廻つて居つた。燒き切つたやうに散つた尾が風に流れて、思ふ儘に崔生の庭を荒して、飛び廻つて居る。

崔生は憎い奴めと考へて、馬を追ひ拂ふて了つた。

すると、その晩の事である。

また何所から來たか、今朝の馬が現れた。

「よし〳〵、それでは飼主には氣の毒であるが、この馬を借りて、遠い山西の友を久し振りに訪れて見やう。」と、その夜は馬をその儘に留めて置いた。

翌る朝、その馬に鞍を置いて、家人には呉々も、馬の持主が來たならば、陝西へ行つたことを話して呉れ、遠路で行くに馬もない折柄、幸ひにもまぐれ馬が見えたので、お借りして行つたと虫のいい事を言ひ置いて旅立ちをした。

崔生は思はぬ所から、馬を得て、一路山西を志して急いだが、いや其の馬の早いこと、十里や二十里は轆轤の間に飛んで行つた。

驛路の宿、乘つて居る崔生の方が疲れて了ひ、馬は一向に平氣で居つた。加之に別に草や大豆を喰べやうとする氣振も見えなかつた。病氣ではないかと考へたが、馬は同じく、元氣で、走り續けた。

十日路もかかるであらうかと心配した道中を、僅か二日足らずで、山西の友の家へ着いた。

それから二三日後の事である。

友と二人で、馬上手綱をくつて、街へ遊びに出掛けた時であつた。

崔生に遇ふ人々の全てが、異口同音にその馬の勝れて居るのを稱讃をした。

何時か、この駿馬のことが、晉王の耳に入つたので、直ぐさま、崔生の宿へ使者が立てられて價は何程でもよいから、譲り呉れるやうに申し渡された。

群雄割據の折柄、晉王はこの地方で、生殺與奪の權を握つて居る君主に等しき位置に居つた。本來なら、一文の金も支拂はずに、沒收をされても、一言の返す言葉も出きぬ譯であつた。それが、此のやうに丁重に使者を立てての頼みである。

さあ困つた事が出態して了つた。

今この場合、晉王の頼みを拒ける事は差し支へないが、その後の祟りが恐しかつた。さうかと言つて、馬の持主が尋ねて來た時に、何と言つて、その譯を話さう。

崔生は確かな返事もしないで、晉王からの催促を、明日、明後日と云ふ風に、言ひ延ばして家からの返辭を待つて居つた。

晉王からの使者は毎日、二度三度と、丁重に頼んで來た。もし嚴重な申し渡しを受ければ、馬を走らして、逃げられる所まで、監視の眼を偸んで逃げる積りで居つた。

然し、晉王の使者は一向に腹も立てず、一日延しにして、既に半年からになる今日まで、根氣よく通つて來て居る。

崔生は、今まで馬の持主から何も言ふて來ぬ所を見れば、聊か安心してよい。それではと、晉王の望み通り、八百銀の大金で賣り渡すことを承諾をした。

その馬が晉王府へ賣られてから、餘程後の事であつた。

晉王は、多くの軍官を率ゐて、臨淸地方へと、急に出發する要事が出きた。

丁度、馬を賣つた崔生の家の近くへ來ると、乘つて居る晉王を振り落して、その隣家へと、馬は逃げ込んで了つた。

「それッ。」と、言ふので、多くの兵士が、その曾家へ入つて行つたが、その馬は居らないで、壁には有名なる趙子昂の描いた馬の一軸が掛けてあつた。

毛色と言ひ、尾と云ひ、晉王の馬に少しも違はなかつた。

閻魔化物往來

十王殿

閻魔王が嫁を世話したと云ふお話。

朱小明の家で、同じ年頃の血氣旺んな若者たち、盃の數が重なつて、醉が廻つてくると、拳や麻雀もさつぱり面白くなくなつて來た。

そこで誰が云ひ出すとなくも、ここ陵陽城から一里東、原中にある破廟、十王殿に行き、膽玉試しをしやうではないかと云ふ相談が纏つたのだ。

籤引きの結果は、主人の朱小明が眞先に出かけることになり、まだ膚寒い夜風に醉顏を吹かせながら、眞暗な外へと飛出した。

街道は人ッ子一人通らぬほど、夜も更けて居るので、それを切れた野原の一本道。星光りを賴りに生ひ茂る枯草、雜草の根を踏みしだき、志す十王殿のある方角へと歩いた。

時折ざわ〳〵と枯草を渡る風の音さへ、薄氣味惡い淋しさを感ずるのに、行けども行けども原ばかり、中には肩を越す位に草の茂つて居る所もあつた。

小半刻は過ぎたであらう?!

漸くの思ひで、破れた人の住まぬ十王殿。傾いた山門、ぬら〳〵と苔の蒸した石階、四五段を登つて、凸凹の烈しい石磚を踏んで、眞黑な奥へ〳〵と進んだ。

すると閻魔廟のある左手の方から、ぼ――と滲み出す薄蒼白い光。ゾッと襟首から背筋へ冷い水を流し込まれたやうに、朱小明はそこに立ち縮んだが、ヂッと眼を据えて透したが、何も變つたことがあるわけでなく、ただ行手の閻魔廟がうつすりと霞んで、暗に描き出されて居るのだ。

「あの蒼白い光は、一帶何なのだらうか?!」

怪しいことだとは考へたが、臆する心を締めて、づか〳〵とその廟へ近よつた。

ガタりと、廟の扉は、彼の手が觸れるか觸れないのに、不思議にもギーと兩方へ開いてしまつた。

「おや〳〵これはいよ〳〵可怪しいぞ。」

彼の心の內、四邊に氣を配りながら廟の中へ足を踏み入れると、蜘蛛の巢が一面、顏と云はず手と云はず、氣味惡く搦みついてくるのだ。

その外は何の變つたこともない。

ただどこから來るか、蒼白い光がボ――と滲むやうに、表面の壇上、高く飾つてある閻魔像を照し出して居る。

壇下に祭る赤鬼青鬼もそのままに、鬼怪な像の十幾つが、暗に浮くやうに光つて見える。

朱小明はつツと突如、閻魔像の下へ歩み寄ると、翠色の顏、赤い髯、恐ろしい眼で睨み据えて居る姿を見あげながら、

「閻魔王! 今夜は酒興の上から甚だ相濟まぬことだが、拙者の宅へ背負ふてまゐる。無禮は幾

重にもお許し下さい! 迷惑なことであらうが、今夜は拙者に負つて來て貰ひたいものだ。世間では化け閻魔の、やれ何のと申して居る位だから、拙者がただ今、申すこともお分りであらうが今夜は一つ拙者を困らせるやうな事をしないで呉れ。」

人に物云ふやうに話しかけた。

小明は、さう云ひながら閻魔の面、チツと見詰めて居ると、ニヤリと笑つたやうだ。

ゾクリとするやうな恐怖が、滿身を襲つたが、氣丈な彼、壇へ足を踏みかけると、づる〳〵と閻魔の像を床へ引きずり下した。

その時。ぱツと薄蒼白い光は消えて、四邊は鼻を摘まれても分らない眞暗闇と變り、どこともなく、梟の鳴くやうな聲で物凄く、

「小僧ツ、待てツ。」

「小僧……小僧とは拙者のことか?!」

筒抜けるやうな大聲、小明は顫えながら暗に眼をすえて訊ね返した。

「さうだ。小僧とはお前のことだ。今夜、俺はお前の家へ行つてやるが、什麼だ? 小僧、酒を鰐腹飲ませるか?!」

「お易いこと！　丁度友だち六人と酒宴の最中だから、酒が飲みたければ幾らでも飲ましてあげやう！」と、暗闇で化物に逆ふことの劍呑さを思ひ、先方の意を迎へた。

「さうか！　ではお前と一緒にまゐらう。肩を借せ！」

朱小明がくるりと背を飜すと、づしりと重い閻魔の像が負ひかかつて來た。

「脚下が危い暗闇だから、餘り重くならないで呉れ！」

彼は案外に氣が落ちついて、不安や恐怖よりは、一時も早く閻魔像を背負つて、家へ歸り、待ちあぐねて居る六人の友だちの鼻を明してやりたいと希むだ。

山門から石段も夢中のやう、よろ〳〵と野原道、一生懸命に走るやうに歩いた。

丁度、その原の半ばも來たと思ふ頃、急にどうしたわけか、背中の閻魔が大石のやうに重く、地面から生えた立樹と同じに少しも動かなくなつて了つた。

これには流石の朱小明も吃驚した。

大碗酒

「什麼して動かぬのか?!」

背中の閻魔像を振返つて、訊ねかけた。

「小僧ッ、俺に飲ませるだけの酒があるかな?」貧乏臭い小明の姿から、彼の家の財政狀態を怪しみ出し、不安になつたと見える。

「それなら懸念に及ばぬのだ。喰ふ米にこと缺いても、酒ばかりは七つの大壺に一杯ある。幾ら大酒飲みだとて、まさか大壺一つを一晩には空けられまい。」

「さうか！　それでは參らう！」

現金なもので、また背中の閻魔は輕くなつた。

寒い冬の終り、しかも夜半とは云へ、身を切る北風は剃刀のやうに面へ當つたが、小明は汗だく〳〵で、頭からは煙でも出さうだ。

「おう！　小明が歸つてきたぞ。」

彼の門邊に歸りの遲いのを待ちかねて居つた六人の友だち。遙かに街道をよろ〳〵と歸つてくる姿を、月明りに透して眺めると、

「それに本當に閻魔像を背負つて歸つた。」

かや〳〵と迎へられて、彼はその像を背負つたまま、酒宴の居間へと這入つた。

「よく變つたことがなかつたな。」

「化け閻魔などと云はれるものを、この夜中、搗ぎ出して、よく無事で戻られたものだ。」

代る〳〵と世辭やら讃辭、慰さめを浴びせかけるのを尻眼にかけ、小明は先づ閻魔像を枕の上へ、丁重に下した。そして流れる汗を拭きながら、

「變つたことが無いどころか、大變りな、不思議なことがあるのだ。」

「えッ、ど……どんな事があつた？」

一同はぎよッとした樣子で、彼を仰いだ。

「この閻魔王が口を利いたのだよ。」

「まさか！」と、十王殿行きを發言した男。鼻先へ嘲笑を浮べて「幾ら拙者たちが行かなかつたと云へ、そんな出鱈目は止めて貰はうかい。こんな木彫の閻魔が口を利くなんて馬鹿らしい！この開けた世の中にあることかね。」

「いいや、本當に口を利いた。」

「へえ、それは珍しい！　何と云つたのだ？　廟で口を利く位な化け閻魔なら、明いこの座敷でも口の利けぬこともあるまい。そこ許一人の所ばかりでなく、拙者たちの前でも口を利かして貰

ひたい。」

大勢居るので、すつかりと豪い元氣な男は小明を馬鹿にするやうに云つた。

「酒が飲みたいと云つたから、酒を飲ませると申し、ここまで背負つて來たのだ。」

「何ッ？　閻魔が酒を飲みたいと？　あはゝゝゝゝゝ」と、一人が大聲に笑ひ出すと、一同もそれに釣り込まれて、哄笑した。

「では拙者の申すことを虚言だとでも云ふのかな？」ムッとした口調。小明は六人の友だちに向ひ詰りかけた。

「いや僞りと云ふわけではないが、何か?!　そこ許はたぶらかされて居つたものと見える。どこに木彫のこんな閻魔像が酒を呑まうか？　あはゝゝゝゝゝ」と、なほも笑ひ續けた。

一同は、小明を除いて、みな腹を抱へるやうにして、笑ひ轉けた。

「何が可笑しい？　では拙者がこの閻魔王に盃を渡し、酌をしてみるがどうだ？」

かうなると、年が若いだけ、一圖に無氣な調子で强く云ひ張つた。

「これは一段と面白い！　閻魔が酒飲んだ所なんか、今日まで見たことがない。後學のために見せて貰はうかい。」

「よしッ、それでは見せてやる。」

朱小明は、卓の上の小盃・手にとるや、炕の上に居る閻魔像の前、つッと差し出し、

「閻魔王！ 拙者がここで六人を相手の問答、お聴きの通りだ。お約束通り、幾らでも酒はある。充分に飲んで貰ひたい。早速拙者が盃を一つ、どうぞ受けてから、後は自由に傾けて呉れ！」

カラ〳〵と云ふ笑ひ聲。灯がはた〳〵とゆらめいて、天井へ突きぬける位な、物凄い調子を帶びて居る。

はッとして、一同が閻魔の像を見ると、眼は雷光のやう輝き、針を植ゑた髯、血を塗つた朱の口を開けて笑つて居るのだ。

六人の友だち。今まで、馬鹿にした口を叩いて居つた元氣はどこへやら、恐怖に生きた空もなく、ガタ〳〵と顫え始めた。

「どうだ？ 笑ってるではないか?!」

小明は勝ち誇つて、六人の生色ない姿を見廻したが、誰一人として返事する者もない。何れも遁げ腰になつて居る。

「小僧ッ、どうせ飲ませる酒なら、こんな小さな盃でなく、大きな物で呉れ！ その卓にある大

碗が宜しいぞ。」

「うわッ――」と云ふ一人の叫び、悲鳴ともつかない聲をあげると、我さきにと六人の友だち。その室を飛び出し、一散に我が家を指して遁げ出して了つた。

後には化け閻魔と朱小明のただ二人が、殘されることになつた。

地獄盃

木像である閻魔王。何時か急にもく〳〵と動き出し、炕の上を獨りで下りると、卓の側、朱小明と向ひ合ひに腰を下した。

これを見て居つた小明、ただ眼を睜つて吃驚するばかりだ。

「獨りで自由に歩ける位なら、何もこの長い草原道、重い身體で、拙者に背負はれてこなくてもよかりさうなもの。」と、考へて居る。

「では酒を飲まうか?!」

どつかりと構え込んで、大きな碗を右手に、酌するそばから傾け盡した。

「小僧ッ、お前も飲め！」

他人のものだと思つてか、恐ろしく氣前のいいことを云ふ。

それから暫く化け閻魔と朱小明、酌しつ酌されつ、大きな碗のやり取り。

閻魔は大部いける口と見え、綠色の面がほんのりと紅味を帶びた位であるが、もう一壺の酒はあらかた飲み干して居つた。

それに引きかへ、小明はぐでん〳〵に醉拂つて、時折は管を捲いては、性質のよくない酒と見え、閻魔に突掛つて行つた。

閻魔とは云へ、その性體は分らない化物だ。その化物と對酌さへ變つて居るのに、今ではその化物へ管を捲き出したのだから、一層に變つて居る。

「小僧ッ、お前は酒の性質がよくないな。これ位の酒量で管をまく奴があるか。」聊か持て餘し氣味に見える。

「何ッ？　先刻から默つて聞いて居れば、拙者を捕へ、小僧々々とは何だッ？　そこ許だつて、圖體ばかり大きくても、小僧の酒を馳走になるやうなケチな野郎ぢやないか?!」

カラ〳〵と閻魔は高笑ひ。

「成程な！　小僧の申す通りぢやが、今にお前に禮を取らするぞ。」

「拙者は閻魔から禮物などは欲しくないのだ。それよりは地獄見物に連れてまゐれ！」

豪い難題を持ち出したものだ。

「まア、餘りがや〳〵と申すな。折角の酒がうまくないぞ。」

それからは閻魔だけで、殆んど一壺の酒を空にして了つた。

「いや、今夜は思はぬ、うまい酒を飲んだ。またちよい〳〵と邪魔するぞ。」

さう云ふ聲を小明は、微に夢か現のやうに耳元で聞いたやうに思つたが、あとは何もかもサツパリと分らない前後不覺。

ぐつすりと寢込んだ明る朝。太陽が窓の障子高く、あか〳〵と射し込む光に重い頭腦をあげて見る枕元。

そこには昨夜のままに飲み荒された卓の上、殘肴酒盃・狼藉たるさまである。

化け閻魔のことは、夢か現か、自分ながら明白と分らなかつた。が確に二壺の酒はすつかりと空になつて居る。

するとその翌る晩であつた。

卓に倚つて、灯の下。朱小明が獨酌を傾けて居ると、扉の外、とん〳〵と訪ふ人聲。

「遠慮せず、這入つたらよいぞ。」

その聲の終るか終らぬに、のつそりと彼の前、立ち現れたは疑ふ方のない十王殿の閻魔王。

「今夜も飲みにまゐつた。」

「……」小明も、前々夜のことが、夢か現か、明白して居らぬだけ、この姿を見ると思はずも意外に感じた。が獨りで、相手欲しい場合、悅んで迎へたのだ。

「小僧ッ、お前もなか〳〵飲ける口ぢやな。」

「拙者より、そこ許は一帶どれ位飲むかね。」

「左樣さ。一酌十壺かな。」

「一酌十壺？　するとそんな大きな盃が、地獄にはあるのかい？」

「あるとも！　俺だけの用ゐる大盃があるのだ。が人間のお前を相手では、まア此の碗ぐらゐの所で、含滿して置く。」

そこで夜半近くまで、談笑しては酒を汲んで居つた。

朱小明は、すつかりとこの化物の閻魔と意氣投合して、無二の仲よしとなつたのだ。

その晩も何時歸るともなく、閻魔王は彼が醉倒れて、ぐつすりと寢込んで居る隙に、何時か姿

を消して了つた。そして翌る朝は盃盤狼藉、壺の酒は空になつて居る。

醒めれば、それが夢か現か分らない程、ぼんやりとして居る事實ではあるが、閻魔のくる事は實際に違ひなかつた。

それからは屹度、二晩置きか三晩目に、彼が獨りで酒を飲んで居ると、閻魔はもう自分の家のやう、のつそりと挨拶もしないで、その居間に立ち現れ、ゆつくりと酒を飲んでは何時か姿を消して了ふ。

こんなことが度重なつて行くが、一遍でも閻魔の歸る所と、醉つた姿を見たことがなかつた。

そこで朱小明、此度來た時は彼の歸る時を突き留めて呉れやうと、丁度遣つて來た或る晩のこと。やはり同じやうに談笑しながら酒を汲み、醉つた振して炕の上、こつそりと化け閻魔の樣子を伺つて居つた。

ところが意外。流石に大膽な小明も思はずも怖氣づいて、あッと恐怖の叫びをあげる程な事件に打つかつたのだ。

上機嫌

夜も餘程更けたと見え、森閑とした靜寂、コトリと音たてて、鼠が梁を渡るのさへ冴えて聞えやうとする位、不氣味な氣が流れて居つた。

閻魔王は急にくるりと面を返すと、後の炕に醉倒れて居る朱小明の方を、ピカリと雷光のやうに射す眼光、薄眼を開けて樣子を伺つて居るのを知つたか知らぬか、また元のやうに向ふをむき小明へ背をむけて了つた。

油燈もヂヂと鳴る音が低く、油が切れ加減と見え、柱から斜に化け閻魔の横顏を照して居るが本當に木像のやう身動き一つしないで、チツとして居るばかりだ。

暫くすると彼は、消えかかる灯の方へ、身を向けて、兩手を頭上へ廻すと。冠をとりはづし靜かに側の卓上へとそれを置た。

小明は、可怪しな所爲をするので、この先、どんなことをするであらうかと、尙も一心に薄眼を開き、その樣子を伺つて居る。

その時、またヒヨイと閻魔王は何を考へたか、小明の方を振返り、ニタリと笑んだ。

「さては拙者の起きて居るのを知つて居るのか?!」と、ソツとしたが、やはり前と同じ空眠りを續けて居つた。

「どうなるものか?! 彼奴が知つてれば知つてるでいい! 起すまでは寢た振をして居つてやれ。」と云ふ氣持で、半眼に見開いたままで居ると、彼は急に再び兩手を頭上へと廻し、まるで鉢でも抱えるやうに、ポツクリと掌だらけな自分の首を、胴からとりはづして、膝の上へと持つて來たのである。

「あツ。」と、小明は流石に大膽でも、このさまを眺めて、思はずも大聲に叫ぶ所であつたが、グツと襲ひかかる恐怖を押へて、なほもその先の樣子を伺つて居つた。

自分の首を自分で、かる〳〵と引き拔いて、膝の上でまさぐつて居るさへ怪しいことで、血一滴も流れ出さないのも更に不思議。もつと妙な姿は、灯の薄い光の下、首のない胴だけの閻魔王が端然として居る恰巧で、しかも兩手は蛇のやう、膝上に乘せてあるおのれの首に據んで、樂しさうに弄んで居るのだ。

髯をしごき、髮でも梳くやうな手付を繰返して居つたが、間もなく束ねた髮毛も巧に、立派に結ひあげて了ひ、再び兩手でその首を捧げるやうにして、おのれの胴の上、ヒヨイと輕々したさまで、付根へ元通りに載せて了つた。そして冠を正して、その結髮の上へ頂いたのである。

もう何の變つたこともなく、閻魔王は前と同じ姿になつたが、三度、小明の方を振返り、意味あ

りげにニタリと笑んだ。

何も一言さへ云はぬだけ、眠つた振をして居る小明、餘りよい氣持でない。

フツと燈が消えた。油が切れたと見えて、居間は眞暗闇。

しかし今の今、あんな不思議な恐ろしい所爲を見せられたので、この暗闇の中、どんなことをするか、いよ〳〵眼が冴えて了ひ、どうしても眠ることが出きない。

するとそれから閻魔王はそこに居るのやら居らぬのやら、身動ぎの氣合さへ感じられず、黑闇が一層に深く、小明はどうしても眠れなくなるばかり。

到頭朝の光が薄白く、窓に射してくるまで、まんじりともしなかつた。

薄明りではあるが、もうそこには閻魔王の姿は見えなかつた。何時歸つたものやら、それさへ分らない。

「此度來た時に、昨夜のことを詰り、怪しい閻魔の性體を突きとめて遣りたいものだ。」と、心竊に或る決心を定めて、彼のくるのを心待ちに待つた。

すると三日目の晩。相も變らず威風堂々、髯面に風を切つて、のつそりと小明の居間へ、先達は何も無かつたやうな風で這入つて來た。

何時もと同じ、酒が進み、話がはづんで來た所で、急に言葉を改めた小明。

「時に先日、拙者は惡いこととは知りながらそこ許の樣子、醉態を見屆けたく、醉ふた振して伺つて居ると、そこ許は自分の首を……」

「はツはツはゝゝゝ」と、意外な高笑ひ、閻魔王は氣にも留めないで「あれを見たか?! 見て驚いたのぢやな?!」

「いかにも不思議、世にも珍しいことなので吃驚したが、什麼してあんな所爲が出きるのだ?!」

「什麼して? それは人間にはやれぬ。が俺も屢々お前の所で、馳走にばかりなつて居るから、何か不思議を禮に取らしてやるぞ。」

「そして夫は何を……」

「さア差し當つて、これと云ふ思ひつきも無いが、見る所、お前はまだ獨身のやうぢや。世にも稀な美人を嫁に連れて來てやらう。」

「地獄からの嫁や幽靈の女では、幾ら美しくても餘り有り難くない。」

小明も、酒に醉つてくると、怪物の閻魔王を向ふへ廻し、こんな冗談口を叩いた。

「まさか! 幾ら俺の媒介でも、地獄の女は連れてこぬぞ。はツはツはゝゝゝ。」

閻魔も醉つたと見え、頗る上氣嫌である。

百叩き

それから六日目の晩。

小明がもう見える時分と、飲み相手の閻魔がくるのを待ち兼ねて居るところへ、

「今夜は此の間、話して置た通り、日頃馳走になる禮物を連れてまゐつたぞ。」と、相變らずのつそりとした態度、しかも右の小脇、むんづと引ツ抱へて居るのは、年の頃十六七、眼も醒めるやうな美くしい女である。

どつかと卓の前、靜にぐつたりと氣を失つて居る女を置て、朱の唇、堅く喰ひしばつて居るのを割つて、たら〳〵と壺の酒、二三滴を灑ぎ入れた。

「うむツ。」と云ふ唸き聲を漏して、ほツとしたやう眼を開けた女。

「あれえ――」と蒼白な面、恐怖に顫えながら扉口へと遁げにかかつた。

「これツ、恐れることはないぞ。お前は宿世の緣、この男と一生を連れ添ふ運命なのぢや。遁げても走つても所詮は免れぬ。諦めが肝心ぢやぞ。」と、閻魔王は訓すやうに云つた。

すべてを觀念した女。ここが何處であるかさへ分らなかつた。

小明は事の意外にただ呆れて眼を睜るばかりで、頭髮と云ひ、晴れの衣裳と云ひ、それは疑ふ方のない花嫁姿。しかもこれまでに見たことのない美くしい容姿。嬶々とした風にも得耐へぬ風情から一束みもあるまいと思ふ細腰、露を含んだ愁ひの眼差。をど〳〵と羞ふ顫えがちの手では云はるるままに酌をした。閻魔王は一層によい氣嫌で、男女を殘したまま、明方近く煙のやうに消えて了つた。

話變つて、この朱小明の家から三里程離れた張家。丁度その夜、息子のために迎へた近郊近在切つての花嫁が、急に輿入れの轎のまま何れへか行方を失つて了つたので、嫁の家、婿の邸、上を下への大騒動である。

三日となり、四日となつても、花嫁の在所は一向に分らなかつた。

ところがそれから五日目、意外にも朱小明の家に、その花嫁が居ることが分つた。

すぐと婦女誘拐の告訴は、府尹の衙門へ提出されたので、澤山の警吏の手で、朱小明は役所へ拘引され、嚴重な取調べを受けることになつた。

「十王殿の閻魔王が取り持つてくれた緣であつて、決して拙者が誘拐したものでござらぬ。僞り

だとお仰るなら、先づ花嫁の方もお取調べの上、十王殿の閻魔王へお掛合下さい。」と云ふ小明の返辭。府尹はこれを聞いて、眞赤になつて腹を立てた。

「ここを何と心得る？　天下の正邪曲直を訊す府尹の判廷。木像の閻魔が婦女子を誘拐致さうか?!　愚けたことを申すな。どうしても白情致さぬに於ては、拷問にかけるから左樣心得ろ！痛い目を見ぬ內に白情したらどうだ？」威猛高に吹鳴りつけた。

「何と仰せあつても、拙者は婦女誘拐の大罪は侵しませぬ。先づ一通り、花嫁をお取調べ願ひたい。」

頑として、府尹に言葉を返した。

そこで花嫁の取調べ、朱小明と對質訊問。更に最初膽玉試しの夜、集まつた六人の友だちが呼び出され、木像の閻魔が笑つたかどうかと云ふ證據調べに移つた。

花嫁の云ふところも、小明の答へと少しの違ひもない。

「お閻魔さまが、朱小明さまとは前世から定る緣と申しました。今更となり、張邸へも嫁入られませぬ。妾として此の世での夫は、この方を置て、外にございませぬ。」

かうなると花婿側の張邸の者は二度吃驚。裁判官である府尹は大に當てられると云ふわけで、

小明獨りいい氣持で、顎髯を撫で下して居つた。

それから更に十王殿の閻魔王取調べとなつたが、それは矢張依然たる木像。何の變つたこともない。

府尹も判官としての威嚴の手前、裁判の結末がつかないので、

「朱小明！　その方、化物と往來する段、不都合至極につき百叩きに罰する。」

迷惑なわけ、馬鹿を見たのは小明だが、化け閻魔の取りもちで、世にも稀な美人を得たと云ふ陵陽地方に傳る怪奇譚。

閻魔が化けたものやら、狐狸の爲業やらそこは分らないが、これで一先づをはり。

畫舫變化仇討

ガラリと變る絹商人の啖呵

その昔、廣東の珠江は水の廓として知られてゐた。

兩岸の廓、家々には、描いたやうに綺麗な花舫が水に浮べてあつた。

皆その船には美しい妓が三四人。きらびやかに粧ひして、客を迎へ、夏の宵は殊に賑やかである。

ゆるやかな江の流れを、遊山船が往來して、舷燈の光がちら〳〵と紅く水に落ち、花舫の窓からは歌舞の聲、絲竹の音が騒がしく漏れて、數里の江上、歡樂世界を現出するのだ。今はもう旺りの夏も過ぎ、秋も暮れて、冬も押し迫つた歳暮に近く、さすがに水の廓も霜枯れ時。

旅商人の劉三は、鄕里の宜興への歸途、丁度船でこの珠江に通り合せた。

男盛りの三十四五。すらりとした背丈も細く、締つた凛々しい顏付、どこか粋な所がほの見えて、絹商人とは思はれぬ位だ。

日も暮れて間もなかつたが、寒い北風の渡る江上。弦歌の聲も流れず、淋しい位に靜かで、水面にちら〳〵と映る廓の灯だけが美しく眺められた。

船をあちこちと、花舫の間を流させながらも、舷頭に立つ、細そりした妓の媚態、江に盃を洗ふ妓が投ぐる秋波にも、狼狽てて眼を伏せて了ふ小心者らしい樣子。年頃と云ひ、身裝と云ひ、櫓を握る船夫には勿論落ちぬことだらけなので、

「旦那さん、お氣に召したのが居りませんか。」と、訊ねかけた。

「さア、始めての水の廓、ただ珍しいことに思つて居ります。」

「旦那さんは旅のお商人とは思はれない。恐ろしく物堅いお方のやうに存じますが、この珠江はお始めでございますかい。」

「はい、幼い折に鄕里を出て三十年振り、まるでこの邊のことは存じて居りません。それに嚴格一方な主人に養はれましたので、外の若者たちが遊びに行くのを、今までは鼻で笑つて居りました。何時も如來世尊の忍欲のやうに、羅密の三昧を得て居る自分を誇つて居りましたが、若い癖に佛くさい、定めし貴方などがお聞きになると、可笑しいことでございませうが、さて今となり、かうやつて廓を行くと、若い頃、何も知らずに年老つてしまつたのが、口惜しくてなりません。」

劉三の話はいかにも物柔かで、中年の女よりも落ちついて居る。

「御冗談ばかり！　旦那さんのお年では、遊びはこれからと云ふ所ではございませんか。」

「いや、もう駄目です。四十の聲を聞かうとしては、若い妓が相手にして呉れませんから。」と、淋しく笑つた。

「そ……そんな馬鹿な事がございますものか。では旅のお慰み。あつしがこれから美しい妓の居る家へ御案内を致しませう。」

「それなれば、新春樓へ船をつけて貰ひませうか。」と羞しさうだ。

「へえ、新春樓?! どなたかお馴込さんでもございますので?」

意外さうに眼を睜り、訊き返した。

「いえ、別に馴込などあらうわけもないが、珠江で一番と云はれる新春樓。そこには張と意氣地で賣り出した嫣鶯と云ふ妓の居るのを聞いてました。」

「成程! これは恐れ入りました。旦那さんもなか〳〵隅へは置けませんな。水の廓で今、賣り出しの嫣鶯姐さん。それをお名指しとは! いや旅のお方は油斷がなりませんわい。本當にお始めてでございますかい!」

「それは云ふまでもないこと! 今朝方上流から下つて來て、中繼ぎに貴方の船を頼んだ位でないか。なんで廓遊びの暇があらう?!」

「左樣ですか! ではぼつ〳〵と上りませうか。」と、櫓を握り直すと、拍子高く小半丁ばかり大きな花舫の側、ゴトリと船を寄せて、

「姐さん、お客さんですぜ。」

「あらッ、入らッしやいまし。」と、馴込のやうに蓮ッ葉な聲、莞爾と艙へ現れた妓二人。

「さアどうぞ此方へ!」

劉三を、美しく飾つてある胴の間へと導き入れた。

紫壇の卓を前に、腰を下した彼の右左。二人の妓が靠き込むやうにして、

「あの嫣鶯姐さんをお知らせするのですね。」

劉三はポッと面を染めて背首いてみせた。

「本當に此方は從順しくて居らつしやるわね。ちつともお騒ぎになるのではなし、お酒だつてさう召し上りもしないし……」

この話、送りの船夫は小首を傾げて、聞いて居つた。

その内に酒は來た。注文の肴の二品三品。

「どうしたのでせうねえ。姐さんは?」

「どこかお座敷なの?!」

小半刻を待つても、嫣鶯の姿が見えないので、取りまきの妓たちがヤキモキと氣をもみ始めた。

「旦那さんのお座敷と云ふことをお仰つたの? それで什麼したのでせうか?」

「本當に遲いわね。」

劉三は首垂れて、だん〳〵と沈んで行つた。

「旦那さん。さアお一つ、お熱い所を如何？」

「いえ、もう酒は澤山です。」

力ない聲で、素氣なく手を振つた。

「まアさうお仰らずに、お一つお重ねなさいましよ。もう嬌鶯姐さんもお見えになりますでせうから……」

妓たちが、濕りがちな座敷、引き立たせやうとして、べちやくちやと喋べれば喋べる程、劉三の心はだん〳〵と淋しい方へ引き入れられて行く心地がした。

窓の外、暗い江の流れ、舷側を洗ふ波の音さへ、さら〳〵と冴えて聞える。

一時の上を過ぎたであらう。

「あらッ姐さんが……」と妓の一人。皆が振向く瞬の間の口。すッと立つた美しい姿。强かに醉つたと見えて、ふら〳〵する身を柱に支へ、キッと眼を据えながら、

「まア、旦那さんのお座敷ですか。それなら今夜は御免を頂きますわ。御覽の通りに醉つて居りますので、どんな失禮をするかも分りません。」

「姐さん！　旦那さんは一時前からお待ちかねでした。さア此方へ居らしつて……」と、妓の一人は席を分けやうと立ち上つた。

「餘計なことをおしでないよ。私は廓で通る我がまま者。旦那のお座敷は嫌でございます。虫が好きませんと云つたなら、餘りに實も蓋もない話。よく御贔屓にお呼び下さりはするが、嫌な座敷は嫌でございます。これからもあること、旦那さん、二度と私のやうな者、決して呼んで下さいますな。」

酒が云はすか、他の者がハラ〳〵する位な愛憎づかし、キッパリと云ひ放ち、くるりと背を向けて、そこを去らうとした。

「嬌鶯、待てッ。」

耐りかねたか、劉三も面をあげて、

「そ……それは酒が云はすのか、それともそなたが本心から云ふことか?!」

「オホ、、、、酒が物を云ひますか?!　嬌鶯は醉ふても心は失ひませぬ。」

「さうか。」と、すつかりと氣落ちしたやうに「もう私もそなたには何も云ふまい。二度とここへ

は足踏みもしまい。この年になつて始めて知つた美しい女の心。それ程に無情いものとは知らなんだが、私は決してそなたを露恨みとは思ひはせぬ。世の中にそなたのやうな美しい女の居ることを知つただけでも、私はどれ程うれしいか知れぬ。私は知つての通りのしがない旅商人。そなたを一眼見てから魂も身に添はず、郷里へ歸る途中で思はぬ滯在。二十餘年の身を粉に碎いて働いた金も大部分は費ひはたし、此所にはもう十兩しか殘して居らぬ。今更となり、これを持つてのめ〳〵と國へ歸ることもよう出きまい。この金、少しではあるが、そなたに餞別の印に進ぜる程に、どうぞ好き自由に使つて貰ひたい。」と、劉三は懐中にした小さな金の紙包。卓の上へと靜に置いた。

「……」

嫣鶯は言葉なく、ヂツと彼を凝視て居る。

「これで私もさつぱりと致した。もう郷里へ歸るまでもない。もう一度、旅から旅と遊ふて、そなたと遇ふた日のことを思ひ出して生活して行かうよ。」

「そのお金、私はいりませぬ。どうぞお收め下さいまし。」

嫣鶯は切なげに、面を伏せて云つた。

「どうしてぢや。私がもうそなたとは二度と遇はれぬ別れの贈り物、これとても受けては呉れないのか。」

劉三は、席を立つて、嫣鶯の側、その袖をぐツと握んで、

「これッ嫣鶯、私が心を籠めた最後の餞別、これだけはどうぞ快う受けて呉れ。」悃ぶやうに涙を呑んだ。

「幾らそなたから今日まで、逢ふたびつれなくされやうとも、少しも恨みには思はぬが、これ……これだけは受けて貰はぬと……」

「どうぞ旦那さん、そんなことは……」

「では、どうあつても！　さうか。それでは仕方がない。」

劉三は、その金包。窓を開けると、暗い河面を目がけて、ポンと擲げすてた。

「まア旦那さん。」妓共は吃驚した。

「金さへ無ければ、煩惱の犬、心を亂すこともあるまい。嫣鶯に嫌はれた金、手に取るも汚らはしい。それでは嫣鶯、そなたともこれで別れぢや。いろ〳〵と世話になつたが、そなたも餘り深酒などせず、身體を大切にな。」

涙を呑んで、つッとその場を立つと、劉三は妓たちの留めるを振拂ひ、舫の艫。

「どこか靜かな所へ廻して、今夜は泊るとしやうよ。」涙に聲がかすれて聞えた。

「へえ、もうお歸りで。」船夫の聲が暗に高く響いた。

嫣鶯はヂッと立つたまま、身動きもしないで、何ごとをか考へて居つた。面は灯の映らうほどに涙にぬれて。

やがて劉三の船は、櫓音ゆるく、そこを暗の河下へと消えて行つた。

「旦那。うめえ芝居をお打ちなすつたね。」と船夫は、肚から絞り出す底力のある聲。

「何だと！」キッとなつた劉三。先刻までの女らしい、弱々しい調子はガラリと變つて、

「手前、俺の底を割らうと云ふのか？」

「どう致しやして。ヘッへゝゝゝ、こちと等はたかが船頭。お前さんのやうな芝居は打てませんので、感心してゐますのさ。」

淋しい芦の茂み。暗い汀からバタ〳〵と急に飛立つ鳥の羽搏きがして、キキと空に流れた怪しい鳴聲。兩人はお互ひに暗闇の中、肚を探り合ふやうに片唾を呑んだ。

父親に飲した毒藥斷腸草

白河の支流を遡り、萬里の長城に沿つた山西と直隷の境界。太原府へ通ずる一本街道。

冬の黄昏近く、弱い殘照を背に浴びて、とぼ〳〵とたどる父娘連れ。

父は五十の坂を越した位であるが、病み上りのやうに窶れて、見るから痛々しい姿。旅囊の振分け、肩に重さうで、杖を頼つて覺束ない足を運んで行く。

その娘であらうか。年の頃十一二位な女兒。可愛らしい顏立で、父の手を引くやうに、これも疲れ切つた足を重さうにして行くのだ。

「お父さん。もう少し行くと三里莊の村へまゐります。そこには宿屋があるさうでございますから……」

「おう、お前も今日は定めし疲れたことであらう。前の村で宿を取ればよかつたが、餘りに日脚が高いので、無理をしたのが反つて惡かつた。」

「いえ、私よりお父さんがお疲れでございませう。もう三里莊も目近でございます。ひどくお苦しいやうならば、暫くこの邊で休んでまゐりませうか。」